探偵たちの幸せな人生

咲蘭保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
探偵たちの幸せな人生

【Ｎコード】
Ｎ６６３６Ｗ

【作者名】
咲蘭保

【あらすじ】
これは組織との戦いが間近に迫っている、というところからのお話。
メインはコ哀・新志ですが平和やその他の恋の行方を書いています。
とにかく哀ちゃん（志保ちゃん）贔屓なので、
新蘭派の人は避けられた方がいいと思います。

※一応、蘭も幸せになる予定です。

組織ｖｓ探偵たち１（前書き）

コナンになってから一年後・・・

組織ｖｓ探偵たち１

工藤新一が江戸川コナンになったあの日から一年が過ぎた。

☆☆☆

コナン達三人はジョディに車で阿笠邸まで送ってもらっている。
そんな中、服部が灰原に聞いた。
「なぁ、ねーちゃん」
「なに？」
「ねーちゃんは怖ないんか？平然としてるけど」
「あら、平然としてるつもりはないけど焦るよりはマシなんじゃないかしら？
それに私なんかよりあなた達のほうがビクビクしてるんじゃない？　引き返すなら今のうちよ？　」
「アホか。そらちょっとくらい　緊張してるけど
今更引き返すようなめめっちいマネはせーへんで。　工藤とちごて」
「おい！！服部。
俺がいつそんな引き返すようなマネしたんだよ。
だいたい、今引き返したとしても現にあいつらはすぐそこまで来てるんだ。もうあとは決着つけるだけだろ。」
と言ってコナンは服部を睨みつける。

ジョディはコナンの正体を知っている。

先日、コナンと灰原がＦＢＩの一部の人たちに全て話したからだ。

これから命を懸けて一緒に戦う人たちには全てを話さなければ・・・

と思い

コナンと灰原の正体、アポトキシンのこと、灰原の姉である宮野明

美のこと、

なぜ俺達が組織に命を狙われ決着をつけようとしているのかなど

・・・全てを話した。

今までの行動からして2人にはなにかある、と思っていたらしいが

その事実は予想以上に驚くべきことだったらしく、話を聞いていた

人達はしばらく

言葉を発することができなかった。

その沈黙をやぶるように灰原が言った。

「私は・・・私の作った薬は多くの人を殺してしまった。

本当はこんなところにいてはいけないということは、ちゃんと

分かってます。

この戦いが終わったら私はちゃんと処分を受けるつもりです。

でも、今回のことは私も行って決着をつけたい。殺されたお姉ちゃんのためにも。」

灰原はあのとき俯いていった。

姉のことを思うと気持ちが抑えられないのだろう。

灰原の肩が小さく揺れていた。

そしてコナンは思った。

ーーーーーー絶対にこいつを守らなければーーーーーーーと。

FBIからの答えも灰原の気持ちを考え

戦いがおわってから今後のことを考えようと言ってくれた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そんなことを考えているうちに車は阿笠邸の前に着いていた。

ジョディにお礼を言って帰ろうとしたとき

「予定通り3日後に行くつもりだけど何かあったらまた連絡するから」

と言ってジョディも帰って行った。

そう・・・・戦いは3日後。

組織ｖｓ探偵たち１（後書き）

初めての投稿です。
へたっぴな文章ですがこれからも読んでください。

組織ｖｓ探偵たち２

先日のＦＢＩとの会議から２日たち

コナン達は博士の家で明日のために身体をやすめている。

コナンと服部までなぜかいる。

探偵事務所で休めばいいのに、と灰原は思ったのだが

蘭は空手の合宿、小五郎は町内会の旅行に行っていてしばらく帰ってこないし、

何より、３人で固まっているほうが何かあったとき動きやすいから、

ということらしい。

灰原はいま地下室にいる。

アポトキシンの最終チェックのためだ。

（やっと工藤君を彼女の元に返せる。・・・ごめんなさいね。工藤君。

あなたと毛利さんとの大事な時間を奪ってしまって。でも、もうこれからは幸せに生きて。

お願いだから。私はあなたを死なせない――――――

工藤君が私に言ってくれた言葉。「俺が守ってやる」

うれしかったわ。

次は私があなたを守る。何があっても。）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

とうとうこの日がやってきた。

コナン達三人はＦＢＩの車に乗って組織がいるという建物の前にいる。

そして・・・

「行くわよ」

ジョディの言葉でＦＢＩと三人は一斉に動きだした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

組織の建物の中に入った。

薄暗くて気味が悪い。今にも敵が来そうで呼吸も乱れる。

それは三人とも同じようだった。

いたる所で銃声が聞こえてくる。
そしてある部屋に入ったとき・・・
聞きなれた、最も嫌なあの声が聞こえてきた。
「久しぶりだな。シェリー」
「ジン！！」
忘れたくても忘れられないこの声。
何度も夢にでてきたこの顔、不気味な笑み。
それが現実となって今、灰原達3人の前に立っている。
恐怖で立っているのもつらい。
「無様な姿だ。小さくなってから俺達の様子を探ってたんだろうが
顔がひきつってるぞ。今になって組織を抜け出したことを
後悔してるんじゃないのか？だが、今更後悔しても遅い。
その様子だと隣にいるのは工藤新一だな。
お前も子供の姿になっていたのか。
そしてシェリーを匿って俺達のアジトへ乗り込んできた。そうだろう？」

「あぁ、お前達と決着をつけに来た。
今、周りにはＦＢＩが大勢いる。お前たちを牢屋にぶち込んでやるよ。」
「あんたら組織のメンバー、一人残らずなぁ。」
「服部平次か。だが俺たち組織はそんなに簡単には殺られねーよ。
例え、名探偵と言われるやつだったとしてもなぁ。
俺達が牢屋に入る前にお前たちをあの世へ送ってやろう。」
そう言って、ジンは灰原の前に拳銃を向けてきた。
そして灰原もジンに向かってＦＢＩに持たされた拳銃を向けた。
コナンも服部も持っている拳銃をジンに向けている。
パン！！パン！！と音がなった。
苦しんでいるのは灰原でもジンでもなく・・・
コナンと服部だった。
撃ったのは組織のメンバー、キャンティとコルン。
気づかなかった・・・他にもいたなんて。

組織の2人はまだコナンたちを狙っている。

（フッ・・・シェリー。お前のその恐怖におびえた顔見たかったぜ。）

「シェリー。お前に人殺しはできないだろう。

まだ、外の世界を知らない赤ん坊を殺しただけで、あんなにも自分を責め続けたおまえがなぁ。」

「！！」

「殺せないだろ。昔の男を。

まぁ、いい。先にこいつらの死を見とどけさせてやろう。」

ジンの表標的がコナンと服部に代わった。

そして、パン！！パン！！パン！！

銃声がなる。

「灰原ぁぁぁぁぁ！！」

灰原はコナンたちを庇うようにジンの前に立った。

灰原が撃たれた・・・

だがまだ息はしている。

死んだのは・・・

ジンだった。

灰原が撃たれる直前、横から弾が飛んできた。

それがジンの身体に撃ち込まれ

最後の力で銃弾を放った。それがコナン達を庇った灰原にあたった。

ジンを撃ったのは、ベルモットだった。

「クールガイ、早くシェリーを連れて逃げなさい。間に合わないわよ。」

だが、コナンは腕を、服部は足を撃たれて灰原を抱えて逃げることは出来ない。

そんな時、何者かが現れた。

「その少女は俺が運ぶ。お前達は自分で行けるな?」

赤井秀一だった。

コナンがキャンティとコルンを目で探しているのに赤井が気づく。

「あいつらはさっき見かけたとき死んでいた。自決だ。

俺が確認したから間違いない。

他の組織の奴らも死亡、またはＦＢＩのもとにいる。

心配はない。とりあえず、出るぞ」

そう言って４人は外へ出た。

組織ｖｓ探偵たち２（後書き）

少しは前回よりも読みやすくなりましたかね？

組織つぶれてよかった・・・

まぁ、あっさりすぎた気もしますが・・・

そこは気にしないでください！！

組織ｖｓ探偵たち３

コナン達は組織との戦いを終え、ＦＢＩの車で近くの病院に向かっている。

コナンは腕を、服部は足を撃たれてはいるが幸い自分達で動くことはできる。

ただ、灰原はジンに死ぬ間際に腹部を一発撃たれ、服から血が染み出している。

急がなければ、間に合わない。

（灰原、もう少しだ・・・死ぬなよ・・・。）

☆☆☆

「まだ、どうなるかは分からん・・・
けど、こんなとこで俺らがウジウジしとったってどーもならん。
俺らはあのねーちゃんが助かるのを信じて待つだけや。」
そういうと、服部は博士の手にあるものに気づいた。
「じーさん。それなんや？」
「これか・・・これは哀くんからの手紙じゃ。出発する前に入れておいたんじゃろう。
いつも車の鍵をしまってあるところに入っておった。
新一のぶんもあるぞ。
哀君・・・手紙のなかにまでわしの身体を気遣うことばかり書いておって。」
博士は涙を目に浮かべつつ言った。
その博士への手紙の中にはたくさんの感謝の言葉と
博士には長生きしてほしいという言葉が書かれていた。
コナンも灰原からの手紙を開いた。
「工藤君へ

工藤君がこの手紙を読んでいるころは私はもうこの世にいないのね・・・

でも、私は楽しかったわ。博士がいて、工藤君や吉田さんたちもいてくれて。

私にはもったいないくらいだった。

そして、あなたは毒薬を作っていた私を責めるどころか

私を守る、と言ってくれた。

ホントは生きて、罪を償わなければいけなかったけど

ごめんなさい。償う前に死んでしまって。

それと、完璧な解毒剤ができたから飲んで、彼女のところに帰ってあげて。

今まで本当にごめんなさい。

あなたの時間を奪ったこと、組織とのことに関わらせてしまったこと、

どれだけ謝っても許されないけど

本当にごめんなさい。

そして、今まで守ってくれてありがとう。

解毒剤は私の机の一番上の引き出しにはいっているわ。
これで身体も縮むことはないはずよ。
元の身体に戻ったら蘭さんを幸せにしてあげて。
じゃぁね。探偵さん
灰原哀」
コナンはこの手紙を読んで涙がでた。
すると、手術中のランプが消え、医者が出てきた。
「手術は無事終わりました。命に別状はありません。
しばらく入院をして、安静にしてるとまた今まで通り暮らせるでしょう。」
その言葉を聞いた俺達は安心して、涙を拭き、いすに腰掛けた。
「よかったなぁ。工藤、じーさん!!
あのねーちゃん助かって。ほんなら俺、安心したら腹減ってきたから
下の売店でなんか買うてくるわ。」
そう言って、服部は松葉杖をつきながら去って行った。

☆☆☆

「そう・・・ちょっと待って。服部君も撃たれたって・・・」
この場にいない服部を灰原は心配したが、すぐにこの声を聞いて安心した。
「大丈夫や、ねーちゃん。俺は足撃たれただけや。ちょいと動きにくいけどな。
ほれ、おにぎり買うてきたったで。工藤とじいさんのぶんも。」
はい、と笑顔でおにぎりを差し出す服部を見てコナンは聞いた。
「下の売店に行っただけにしては遅かったな。何かあったのか?」
すると服部が怒ったような顔になって
「何もなかったんや。何も・・・。俺の好きな牛肉が入ったおにぎりがなかったから
病院の外のコンビニに買いにいったんや。」
コナンたちは苦笑するしかなかった。
「それよりねーちゃん。身体なんともないんか?もう少しおとなしーしとかんとなかなか治らへんで。」
コナンは思った。多分灰原も同じことを思っているだろう。
もう少しおとなしくしなければいけないのは服部、お前だろう・・・

と。

博士と医者が部屋に入ってきた。

検査の結果、今のところ問題はないということで

今日のこととこれからのことは明日話す、と決め、

博士は家に帰り、服部とコナンは自分達が入院している部屋へ戻り

それぞれ身体を休めた。

灰原哀の過去（前書き）

組織との戦いから一日後

灰原哀の過去

組織との戦いから一日たち、

灰原の病室には灰原、コナン、服部、博士、ジェームズ、ジョディが集まっていた。

「哀チャン、もう身体は大丈夫？」

「えぇ、大丈夫よ。」

「それじゃぁ、話をするとするか。

まず、組織の生存についてだが、やつらはほとんどが自殺している。

組織のメンバーの一人一人がデータのようなものだからな。

やつらはそんなものを残すヘマはしない。

ジンと呼ばれるやつはベルモットが撃った弾によって死んだ。

ウォッカの死亡も確認された。

ボスも頭を拳銃で撃ち自殺していた。

組織のメンバーだったベルモットはずいぶんと前にＣＩＡの水無君と組んで

組織をつぶす作戦をひそかに立てていたらしい。
データはベルモットがコピーして今は我々の手元にある。
そして、そのベルモットは今ＦＢＩに保護されている。
彼女は以前に人を殺したことがある。いずれは警察のもとに行くことになるだろう。
では、今後のことだが、
ＦＢＩの一部の人間はしばらく日本に残ることにする。
まだ組織全員の死亡または逮捕が確認されたわけではないからな。
もしかしたら残党が残っているかもしれんしな。」
コナン達はジェームズの話を黙って聞いていた。
そして灰原が口を開いた。
「私の処分はどうなるの？」
「哀チャンの処分はなしよ。あなたは直接、人を殺していたわけじゃないし
それに、十分罪を償ったじゃない。
今回のことだって哀チャンがかばってコナンくんたちが助かっ

たわけでしょ？

哀ちゃんの助けなしでは組織をつぶすことは出来なかったかもしれないわ。」

「でも・・・直接じゃなかったとしても、多くの人を犠牲にしたのは事実。

罪を償わないといけないわ。」

「じゃぁ・・・哀チャンは亡くなった人たちの分まで精一杯生きて、幸せになる。

こんな償い方でどうかしら。」

「そんなの、償いでもなんでもないじゃない。

私は今でも幸せよ。私にはもったいないくらい。私にはこれ以上幸せになる権利はないの。」

そう言って灰原は俯いた。

「ねーちゃん、アホか。幸せになるんに権利もクソもあるかいな。

ねーちゃんは幸せにならなあかん。ねーちゃんのねーちゃんのぶんまで。

今が幸せやってゆうなら、もっともっと幸せにならなあかん。

これは権利やない。ねーちゃんの義務や。

みんな願っとる。あんたが幸せになるんを。
ここにおるＦＢＩの人らも、じーさんも、俺も、工藤も。
ねーちゃんが幸せで笑ってくれたら俺らも幸せなんや。」
服部の言葉に灰原は涙をながした。
「私、もっと幸せになっていいの？」
「あぁ」「当たり前やん」
コナンと服部は答えた。
「じゃぁ、私達はそろそろ帰るから。もし何かあったら知らせてね。
それと、２人とももとの姿に戻ったらちゃんと連絡してね。
一回くらいは２人の本当の姿、この目で見てみたいし。
それじゃぁ、またね。」
そう言って、ジェームズとジョディは病室から出て行った。
２人に続いて博士も見送りしてくると言って出て行った。
そして灰原とコナンと服部の三人になった病室は静まりかえっていたが

服部がその空気を壊した。

「なぁ、ねーちゃん一つ聞いていいか。気ぃわるうしたらすまんけど・・・

あんときジンっちゅうやつが言いよったこと・・・

あれどういうことや？赤ん坊がどうのこうの・・・って。」

灰原はなぜかコナンを一目見て、また下を向き、言った。

「私が組織にいたころ子供ができた。相手は・・・ジンよ。」

それを聞いてコナンと服部は目を見開いた。

灰原はそれに気づいているのか気づいていないのか分からないが、話を続ける。

「私はジンとの子なんて産むつもりはなかった。

産まれてきたってどうせ私やおねーちゃんのように組織に入れられて

辛い思いをするだけ・・・

辛い思いをするのは私だけでいい・・・って思った。

それに父親がジンだなんていやだった。

だけど、産みたいっていう気持ちも少しはあったの。

子供がそばにいればいつもの地下室でも孤独感はなくなるんじゃないかって。

どうするか迷っているとき私は倒れたの。それは精神的ストレスだった。

そして倒れた衝撃で子供も死んだ。

産まないつもりでいたのに、実際に死んでしまってからは

寂しくて、悲しくて、自分を責めた。

どうして守ってあげられなかったんだろうって・・・

それと同時に私が殺した・・・っていう事実に耐えられなくなって・・・

・・・それから何日か後に次はおねーちゃんが・・・」

「灰原、その先はもう言うな。言わなくていい。」

コナンは灰原の肩をつかんで灰原の言葉を遮った。これ以上、灰原に話をさせたくなかった。

ふと、病室の扉の方へ目をやるとそこには博士が涙を流して立っていた。

「哀君・・・なんで一人で抱え込んでおったのじゃ・・・」

「言いたくなかったんやろ。すまんな、ねーちゃん。こんなこと聞いてしもて。」

「なぁ、灰原。俺はこれからもずっとお前を守るから。

もう一人で抱え込むなよ。言いたくないことは言わなくていい。

けど、俺に出来ることがあるならちゃんと協力するから。

もう、我慢だけはするなよ。」

灰原は顔を上げて

「ありがとう。でも、もう大丈夫だから。」

そう言って優しく微笑んだ。その笑顔にコナンも灰原に微笑んだ。

（工藤・・・お前・・・）

服部のなかでひとつの疑問が生まれた。

灰原哀の過去（後書き）

服部の疑問とはなんでしょうか・・・

コナンの気持ち（前書き）

組織との戦いから一日後～二日後

コナンの気持ち

灰原の気が落ち着いたのでコナン・服部・博士は灰原の病室を出て行った。

博士は「それじゃあ、明日も来るから大人しくしてるんじゃよ。」と言って自宅へ帰って行った。

コナンと服部は病院のベンチに座り、話している。

「あのねーちゃん、いろいろなもん抱えとったんやなぁ・・・

あれは、誰かが守ってやらんと危ないで。ほんまに。」

「あぁ。あいつは今までずっとがけっぷちを歩いてきたようなものだからな。

くっそ・・・ジンは・・・あの組織はいつまで灰原を苦しめるつもりなんだよ!!」

コナンは怒りを抑えきれず、静まりかえった病院で叫ぶ。

「なぁ、工藤。お前いつまであのねーちゃん守るつもりなんや?」

「はぁ?いつまでって・・・そんなもんに期限はねーよ。

それに、俺は今まであいつを守るって言い続けてきた。

だけど、実際は俺が灰原に守られてたんだよ。

組織との戦いの時、あいつは俺達をかばって撃たれた。
解毒剤だって、俺が蘭のもとに帰れるように作ってくれた。
いつだって守られてるのは俺のほうだ。だから、今度こそはあいつを・・・
灰原を悲しい過去から守ってやんねーといけねんだよ。」
「じゃぁ、一生守っていくつもりなんか？」
「これからのあいつを守れるのは灰原の過去を知っていて、同じ境遇にある俺しかいねーよ。
これまでは守れてなかったけどな。
今まで守られてきたぶん、俺がしっかり守る。」
「あぁぁ、言い切ったで。お前のその自信はどっからくるんや？
大体、一生守るって、毛利んとこのねーちゃんはどうするんや。」
「蘭には・・・あ・・・」
「やっと気付いたか・・・さっきから工藤、あのねーちゃんのことしか頭になかったやろ。
病室でもねーちゃんに『ずっと守る』とか言いよってからに・・・

・

今のお前は毛利のねーちゃんとちっこいねーちゃん、どっちを守りたいねん？」

「どっちを・・・って・・・・」

「二股かける男は最低やで。」

（そんなこと俺だってわかってる・・・だけどどっちかを選ぶなんて・・・・

蘭は俺の帰りを待ってる。その姿をコナンの目でずっと見ていた。

でも、蘭には蘭を守ってくれるやつがたくさんいる。

灰原には・・・同じ体験をした俺しかいない。）

「俺は・・・やっぱり、灰原を守らないと・・・」

「ちゃうやろ？守らんとあかんやなくて、お前が守りたいんやろ？

ずっとそばにいて支えてあげたいんやろ？

工藤、お前さっきのねーちゃんの話聞いて、嫉妬してたやろ？

あんときの工藤の顔は怒りだけやなくて、悔しさもまじっとったように見えたからな。

お前が守りたいんは誰や？お前が好きなんは誰や？」

「・・・・・灰原。」

これは同情でもなんでもない。コナンの口は自然と動いた。

（俺の中でこんなにあいつの存在が大きくなってたなんて・・・

いつからだろう。今回だけは服部に感謝だな。）

「よし！！よーゆーた。ほな、最後の決着つけにいこか。」

「は？もう組織との決着はついただろ？」

「ちゃうちゃう。ねーちゃんと決着つけんのや。

あのねーちゃん、無駄に顔がいいからすぐ他の男に狙われんで。

子供の時からあんなにかわいい顔やったら元にもどったら

どこからでも声かけられるんやろなぁ。」

「クっ・・・」

「どうするん？告るんか、告らんのか。」

「・・・いや・・・今はまだできねーよ。蘭にも本当のこと話さな

きゃならねーし。」

「せやなー。まぁ、工藤はそういうやつや。そういうことちゃんと

せな気ぃすまんねんやろ。」

「それより服部、オメェこそ和葉ちゃんとはどうなってんだよ。」

「和葉ぁ？和葉がどうかしたんか？」

（こいつ・・・まだ気付いてなかったのか？

人の気持ちは分かるくせに自分の気持ちはわかんねーのかよ！

！まぁ、それは俺も一緒か・・・）

ハァ・・・とため息をついた。

「どうしたんや、工藤？」

「いや・・・結局俺達は似たもの同士だな、と思ってよ。」

「似たもの同士ぃ？？なんやそれ。わけわからん」

「まぁ、気にするな。そろそろ戻ろうぜ。」

「せやな。まぁ、明日は退院やし。今日は売店のツナマヨで我慢したろか。」

その後、２人は売店でおにぎりを買い、それぞれの病室に戻って最後の入院生活を過ごした。

☆☆☆

翌日の朝

トントン！！

「灰原ーはいるぞーー」

・・・返事がない。

（まだ寝てるのか？）

静かに灰原の病室のドアを開ける。

コナンの目に映ったのは少年探偵団の円谷光彦だった。

「あ！！コナンくん！！」

シー、と人差し指を口の前に立て、小さな声でコナンの名前を呼んだ。

コナンも小さな声で光彦に尋ねた。

「どうしたんだ？こんな朝はやく・・・」

「今日は博士に連れられて歩美ちゃんと元太君とお見舞いに来たんですよ。

心配で心配で・・・博士からさっき話を聞いて急いで来たんです。

歩美ちゃんと元太君は今、下の売店に行ってます。

博士はコナンくんと服部さんの退院の準備を手伝ってくるとか言ってましたけど・・・」

(準備くらい一人で出来るっつーの!!ったく・・・子供じゃねーんだから)

「それにしてもかわいいですねーー灰原さん／／／／／／

普段は大人びた綺麗な顔してますけど、寝ているときの顔は子供っぽいですね。」

「はは・・・そうだな」

(確かにな・・・そういえば、光彦も灰原のこと好きなんだよな。

はぁ・・・ライバルか。いくら実年齢が１０歳くらい違ったとしても光彦も男だからな・・・)

コナンと光彦が灰原の寝顔を見ていると

「あーーーー!!コナン君と光彦君、だめだよ!!」

大きな声が病室に響いた。だが、幸い灰原は目を閉じたままだった。

歩美と元太と博士と・・・服部が入ってきた。

コナンの横で歩美が灰原を起こしている。

「哀ちゃん!!起きて!!」

灰原が目をさました。

「ん・・・？吉田さん？？どうしたの？」

「今ね、コナン君と光彦君がね哀ちゃんの寝顔見ながらニヤニヤしてたんだよ。

だから、2人が寝てる哀ちゃんの顔にマジックで落書きするんじゃないかと思って・・・」

（しねーよ、んなこと・・・）

すると上から

「へーーーニヤニヤねーー。何をたくらんどったんや？んーーー？ゆうてみ。坊主」

「なにもたくらんでないよ。平次にーちゃん。ははは・・・なぁ、光彦・・・」

「ええ・・・ただ、灰原さんの寝顔がかわいくて見ていただけです。／／／／／」

その言葉を聞いて灰原はコナンだけをジト目で見た。

（はぁ・・・なんで俺なんだよ）

「工藤、はよ告らんとほんまに他の男にとられてまうで。

しかも、ライバルはめっちゃ身近におるやんけ。

あの光彦って坊主、めちゃめちゃねーちゃんのこと好きやっちゅうオーラだしてんで。」

この言葉はコナンにしか聞こえなかった。

「それより、コナンくんも平次おにーさんも哀ちゃんつれてどこ行ってたの？

哀ちゃんが拳銃で撃たれて怪我するようなとこにつれて行かないでよ。

私、すごく心配したんだから。」

「そうですよ。僕も心配しました。」「俺もだぞ。」

コナンと服部は小学一年生に怒られた。

その光景を見て、灰原は笑っている。

「ありがとう。みんな。でも、あそこには私が行きたいって言って無理して連れて行ってくれたの。

なんか、おもしろそうな建物だったから。

それに、２人はいろいろと私を守ってくれていたわ。

だからもう大丈夫よ。」

怒られていた2人は灰原のその優しさに感謝した。

「そうですか・・・でも、次は僕が命をかけて灰原さんを守りますから。」

「ふふっ。ありがとう。円谷くん。」

その笑顔と言葉に光彦は頬を赤らめた。

「そうね。今度私になにかあったら円谷くんに守ってもらおうかしら。」

「お、おい・・・灰原・・・」

「なに?」

「あ・・・いや・・・なんでもねーよ。」

「そう」

コナンの腕が引っ張られ、耳打ちされた。

「小学生相手になにムキになってんねん。嫉妬は男の醜いことのベスト3にはいんで。」

(誰が考えたんだよ。そんな順位・・・

服部だって和葉ちゃんが他の男のの腕に抱きついただけでずいぶん嫉妬してたじゃねーか。)

そして、しばらくして

明日またお見舞いにくると言って、コナンと服部は退院し、

博士と少年探偵団たちと一緒に車で帰って行った。

コナンの正体（前書き）

組織との戦いから二日後

コナンの正体

「蘭ねーちゃんただいまー」

毛利探偵事務所に勢いよく扉を開けてコナンと服部が帰ってきた。

「ねーちゃんお邪魔すんでー」

蘭は一週間ほど空手の合宿、小五郎は町内会の旅行に行っていたので

コナン達が怪我をして入院していたことを蘭が知ったのは

2人が帰ってくる少し前だった。

「ちょっと、コナンくん！服部くん！どこ行ってたのよ？

なんで銃で撃たれるようなところ行ったのよ。しかも哀ちゃんまで連れて。」

蘭が玄関まで走ってきた。

「あ・・・いや・・・」

「すまんなー、ねーちゃん。なんか変わった建物があったから

入りたくなったんや。俺は探偵やからそういうとこに興味あってなー

そしたら、この坊主もあの灰原っちゅうねーちゃんも行くとか

ゆーから

仕方なく連れてったんや。その結果がこうなったちゅうわけ。」

「そう・・・。まぁ、みんな助かっただけでもよかった。

お茶入れるから、ソファーにでも座って待ってて。」

まだ、少し納得がいかないと言うような顔で、蘭はキッチンに行った。

「工藤、お前いつゆーんや？ほんとのこと・・・

もう、組織もつぶれたし、ゆーてええんやないか？」

「あぁ、とりあえずは蘭だけに話す。

誰にも言わないように言ってからな。

まだ、組織の残党が残ってるかもしれねーから。」

「そか。ほんなら、工藤がねーちゃんに話すときは俺は出て行ってやるから

ちゃんと話すんやで。あのちっこいねーちゃんのことも。」

「あぁ、わかってる。ちゃんと話すよ。」

「ほな、お茶もろたら俺行くから。」

「え・・・今!?」

「早いほうがええやろ。はよせな毛利のおっちゃんも帰ってくるやろし。」

そういい終わると蘭がお茶をもってきた。

「はい、お茶。ところで哀ちゃんは大丈夫なの?まだ入院してるんでしょ?」

「あーうん。今はまだリハビリしてるけど、少しは歩けるようにもなったし

あと三週間くらいで退院できるって先生も言ってたから大丈夫だよ。」

「よっしゃ。ほな俺出かけてくるわ。」

服部は急いでお茶を飲み干した。

「また、どこか行くの?」

「ちょっとな。和葉にも電話せなあかんし。ねーちゃんお茶ごちそうさん。」

「もう危ないところには行かないでよ?」

「分かってるて。じゃぁ行ってくるわ。」

「行ってらっしゃい。」

服部の行動の早さにコナンは呆れたが、せっかく服部が気をつかって話す時間をくれたのだから話さなければ・・・と、前に出されたお茶を一口飲んで

落ち着いた声で話始めた。

「蘭ねーちゃん・・・ちょっと今回のことで大事な話があるんだ。」

「・・・なに？」

いつになく真剣なコナンの表情に蘭は少しとまどった。

「僕・・・いや俺の正体のことだが・・・これから言うことはまだ誰にも言わないでほしい。」

「う・・・うん。」

（どうしたんだろう急に・・・コナンくんの正体？）

「俺は、工藤新一だ。」

「！！」

（・・・どういうこと？）

「蘭と2人でトロピカルランドへ行った日、蘭と別れてから

俺はジェットコースターに乗ってたやつらの後を追った。

それで、やつらが何かの取引をしているところを俺は目撃してしまった。

その光景を見ていると、俺は後ろから殴られ、気を失ってしまった。

そのときにある毒薬を飲まされたんだ。」

コナンはフゥと一息ついた。

蘭は黙ってコナンの話を聞いている。

「そして、俺の身体は子供の姿になってしまった。その姿が今の俺だ。」

「・・・じゃぁ、コナンくんは新一って事？」

「あぁ。今まで黙ってて悪かったな。やつらは組織の秘密を知った者や計画を邪魔した者は

ためらいもなく殺す・・・そして、それに関わった人まで。

だから、俺は今まで自分の本当の姿を隠して過ごしてきた。」

「でも、私に話したってことはもう大丈夫なの？」

「多分な。さっき服部は変わった建物があって入っていったって言ったけど

本当は組織のやつらと決着をつけてきたんだ。ＦＢＩやＣＩＡの人達と協力して。

それで、組織の大半は死亡し、残りのやつらも今は警察にいる。」

「でも、多分って・・・」

「それは、他に逃げたやつがいるかもしれないから・・・

今ジョディ先生たちが調べてくれてる。」

「そっか・・・じゃぁまだ安心できないね。

ねぇ、私は今コナンくんの正体を知ったけど、服部くんやジョディ先生は前から知ってたの？」

「ジョディ先生はつい最近知った。服部にはだいぶ前にばれちまったよ。

俺の正体を知っているのは服部、ＦＢＩの一部の人、博士、俺の両親、本堂瑛祐、

それと、灰原哀だ。」

「瑛祐くんと哀ちゃんも知ってるの？」

「本堂にはあいつがアメリカに行く前に話した。最初から疑ってたみたいだが・・・

灰原は・・・」

コナンはそこで躊躇った。本当のことを話していいのかどうか。

話したら、蘭は灰原のことを責めるんじゃないか・・・

「新一・・・どうしたの？」

（・・・やっぱ、言わねーとな。）

「あいつは・・・組織のメンバーだった。そして、俺が飲まされた薬を作っていたやつだ。」

蘭は驚いているが、コナンは話を続ける。

「だが、アイツを責めないでくれ。アイツは・・・灰原は悪くないんだ。

灰原は幼いときに組織に入れられた。その組織には灰原の両親も姉も入っていた。

両親は灰原が子供のときに亡くなっている。

おねーさんは、組織によって殺された。俺達の前で。」

「！！俺達の前でって・・・どういうこと？それに哀ちゃんが子供の時って・・・」

「灰原のおねーさんは蘭も知ってる。前にこの探偵事務所に依頼してきた広田雅美さん。

あの１０億円強奪事件の犯人とされていた人だ。

広田雅美の本名は宮野明美。そして灰原の本名は宮野志保。

明美さんはあのとき自殺したことになったが、実際は殺されていたんだ。

組織によってな。

それを聞いた宮野志保は組織を裏切った。

組織は裏切ったやつを生かしておかない。

だが、宮野は殺されずに、部屋に監禁された。

あいつはこれ以上組織のいいように使われたくない・・・

そこで、隠しもっていた毒薬、俺が飲まされた薬と同じものを飲んだ。

自殺目的で。

その薬を飲んだ結果、アイツは死なず、俺と同じように幼児化して組織から逃げたんだ。」

蘭はまだ整理できていなかった。当たり前だ・・・

身近な人たちの間で、自分達が知らないところで、そんなことが起こっていたなんて。

普通信じられないだろう。
だけど、コナンの姿をした新一はこれまでに見たことがないほど真剣な顔で話している。
信じてくれ、とでも言いたそうな顔で。
「私、まだよく分からないことも信じられないこともたくさんあるけど
・・・哀ちゃんも、新一も大変だったんだね。
そんな哀ちゃんをずっと新一が支えてあげてたんだ。」
「いや、支えられてたかはわかんねーけど・・・少なくとも俺はあいつに助けられてたよ。
組織との戦いの時も灰原が俺と服部を庇って撃たれたんだ。
女に助けられるってのは男として少し恥ずかしいけどな。俺はあいつに感謝してるよ。」
「哀ちゃんは、ほんとは何歳なの？」
いきなりの質問にコナンは戸惑った。
「え・・・えーと、１８とか言ってたかな。俺たちのいっこ上だ。」
「そっかぁ、それなら新一が哀ちゃんを好きになってもおかしくな

いよね。

新一がロリコンなんて情報入ってないし。」

「なっ・・・なんで俺が灰原のこと好きって知ってんだよ！！」

「その言い方はやっぱり哀ちゃんが好きなんだね・・・」

蘭はコナンに少し寂しそうな顔を向けた。

「あ・・・いや、蘭・・・わりぃ・・・待っててくれ、なんて言っておいて。

でも、それが俺の今の本当の気持ちだ。

アイツは俺が守らなきゃいけねーんだ。

俺が守ってやんねーとあいつ自分のことを犠牲にしてまで人を助けるようなやつだから・・・」

「わかってるよ。哀ちゃんのことは新一が守ってあげて。

それにね、コナンくんが新一って聞いたときから私の新一への想いは届かないってわかってたの。」

コナンは訳が分からないといった顔をしている。

「前に、博士と園子と少年探偵団のみんなで遊びに出かけたでしょ？

そのとき、コナンくんは哀ちゃんのことばっかり見てた。

そしたら、園子もそれに気づいてたみたいで

『あのガキんちょはあのこが好きみたいね。』

って・・・

それからしばらく2人のこと見てたんだけど何回も何回も

新一は哀ちゃんを見てたんだよ。

新一、気づいてなかったでしょ。自分が哀ちゃんばっかり見てるって。

あれは恋をしているひとの目だったよ。」

それを聞いて、コナンは赤くなった。

「蘭、ほんとにごめんな。」

「もーーーそんな赤い顔して言われたって、心から謝ってるようには聞こえないよ。」

（俺、今顔赤いのか！？）

「じゃぁ、これだけは聞かせて。新一は私のことどう思ってた？」

「俺は蘭のこと、本当に好きだった。」

コナンは蘭の目をみて正直に言った。

「私も！！新一のことは大好きだった！！
　これからは幼馴染として、親友として大好き。」
蘭は満円の笑顔で気持ちを言った。
話が終わりタイミングよく服部が帰ってきた。
「もう話終わったか？」
「服部くん！！」
「おめぇ、聞いてただろ。」
「はは、まぁエエやないか。ずっと外で待たされて暇やったしな」
「オメェが勝手に出て行ったんだろが。」
「それより、工藤。エエ話と悪い話があるんやけどどっち先に聞きたい？」
「あ？悪い話って・・・！！もしかしてやつらか？」
「ちゃう、ちゃう。ほんなら、急がんとまずいことになるから悪い話から話す。
　さっき、俺がココに入る前に病院から電話があってんけど
　あのねーちゃんがおらんくなったって。」

「「！！」」

「ねーちゃんのベッドには《すぐ戻ります》って書かれた紙があったらしいけど

あの身体で一人で歩くのは危険や。はよ見つけんと・・・」

「あぁ。でも、灰原が行った場所は分かる。多分あそこだ。」

「あそこってどこやねん。」

「灰原のおねーさんが亡くなったところだよ。あの病院から歩いていける距離だからな。

蘭は博士に電話して灰原の病院へ行ってくれ。服部、行くぞ。」

「分かった。」

コナンと服部はタクシーで灰原のもとへと急いだ。

カップル誕生

今、コナンの腕の中には灰原がいる。

数分前・・・

コナンは服部から灰原が病院を抜け出したことを聞いた。

灰原がどこへ行ったのか、思い当たるところが一つあった。

灰原の姉が亡くなった、あそこだろう。

コナンと服部はタクシーに乗り、

灰原がいると予想される場所へ向かった。

コナンの予想通り、灰原はそこにいた。

病院の入院着ではなく、いつもの灰原らしい服を着て座りこんでいる。

「灰原!!」

「!!工藤くん・・・服部くん・・・」

コナンは走って灰原のもとへ走ってくる。

服部は松葉杖をつきながらゆっくりと・・・

「なんで病院を抜け出したんだよ。」

「なんでもいいでしょ。」

灰原はうつむいて言った。

その言い方が気にいらなくてコナンは灰原の顔を自分に向けた。

そこには涙を流している灰原の顔があった。

「おねーちゃんに、報告してたのよ。組織はつぶれたって・・・」

「灰原・・・」

「早く報告してあげたかったのよ。そうしないとおねーちゃんも安心できないでしょ。

こんなことするなんて私らしくないけど・・・。」

グイっ・・・

「！！」

コナンは灰原の腕をひき、灰原を抱きしめた。

撃たれた腕が痛むが、今はそんなこと気にならない。

「ちょっと、工藤君！？」

「灰原のことは俺がずっと守るから・・・だから、俺の傍から離れ

るな。」

「工藤くん、その気持ちはうれしいけどずっとは無理よ。

もう、組織は潰れたんだし、次にあなたが守らなきゃいけないのは蘭さんでしょ？

私は大丈夫よ。あなたは蘭さんの傍にいてあげて。」

「無理だ。俺はもうお前から離れられねーよ。

お前が好きなんだ。俺がオメェの傍にずっといたいんだよ。」

そう言うと灰原の身体がコナンの腕から離れた。

「あなた、何言ってるの？

やめて。こんなところで冗談言うのは。あなたの好きな人は蘭さんでしょ？」

「冗談じゃねーよ。俺が・・・俺が好きなやつは灰原だよ！！

蘭にもすべて話した。俺のことも組織のこともおめぇのことも・・・

俺が灰原のことを好きだってことも！！」

「・・・なんで！！あなたはもう元の体に戻れるのよ！？

戻ってから蘭さんに言うんじゃなかったの？自分の気持ちを。」

「蘭は俺が正体をバラしたときから工藤新一は自分じゃなく他の女が好きだって気づいてたらしいぜ。

しかも、その他の女ってのが灰原だってことも・・・」

「それじゃぁ、蘭さんは・・・」

「蘭も、俺に灰原を守れるのは俺しかいないって言ってた。

それにお互い、今までの気持ちを正直に話した。

そして、これからは幼馴染として、親友として好きだ、ってな。

だから、オメェは何も気にしなくていいんだ。

灰原の気持ちを聞かせてくれ。まぁ、俺は振られてもお前を守るつもりだけど」

「・・・蘭さん」

「だから蘭のことはお前が気にすることねーんだって・・・」

「そうよ、哀ちゃん。」

「えっ!?」

コナンが振り向いた先には蘭が立っていた。

「蘭・・・なんでここに・・・」

「服部君に呼ばれたのよ。ここに来てって。」
服部は隠れて今までの話を聞いていた。
そして、蘭にここに来るように電話したらしい。
蘭が哀を引っ張ってコナンには話が聞こえないところまで行った。
「哀ちゃん。私、知ってるのよ。哀ちゃんがいつも新一を見てたこと。
もう私のことは気にしないで、素直になっていいの。」
「でも・・・」
「私ね、振られたの。でも、悲しくなかった。
それは、新一が好きになったのが哀ちゃんだったから。
新一が好きになったのが私でもなく哀ちゃんでもなくって
ぜんぜん知らない女の人だったら嫌だったかもしれないけど、
優しくて、かわいくて新一のことを誰よりも考えてる哀ちゃんなら
2人を応援したいって思うの。」
「私、優しくもかわいくもないわよ。」

「でも、新一のことを誰よりも考えてるってのは否定しないんだ。ほら、素直になって！」

「・・・でも・・・」

「でも、じゃないの。哀ちゃんが素直にならないと新一がかわいそうだよ。

哀ちゃんも新一が好きなら好きって言わないと。」

「・・・いいの？」

「いいの！！私は新一よりも素敵な人見つけるから！！」

灰原は蘭にドンっと背中を押され、コナンのもとへ行った。

そして、

「私・・・これからも工藤くんの傍にいていい？」

と疑問形で告白の返事をした。

「当たり前だろ！！」

コナンは笑顔を灰原に向けた。

その笑顔を見て、灰原もクスっと笑った。

その笑顔にコナンが見惚れていると

「哀ちゃん、かーわーいー」
と言って蘭が灰原に抱きついている。
「おい！！おい・・・」
「何？新一ったら私が哀ちゃんと仲がいいのに嫉妬してるの？」
「くっ・・・」
「図星ね。いいじゃない。哀ちゃんは新一のものなんだから
こんなこともうできないでしょ？
じゃぁ、新一と哀ちゃんは幸せになってね！私も素敵な人見つけないと！！」
「蘭、ありがとな。」「蘭さん、ありがとう。」
「お礼なんていらないの。哀ちゃんを幸せにしてあげてよー新一。
哀ちゃんを泣かせたら、私が哀ちゃんを横取りしちゃうから。」
「それだけはさせねーな。」
「ふふっ。じゃぁ、そろそろ病院に戻ろっか。　病院の人たちも心配してるから。」
「えぇ。」

「あぁぁ、お前らうまくいったんか。それなら、もうエエ話の方は聞かんでええか。」

隠れていた服部がいつの間にかコナンたちの傍にいた。

「そういえば、お前なんか言ってたな。なんだ？いい話って・・・」

「そういえば？そういえばっちゅーたか、今！！

自分らがうまくいったからってどーでもいいんか！！」

「わりぃ、わりぃ。で、なんだ？」

「まぁ、とりあえず帰ろーや。話は病院についた後や。」

４人はゆっくりと歩いて病院に戻った。

病院に戻ったとき、博士は灰原の病室で泣いていた。

そして、灰原の姿を見て、さらに声を上げて泣いた。

それから、灰原は病院の人たちにも謝って、おとなしくベッドに横になった。

オヤスミのＫＩＳＳ

「んで？いい話ってなんだ？」

灰原の失踪事件が解決し、落ち着いたところで本題にはいった。

病室にはコナン、灰原、服部、蘭、博士がいる。

「あぁ。それがな、さっきＦＢＩの人から連絡あったんや。

工藤の携帯に繋がらへんかったから俺にって・・・」

「あ・・・電源切れてる。・・・それで？」

「もう、お前たちの正体話してええよって。まぁ、お前らに深く関わった人だけな。

組織は完全に潰れたって。海外のほうにおったやつらも全員つかまっとるらしいで。」

「そっか、やっとだな。」

コナンはついに本当のことを言うときが来た、と少し不安そうだ。

「その前に・・・工藤もねーちゃんもいつもどるんや？

みんなに本当のこと言ってから戻るか、戻ってからほんとのこと言うか。」

「そうだなぁ・・・どうする？灰原？」

「私は、吉田さんたちにお礼を言いたいから、本当のことを言って戻るわ。」

「そうだ！！それなら、みんなを集めて、コナンくんと哀ちゃんの正体を話す。

それから元の姿に戻ってみんなにお披露目っていうのはどう？」

「ええやないか、それ。そしたら話するんも一回でええしな。

よし！！決定。それでいこーや。」

「おい！勝手にきめんなよ！！」

だが、この声は服部には聞こえてない。

蘭と博士に「場所はじーさんちでええか？」だとか

「いつにする？」とか聞いている。

コナンと灰原はその様子を呆れ顔で眺めている。

「あなたのお友達、あなたよりもうれしそうじゃない？」

「はは・・・そうだな。

それより、灰原。オメェ、元に戻ったらどうすんだ？」

「まだ、はっきり決めたわけじゃないけどどこかに家を借りて、仕事するつもりよ。」

「え！？灰原、引越すのか？」

「えぇ。これ以上博士のところでお世話になるわけにはいかないから。」

そこへさっきまで盛り上がっていた3人がやってきた。

「哀くん、まだわしの家にいてくれていいんじゃぞ。　それにまた、新一たちと学校に行けばよかろう。」

「そうだよ。哀ちゃんも一緒に学校いこ！新一もそのほうがうれしいよね！？」

3人はコナンと哀の話を聞いていたらしい。

「あぁ。灰原も一緒にいこうぜ。高校は楽しいぞ。」

「博士がそう言ってくれるなら・・・

・・・わかったわ。高校のことも少し考えてみる。じゃぁ、博士。またしばらくお世話になるわね。」

「もちろんじゃとも。哀くんがいなくなったらわしも困るしのぉ。」

ふふっと灰原が笑った。コナンはその笑顔にまた、見惚れた。

（俺、この笑顔によえーんだよな。）

「工藤がねーちゃんの笑顔に見惚れてるときに悪いけど・・・場所はじーさんちでええか？」

コナンは服部を睨む。

（いつも一言多いんだよ！！見惚れてたのは事実だけど・・・）

場所、日時、誰をよぶのかが決まった。

そのことを確認してから服部が時計に目をやり、そろそろ帰ろか、と言った。

そして４人は病室を去った。

エレベーターが来るのを待っているとき。

「わりぃ。ちょっと先に行っててくれ。すぐ戻るからよ。」

「どうしたの？新一？」

コナンは走っていってしまったので、蘭の声はコナンには聞こえなかった。

「ねーちゃん、工藤はあのちっこいねーちゃんにオヤスミのキッス～しに行ったんやで、多分。」

「あーそういうことか・・・ふふ」

蘭は笑っているが、博士は服部の言うことが理解できなかった。

「あーそうや、じーさん。あんたのかわいーかわいー娘さんの唇は工藤に盗まれてしまうで。

あの2人は今は恋人どおしや。」

「そんな・・・でも、新一には蘭くんがおるじゃろう。」

「新一は哀ちゃんが好きなの。哀ちゃんも新一が好き。

そんな2人の邪魔はできないよ。私は2人が幸せならいいの。」

「ねーちゃんはそういうけど少しは邪魔させてもらおか。」

「そうだね。」

3人ともコナンが行ったところに向かう。

そのころ2人は・・・

「灰原!!」

「・・・帰ったんじゃなかったの?何か忘れ物?」

「ああ、ちょっとな」

コナンの顔が灰原の顔に近づく・・・

「ちょっと・・・くど・・・」

灰原の唇がコナンの唇によって塞がれた。
2人の唇があたるほどの軽いキスだったが唇を離したあとの2人の顔は真っ赤だった。
「おーおー工藤。お前以外に手ぇはやいんやな。」
「いいもの見せてもらっちゃった！」
「！！なんでお前らここに・・・」
「ちょっと邪魔させてもらおうと思ってな。」
服部と蘭はコナンを冷やかすのを楽しんでいる。
その2人とは逆に怒りを抑えきれない者もいた。
「新一・・・わしの娘になんてことを・・・　いくら新一でも哀くんはやらんぞ。」
「博士・・・工藤くんが私をもらってくれたんじゃなくて、　私が工藤くんをもらったのよ。」
灰原は普通に言っているが、コナンはまた顔が赤くなった。
「そ・・・そうか。なら、仕方がないのぉ。」
「なんや、じーさん。このねーちゃんには弱いんやなぁ。
　じゃぁ、工藤ほんまに帰んで。別に今からいちゃいちゃせんでも

ねーちゃんが退院してからもっといちゃいちゃできるやろ。今日はもう我慢しー。」

「わーってるよ／／／」

「哀ちゃんもこの狼さんには気をつけてね。もう、2人が元に戻ったら大丈夫なのかなぁ。」

そういいながら今度は本当に帰っていった。

哀と有希子（前書き）

組織との戦いから三週間後

哀と有希子

今日は灰原の退院の日。

あれから、コナンは学校帰りに毎日お見舞いに行っていた。

歩美たちが一緒のときもあった。

服部は「和葉が帰ってこい！ってうるさいねん」と言って大阪に帰った。

今日もコナンは灰原の病室に来た。ある女性を連れて。

「あーいちゃん♪久しぶりー」

「工藤君のお母さん！？」

「また、哀ちゃん綺麗になったわねー。新ちゃん？」

「うるせーよ。／／／／／」

「ふふっ新ちゃん照れてる。そんなことよりもう身体は大丈夫？」

「はい、もう大丈夫です。」

「じゃぁ、着替えて行こうか。」

「行くってどこに・・・」

「哀ちゃんの服を買いに行くのよ。哀ちゃんが元に戻ったとき服がないと困るでしょ？」

「だからって何で母さんが・・・」

「博士に頼まれたのよ。若い女性が着る服はわからないから、って」

なぜか《若い》という単語を強調して言う有希子。

「すいません・・・わざわざ。」

「ぜんぜんいいのよ。私だって新しい服欲しかったし。

それに女の子の服を選ぶのって私の夢だったのよねー。」

「男で悪かったなぁ。」

「ふふっ。じゃぁ、今日は有希子さんに選んでもらおうかしら。」

「しらねーぞ。母さんがどんな服選んでも。」

（確かに・・・フリルのスカートとかを有希子さんが選んだら・・・）

「やったぁ！！哀ちゃんに似合うの選んであげる。

それじゃぁ、私と新ちゃんは退院の手続きしてくるから着替えて待っててね。」

☆☆☆

「灰原、これだったらオメェもいけんじゃねーか？」

「そうね・・・これだったら。有希子さん、これお願いします。」

「ＯＫ！！」

それから何着か服を選んで百貨店を出た。

博士の家に着くと博士と蘭が迎えた。

「哀ちゃん、退院おめでとう！！」

「ありがとう。蘭さん。」

「哀くん、お帰り。お気に入りの服は買えたかのぉ？」

「えぇ。有希子さんに選んでもらったわ。」

「へー早く見たいな。哀ちゃんの元の姿♪

そうだ！！私、哀ちゃんの退院のお祝いでたくさん料理作ったの！！食べてくれる？」

「ちょうどおなかがすいてきた頃だしいただこうかしら。」

☆☆☆

「「「いただきまーす！！」」」

「蘭さんこれおいしいわよ。」

「へへ、ありがとう。」

「なんで、料理だけは出来ない英里ちゃんと、不器用な小五郎ちゃんの子がこんなに料理が上手なのかしらね。」

「はは・・・確かに」

「でも、哀ちゃんの料理もおいしいんでしょ？新一？」

「まだ、あんまり灰原の料理食ったことねーからな・・・

けど、上手いと思うぜ。博士の分はいつも作ってるらしいし。」

「蘭くんの料理もうまいが、哀くんの料理も絶品じゃぞ。」

「博士は余計なこと言わないでいいのよ。

それと、博士。今日食べ過ぎたら明日のおかずはサラダだけになっちゃうわよ。」

「哀くん・・・それは・・・」

ははは・・・と、みんな苦笑いしていた。

早めの夕食を食べ終わり、蘭とコナンは探偵事務所に帰って行った。

コナンは「今日、博士んちに泊まっていいか？」と灰原に聞いたが、

「ダメよ。探偵事務所での生活もあと少しなんだから、楽しんできなさい。」

と言って断られた。

2人が帰ったあと、有希子はまだ阿笠邸にいた。

「博士、私はここに泊まらせてもらうわね！」

「あぁ、わしはかまわんよ。」

「じゃぁ、空いてる部屋借りるから！！」

「それじゃったら、ほれ。哀くん。案内してやってくれんか。」

「えぇ。」

灰原は有希子を案内する。

「ここ空いてるので好きに使ってください。」

「ありがとう。哀ちゃん！！」

有希子は灰原に笑顔を向ける。

だが、灰原にはその笑顔が少しつらかった。

「あの、有希子さん、今ちょっと話いいですか？」

「いいけど、謝るのはなしよ。」

有希子は灰原が何を言いたいのかわかっているようだ。

「新ちゃんのことでしょ？話って・・・」

「はい。」

「新一から聞いてるわ。哀ちゃんが新一を今の姿にしてしまったことに自分を責めてるって。

だけど、そんなことしなくていいの。あなたはなにも悪くない。

優作もね、あなたには感謝してたわよ。

新一の命を助けてくれた、って。それに新一はあなたに支えられてきたって言ってたわ。

そんな哀ちゃんに謝ってもらうことなんて一つもないの。

哀ちゃんには私達がお礼を言うことだけ。感謝してもしきれないわ。」

「そんな・・・感謝なんて・・・」

「本当のことよ。だいたい新一があの姿になったのだってあの子が余計な事に首をつっこんだからでしょ？

もう、自分を責めないで。哀ちゃんは幸せになりなさい。」

「私、ほかの人にも言われたんです。自分をもう許してもっと幸せになってって。

だけど、自分を許したら自分が弱くなりそうで・・・」

「大丈夫よ。そうなっても、新一は哀ちゃんから離れないわよ。

新一は哀ちゃんがずっと我慢して強がってたことも分かってると思う。

そうゆう哀ちゃんだから新一はほっとけなかったのよ。そして、好きになったの。

だからもう謝ったりしないでね！哀ちゃん。」

「はい。」

灰原は笑顔を向けた。

「あと、哀ちゃん・・・その笑顔、新ちゃん以外の男の子に向けたらダメよ？女の私でもクラっなるから。」

「？」

どういう意味か疑問に思いつつも灰原は部屋を出て行った。

（新ちゃん、これから大変ね・・・）

コナンと灰原との別れ（前書き）

組織との戦いから三週間＋五日

コナンと灰原との別れ

灰原が退院して、３日が立った。

今日もコナンと灰原は少年探偵団の三人と一緒に帝丹小学校に向かっている。

だが、それも今日が最後。

「なぁ、オメェら今日帰って時間あるか？」

「えぇ。僕は大丈夫ですよ。」「歩美も大丈夫だよ！」

「俺も大丈夫だけど、なんだ？」

「今日、学校から帰ったら博士んちに寄ってほしいんだ。大事な話がある。」

「「「？？？」」」

☆☆☆

「はーい。みんなおはよう。」
コナンたちの担任が教室に入ってきた。そして、早速話を始める。
「今日は、とっても悲しいお話があります。
　このクラスの江戸川コナンくんと灰原哀ちゃんが別の学校に行くことになりました。
　２人とは今日でお別れです。」
その言葉に誰よりも早く反応したのは今まで少年探偵団として一緒にたくさんの事件を解決してきた、吉田歩美だった。
「コナンくん、哀ちゃん本当なの？」
「あぁ。」「えぇ。」
「何で言ってくれなかったの？」
歩美の目には涙が浮かんでいる。
「さっき江戸川くんが言ってたでしょ？帰ってから大事な話があるって・・・
　帰ったらちゃんと話すわ。だから、泣かないで。」
灰原がそう言うと、歩美の表情はいつもの明るい顔になっていた。

☆☆☆

「「「はーい！！」」」

ピーンポーン♪

「博士、私がでるからいいわよ。」

「スマンな。哀くん」

☆☆☆

「そんなところで喧嘩しないで早く入って。蘭さんが待ってるわよ。」

「せやな。ほんならお邪魔しまーす！！」

2人が入って、扉を閉めようとしたときスーツを着た男女がこっちに向かってくるのが見えた。

佐藤刑事と高木刑事だ。

「あ！！哀ちゃん。久しぶりね。」

「えぇ。」

「今日ね。目暮警部と白鳥くんは来れなくなったって言ってたわよ。事件があったらしくてね。

私と高木くんは非番だったから来れたけど。」

「そう。じゃぁ蘭さんに言っておくわ。」

「ありがとう。で、大事な話ってなに？」

「それは、みんなが来てからよ。入って。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

それからしばらくして毛利小五郎とその妻、妃英里、

鈴木財閥のお嬢様、鈴木園子が来た。

工藤夫妻は仕事があるから、と今は海外にいる。

「服部くん、全員そろったわよ。目暮警部と白鳥警部は来れないみたいだけど。」

「そうか。まぁええ。そろそろ始めよか。工藤?」

「あぁ。」

コナンが返事をすると服部が大きな声で言った。

「今から、この坊主から大事な話があるらしいで。みんな、ちゃんと聞いときや。」

えらそうに言う服部に和葉は鋭い視線をぶつけたが

この場にいる人全員がコナンを見る。

それを確認して、コナンは話し始めた。

「今から僕が言うことは決してここにいる人以外には話さないでください。

・・・まずは僕の正体から話します。

僕の正体は・・・・・・・・・

帰ってきた工藤新一

「今から僕が言うことは決してここにいる人以外には話さないでください。

・・・まずは僕の正体から話します。

僕の正体は・・・・・・・・・

（コナンくん、どうしたんだろう。）

これは歩美だけではなく、この場に集まっている人が思っていることだ。

一部の人たちを除いて。

「・・・僕の正体は、工藤新一です。」

周りがざわざわとなる。

「コナンくん・・・どういうこと？だって、工藤くんは高校生のはずでしょ？」

佐藤刑事が代表してコナンに訊く。

「この話は事実です。僕はある薬で高校生から小学生に身体が幼児化したんです。

僕が蘭とトロピカルランドへ遊びに行った日、蘭と別れたあと

僕はある組織の取引現場を目撃してしまいました。

その取引に夢中になっていた僕は後ろからのもう一人のやつらの気配に気づく前に

殴られ、気を失いました。そのときにある毒薬を飲まされ、僕が気づいた時には

この今の姿、江戸川コナンになっていたんです。」

ふぅ、と一息つく。

周りの人達は真剣に話を聞いている。

「僕に毒薬を飲ませたある組織というのは警察の方なら分かると思います。

今はまだ、ＦＢＩがこの組織のことを世間に広まらないようにしていますが、

いつも黒の服を身にまとい、標的と決まった人間をためらいもなく殺すあの組織です。」

「！！その組織って、もしかして・・・

この間、近くの建物で銃撃戦をして何名かがつかまったって聞いたわ。

私はよく知らないけど、つかまった人たちは全員黒い服だった

とか。」

「それなら、僕も聞きました。はっきりとは分かりませんけど。」

「あの組織は世間では一部の人にしか知られていません。

いえ・・・知られてはいけないんです。

組織の秘密を知った人はすぐにやつらの標的になり殺される。

だから、僕と灰原は今まで正体を隠し、過ごしてきた、というわけです。」

「でも、もう私達警察だけじゃなく、

蘭ちゃんや子供たちにまでこのことを話したってことはもう大丈夫なの？」

「はい。もう組織の大半は死亡しました。ほとんどが自殺です。

残りのやつらは、ＦＢＩによって日本警察に送られたそうです。」

そこまで聞くと、今度は蘭の父親、小五郎が疑問を口にした。

「おい。さっき、お前はそこの灰原って子も正体を隠していたと言ったな？

その子の正体はなんなんだ？」

「私の本名は宮野志保。元組織の一員よ。」

「え??嘘でしょ?哀ちゃん!!」

歩美と光彦と元太は嘘だと言って、と言う顔で灰原を見ている。

「私は組織である毒薬を作ってた。工藤くんが飲まされた薬よ。

私にはおねーちゃんがいたの。私にとって唯一の・・・

そのおねーちゃんが組織に・・・」

灰原はまた泣き出してしまった。

(また、泣かせちまった・・・やっぱおねーさんの話は辛いんだろうな。)

「灰原、俺が話す。」

泣き出して、続きを話せなくなった灰原にかわり、コナンが灰原のことをみんなに話した。

話を聞いた人たちは驚きや、悔しさ、寂しさなど、いろいろな気持ちが入り混じった顔をしている。

そんなとき、蘭の母親が灰原の前に座り込んだ。

「志保さん、だったわね。」

「はい。」

「あなたのことを責めるつもりはないけど、あなたがやっていたことは世間的には大きな犯罪よ。」

「はい、わかってます。」

「でも、私達も悪かったのかも知れないわ。

いくら、知らなかったとはいえ、

組織は今まで何人も殺してきたわけでしょ？

それなのに、逮捕するどころか罪も償わせることが出来なかったなんて。

あなたみたいな子をずっと苦しめていた組織を今まで残しておいたことも。

ごめんなさいね。それに辛いことまで話させて。」

「いぇ・・・私は・・・。」

「ねぇ、哀ちゃん、コナンくん・・・」

横から歩美たちがやってきた。

「どうしたの？吉田さん」

「私達、ずっと友達だよね？」

「当たり前じゃない。あなた達は生まれて初めての私の友達よ。」
「あぁ、俺もオメェらとはずっと友達だ。」
「僕もです。」「俺もだぞ！コナン！！灰原！！」
その様子を蘭が見て、笑っている。
「よかったわね。新一、哀ちゃん！
　じゃぁ、そろそろ新一と、哀ちゃん。行ってきたら？」
「あぁ、そうだな。」
「じゃぁ、吉田さん、円谷君、小嶋くん、またね。
　それと今まで、《灰原哀》と仲良くしてくれてありがとう。」
コナンと灰原はそれぞれ別の部屋に入っていった。
「え？哀ちゃんどこ行くの？コナンくんも。」
「大丈夫よ。歩美ちゃん。あの２人は変身しに行っただけだから。」
「変身？」
「ちょっと、蘭！！あんた知ってたの？あのガキんちょが新一くんだってこと。」
「うん！！少し前からね。」

「へーほんなら、蘭ちゃん、やっと工藤君と恋人同士やねんな。よかったなぁ。」

「えーー、蘭はもう、とっくに新一くんの奥様だと私は思ってたけどぉ？」

「ちょっと、園子！！そんなんじゃないから！それにね、新一には今素敵な彼女がいるのよ。」

「え？なに、それ！！だって、さっきのガキんちょが新一くんでしょ？あの姿で彼女って・・・」

「いるじゃない。コナンくんの正体をずいぶん前から知ってて、中身は同じくらいの年のかわいーー女の子が。」

「それって・・・」

「「「哀ちゃん！？」」」

何人かの声が重なった。その声の主は和葉と

蘭たちの話を横で聞いていた歩美と佐藤刑事だった。

「蘭、いいの？それで。」

「いいの！！お互いに昔の気持ちと今の気持ちを話したから。

それに、哀ちゃんと約束しちゃったし。新一よりも素敵な人見つけるって。」

「蘭がそれでいいなら、私もあの2人応援する。」

「私も!!」

「そ・れ・と、いい情報があるよ!!聞きたい?」

「聞きたい!!」

「あのねー・・・」

ガチャ。

コナンが入っていった扉が開いた。

中から出てきたのはまさしく工藤新一だった。

「新一!!お帰り。ちゃんと戻れたのね。」

「あぁ。ただいま。」

「わー工藤くんかっこえー。でもこうやってみるとコナンくんの面影があるなぁ。」

「おー工藤、ちゃんと戻れてよかったやないか!!」

「あぁ、サンキューな。」

「平次!!あんた今までどこおったん?こんな大事なときに。」

そういえば、コナンたちが話している間、平次は部屋にいなかった。

「いやぁ、俺、しんみりした空気苦手やからな。ちょっとそこらへん散歩してきてん！！」

「あんた、コナンくんの正体知ってたん？」

「当然やろ。俺は坊主に初めておうた時から知ってんねん！！」

「そういえば、平次、よくコナンくんのこと工藤、ってゆーてたなぁ。」

「おい！！探偵坊主！《眠りの小五郎》が登場したのはコナンが家に来てすぐだ。

それはお前のせいなのか？」

小五郎も元に戻った新一に近づいてくる。

「あ・・・いや・・・はい。そうです。すみませんでした。」

「いや、謝ることはねーよ。」

「え？」

「俺が、少しは名の通る探偵になれたのはお前のおかげだ。感謝してる。

だが、これからはお前の力を借りなければいけないこともあるだろう。

そのときは有無を言わさず協力してもらうからな。覚悟しておけ。」

そんな話をしているうちに再びドアの開く音がした。

宮野志保とのハツ対面

扉の開く音がした方へ、みんなの目が一斉に向けられる。

「わーーー。哀ちゃん、きれー!!」

「灰・・・み・やの・・・?」

「あら、工藤くん無事戻れたのね。」

「あ・・・あぁ、ありがとな。」

新一は志保の姿に見惚れている。それは周りにいた人たちも同じだった。

「志保ちゃん・・・すごく綺麗よ。」

男性だけでなく女性までもがその姿を見て赤くなっている。

それもそのはずで、志保の体は誰もがあこがれるモデル体型・・・

スラっとした足、くびれのある体、白い肌、大きな瞳、丁度いい大きさの胸・・・

「ねぇ、工藤くん・・・何か変?私。」

自分の姿に見惚れられているとは思ってもいない様子。

「ねーちゃん、えらいべっぴんさんやなぁ。おんなじ女やのになん

でこーも違うんやろなぁ？」

「悪かったなぁ。こない美人やのーて。」

「なんやねん！！誰も和葉と比べてへんやんけ。」

「じゃぁ、誰と比べとったん？ゆーてみー。」

「あ・・・いや・・・」

「それにしても、志保さんに新一くんはもったいなぁいんじゃない？ねぇ？」

「う・・・うるせぇ。」

「あ！そういえば、さっき蘭が言ってたこと・・・あれ教えなさいよ。」

「あぁ、あれね。」

蘭は新一と志保をニヤニヤした顔で見てからみんなに聞こえるくらいの声で話し始めた。

「新一ったらね、病院から帰ろうとしたときに

わざわざ哀ちゃんのところまで戻って行って、オヤスミのキスしてたのよ。」

「「「「えーーーー！！！」」」」

その話の中心となっている2人は顔が真っ赤になっていた。
新一は「おい！！蘭！！」と言って蘭をとめようとするが、蘭は聞こえないふりをした。
「いいわねー志保ちゃん。高木くんなんて自分からしてくれたことないのよ。
　もう、付き合って何ヶ月も経ってるのに！！高木くんも工藤くんを見習ってよ。」
「そうね・・・私なんてこの探偵さんにはそんなことしてもらった記憶さえないけど。」
英里も小五郎を指さして言う。
たくさんの冷やかしの言葉を受けて、志保は
「私、夕食の準備してくるから・・・」
と言って、その場から去った。
「おい！灰ば・・・宮野！一人だけ逃げんなよ。」
「なによ。あなたが勝手にしたんじゃない。」
「なっ・・・それはねーだろ！！」
「ちょっと・・・お二人さんせっかく元に戻れたのにいきなり夫婦喧嘩しないでくれる？」

この言葉にまた、２人は赤くなった。

☆☆☆

「あの・・・灰原さん・・・」

光彦はあえて志保のことを灰原、と呼んだ。

「どうしたの？円谷くん・・・」

「あ・・・あの、僕、灰原さんのこと好きでした。

まだまだ、僕は子供ですけど、もしコナンくんが灰原さんを泣かせたりしたら

大人になったとき僕が灰原さんを守りますから。」

志保と新一は光彦の突然の告白に驚いている。

「光彦、わりーけど簡単には灰原はゆずらねーよ。」

「あら、あなた。大人げないわね。

そうね、じゃぁ江戸川くんが頼りなくなったらそのときは円谷くんにお願いするわ。」

ふふっ、と光彦に笑顔を向けた。

光彦はその笑顔を見て、赤くなった。

その横で次は元太が話始めた。

「俺は、これからも少年探偵団を続けるぜ。コナンと灰原がいなくなってもな。

２人みたいに頭はぜんぜんよくねーけどよ。

俺達3人だけで出来るだけのことはしよーぜ！な？歩美！！光彦！！」

「うん！」「そうですね。」

「それじゃぁ、俺もオメェらに負けねえようにがんばらねーとな。」

そう言って、少年探偵団は解散した。

空を見上げるとたくさんの星があった。

「なぁ、宮野・・・」

「なに？」

「俺も志保ってよんでいいか？」

「クスっ。そんなこと聞かなくてもいいのに・・・」

「じゃぁ、俺のことも名前で呼んでくれ！」

「それは無理ね。」

「なんでだよ。」

「だって、そのよびかたはあなたの幼馴染さんだけの呼び方よ。

それに、今更はずかしくてよべないわ。」

「なんだよ、それ。」

「まぁ、いつかは名前でよべるように練習しておくわ。」

志保はクスクスっと笑っている。

その笑顔が綺麗で、新一はこの笑顔を独り占めしたいと思った。そして・・・

志保のあごに手を伸ばし自分の唇を志保の唇に重ねた。

コナンだったときにしたキスよりも長く・・・

その光景を見ていた4人の影に2人が気づくのはもう少し後のことである。

2人の甘い夜（前書き）

2人の甘い夜

子供たちを無事に家まで送り届けた2人は阿笠邸に帰ってきた。
その2人がリビングに入り、ソファに腰をおろしたとき
隣の部屋からニヤニヤした4人の顔が入ってきた。
「おかえりー新一。」
「何で、あの子たちを送るだけでこんなに時間がかかったのかなー？新・一・く・ん？」
「それにしてもよくやるなー。工藤。道のど真ん中で。
いくら夜やからって周りに誰もおらんとは限らへんで。」
「なっ！！オメェら見てたのか。／／／／」
「ちゃーんと見とったで。なんや、工藤くん王子さまみたいやったなぁ。」
先ほど新一と志保のキスシーンを隠れて見ていた4人は
2人が帰ってくる前に先まわりして帰っていたらしい。
「王子さまやないで。あら、ただの狼や。
まぁ、住宅街やったから少しは控えめにしとったんやろーけど、

あれがもし2人っきりの部屋とかやったらどうなってたんやろなぁ。」

ニヤニヤした顔が新一と志保の顔を交互に見る。

「どうもなってねーよ！！」

「そうよ。この人に私を襲う勇気なんてまだないわよ。それじゃぁ、私お風呂に入ってくるから。

工藤くんも明日から学校なんだから早く家に帰って体休めたほうがいいわよ。

久しぶりに元の姿に戻って精神的にも肉体的にも疲れやすくなってると思うから。」

「あ・・・志保。そのことだけど今日俺ここに泊まってもいいか？」

「あなた、隣に自分の家があるじゃない。」

「だってよー、元に戻ったばっかで何があるかわかんねーしよ。

別に志保が作った薬が信用できないとか、そういうんじゃないけど。」

「そう。まぁ、いいわ。でも、博士には自分で言っておいて。空いてる部屋なら使っていいと思うから。」

「おう！ありがとな。」

志保はリビングを去っていった。

「ほんなら工藤。俺らは毛利のねーちゃんとこに帰るわ。」

「新一くん、2人で熱い夜を過ごしてね。」

「んだよ!!博士もいるっての。」

「ん?なんじゃ?蘭くんたちはもう帰るのか?」

今までどこにいたのか、どこからか博士がやってきた。

「うん。これ以上2人の邪魔したくないし。」

そう言われた博士は新一をジト目で見る。

「あ・・・いや・・・そうだ!俺、今日博士んち泊まらせてもらうぜ。」

「かまわんが志保くんには何もするんじゃないぞ。」

「わかってるって。」

「それじゃぁ、新一。また明日学校でね。」

「おー。またな。」

そして4人は帰って行った。

☆☆☆

この部屋に隠しカメラがあったから。」

「へ？」

「多分、服部くんね。私たちが話してるとき彼、いなかったみたいだから。

あなたの部屋にもあったわよ。

もしかしたら隣のあなたの家にもあるかもしれないわね。」

「じゃぁ、わかってるんならなんで電源切らねーんだよ。」

「別にやましいことがないならいいんじゃない？服部くんは何か期待してるみたいだけど。」

「じゃぁ、その期待に応えてやるか。」

「え！？ちょ・・・とあなた何考えて・・・」

志保の言葉を遮るように新一は志保の唇を自分の唇で塞いだ。

「ん・・・」

2人は深く深く、口付けを交わした。

そして、そのまま朝まで同じ部屋で眠った。

その結果、翌日の朝に新一が志保の部屋で眠っていたことが博士に

ばれ、

早朝から博士に怒られた新一だった。

その様子を志保は影からこっそり見て笑っていた。

新一と志保のＳＴＡＲＴ（前書き）

４月

新一と志保のＳＴＡＲＴ

「ったく。何で朝っぱらから説教されなきゃなんねーんだよ。別になにもしてないってのに。」

「それはあなたが悪いんじゃないの？博士に言われた約束をやぶったんだから」

新一はブツブツ文句を言いながら帝丹高校に志保と向かっている。

志保も着慣れない制服を着て、少し機嫌が悪かったが

新一から「似合ってる」と言われたので機嫌もよくなっていた。

「それより、あの隠しカメラはどうなったの？」

「あー、あのカメラのテープは俺が持ってるから大丈夫だ。」

「あら、期待に応えるんじゃなかったの？」

「あいつのわがままを聞いてたらキリがねーからな。」

ふふっ、と新一の横で笑う志保の笑顔がたまらなくかわいい。

「オメェ、最近よく笑うようになったよな。」

「誰のせいだと思ってるの？」

「《おかげ》って言ってくれ。でも、志保は笑ってたほうがやっぱ

いいな。」

「有希子さんには、あなた以外に笑ったらダメって言われたわ。」

「確かに・・・オメェの笑顔は男どもが殺られるからな。特に高校は餓えた男子が多いし。」

「そんなことくらいで殺されたらこの世に男なんていないわよ。」

ハァ・・・と新一は大きなため息をついた。

（志保は分かってねーんだよな。自分の笑顔で何人の男が殺られてきたか。）

志保は新一のため息の意味がわからず不思議そうな顔をしている。

そんな時後ろから大きな声が聞こえてきた。

「新一ぃーーー、志保さーーん」

「げ・・・まためんどくさいのが来た。」

2人のところに走ってきたのは蘭と園子だった。

「初日から夫婦で登校？やるわねー志保さん。」

「たく、またそれかよ。園子。」

コナンになる前にも蘭と毎朝一緒に登校していると、言われていた言葉だ。

新一はいつも思っていた。

（毎日毎日あきねーのかよ。）と・・・

「ねぇねぇ、志保さん。ほんとは私達より1つ年上だけど・・・

今日からは同級生なんだし名前で呼んでもいいかな？私のことは『蘭』でいいから。」

「私も『園子』でいいわよ。」

「ええ、いいわよ。蘭・・・園子・・・」

慣れない名前を呼んで、志保は赤くなっている。

「ふふ、やっぱこれがいいよね。友達ってかんじ。」

「ずりー。志保、俺のことは名前で呼んでくんないんだぜ。」

「えーなんで？」

「今更恥ずかしいからだってよ。」

「志保かーわーいー。」

蘭と園子は志保に抱きついている。

「おい、蘭！！園子！！」

「なになに？新一くんったら私達にやきもち焼いているのかしら？」

「別にそういうんじゃねーけどよ。」

こんな話をしている間に帝丹高校の校門の前に着いた。

新一たちの周りはなにやら騒がしかった。

「おい！あれ工藤じゃねーか？」

「隣の綺麗な女子は誰？」

４人はそんな会話を無視して学校に入って行った。

新一と蘭、園子は三年生の自分たちの教室へ、

志保は職員室へ向かった。

新一達が教室に入ると廊下にまで響いていた声が一気に静まり返り、

「く、・・・くくく工藤？」

「工藤くんだー」

と、再び教室はにぎやかになった。

「お前今までどこにいたんだよ。」「死んだのかと思ってたぜ。」

縁起でもないことを言うやつもいる。

そこに、担任が入ってきた。

「席にすわれー。えーーと、今日から工藤が復帰だ。久しぶりだな、工藤。」

どうも、と新一が頭をさげる。

「それと、今日は転校生がいる。」

入ってきたのは志保。クラスの前で先生に紹介されている・

「宮野志保さんだ。」

「宜しくおねがいします。」

「じゃぁ、後ろの空いてる席に座ってくれ。」

「はい。」

志保の席は新一の隣だ。

志保が前に立ってから、席につくまで志保から目を離す者は一人もいなかった。

「よかったな。同じクラスで。」

「別にクラスくらい離れててもよかったんじゃない？」

「お前、友達つくんの苦手だろ？ここのクラスには蘭も園子もいるからいいじゃねーか。」

こうやって新一と志保が話しているところをクラスの男たちは見逃さなかった。

ＨＲが終わったあと、志保の周りに人がたくさん集まってきた。

「ねぇねぇ、宮野さんと工藤って知り合い？」

「えぇ。」

「いいよなぁ、工藤。こんな美人と知り合いだなんて。」

「宮野さんってハーフ？」

「えぇ。」

「どことどこの？」

「イギリスと日本。」

志保はいきなり質問攻めにされている。別のクラスからも人が集まって来た。

新一の復帰など忘れられているようだ。

その中の一人が誰もが気になっていたことを聞いた。

「宮野さんって、男いるの？」

志保は、これを言っていいのかどうか分からず、横の席の新一に助

けを求めた。

新一は志保の顔を見て、志保の代わりに言った。

「志保には男いるぜ。だから、誰も手ぇだすなよ。」

「なんで工藤がそんなに偉そうなんだよ。」

「なんでって・・・あたりめーだろ。俺が志保の彼氏なんだから。」

その瞬間、志保に質問していた人たちは新一の方へと標的を代え、

次は新一が質問攻めされることとなった。

その間に志保は蘭と園子のもとへ行き、その空間から脱出した。

「高校って面倒ね。」

「大丈夫よ。すぐに慣れるわよ。」

と言いつつも新一と志保の席のまわりを見ると3人は苦笑するしかなかった。

このあとも授業が終わるたびに2人は質問攻めにあい、

新一にとっては久しぶりの、志保にとっては始めての高校での一日が終わった。

服部の嫉妬

今日は日曜日。

服部と和葉が大阪へ帰る日だ。

昨日、新一たちが学校のあと阿笠邸に帰ったとき服部と和葉がいた。

「工藤もねーちゃんらも、わざわざ俺らが大阪からきてやったちゅーのに

みんな学校行きよって。

俺らだって学校休んで来てるっちゅうねん。」

「ごめんね・・・服部くん、和葉ちゃん。」

「ええねん、ええねん。蘭ちゃん、気にせんといて。

ちょっと!!平次!あんたがまだ帰りたくないってゆーたんやんか。子供みたいに。

それに、今は体育祭の練習ばっかでめんどいとかゆうてズル休みしてんの誰?」

「まぁまぁ、それじゃぁ明日はみんなでどこか行こうか。」

「じゃぁ、蘭。またトロピカルランドとかどう?」

「いいわね。新一も志保もそれでいい？」

「私はパ・・・」

「あぁ、俺と志保もそれでいいぜ。」

「ちょ・・・工藤くん！？私は行かな・・・」

「志保も行くよな？な？」

新一が顔を近づけてくる。

「しょうがないわね。行くわ。私も。」

「じゃぁ、明日の朝9時に新一の家に向かえにくるね。」

「あぁ。」

「それじゃぁ、また明日ね。」

そして3人は帰って行った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「志保、今日の夕飯なんだ？」

「今日はハンバーグよ。って、あなた食べていくつもり？」

「俺、そのつもりだったけど・・・ダメか？」

「仕方ないわね。まだ、材料はたくさんあるから大丈夫よ。」

新一はハンバーグが好きなのか、喜んでいるようだ。

「工藤、ハンバーグ好きなんか。お前も子供っぽいとこあるんやな。

まぁ、昨日までは子供やったから、子供っぽいとこもまだ残ってんのかも知れへんな。」

「「服部（くん）！！」」

「お前、なんでここにいんだよ。さっき帰ったんじゃなかったのか？」

「昨日ゆーたで。明日は工藤んちに泊まらせてもらうって。」

「俺、聞いた覚えないけど？」

「あんとき、工藤とねーちゃんを冷やかしたあとゆうた！！

もしかして、ねーちゃんのことで頭いっぱいでなんも考えんと返事したんやないか？

まぁええわ。そんなことより、お前に話さなアカンことあんねん。」

「なんだ？」

「それはまた後でゆっくり話そうや。工藤んちで。な？ねーちゃんも呼んで。」

「え？私も？」

「ちょっとねーちゃんの意見も聞きたいんや。」

「そう。それなら早く夕食食べて行きましょ。幸い服部くんの分も材料が残ってるから。」

「ほな、遠慮なくいただくわ。」

☆☆☆

「工藤、オマェ気づかへんかったんか？あれは囮の隠しカメラ。本物は別のところに隠しとってんで。」

「な！？うそだろ？」

新一の横で志保も驚いている。

「工藤やからすぐ見つけてしまうやろ・・・っておもたけど、東の名探偵やばいなぁ。ねーちゃんのことになったら周りが見えんようになるんやもんな。

まぁ、一応お礼ゆうとくわ。俺の期待に応えてくれてありがとうございます。」

「お前、そのテープ今すぐ返せ。」

「それはできへんなぁ。これはまだ他のやつらには見せへんけど、いつか使うことができるからな。それまで、とっとく。」

「服部、悪趣味だな。」

「はは、そんなこと言われたってなんも思わへんで。

そもそも探偵やってる時点で周りからみたら悪趣味にしか見えんやろーからな。」

「にゃろ・・・」

新一は諦めた。今、こいつに何を言っても俺は負ける・・・と。

志保はそんな新一と服部に呆れている。

はぁ、と大きくため息をつき工藤邸に入っていった。

☆☆☆

「服部くん。あなた・・・」

「なんや、ねーちゃんどうしたらええか、わかるんか？」

「えぇ。」

「さすが、ねーちゃんやな。やっぱ女のことは女にしかわからんか。で？どうしたらええんや？」

志保は、この目の前の男2人に呆れた。特に、この色黒探偵に。

「はぁ・・・、どうしたら、って・・・あなたはとにかく女心を知ることね。」

新一も服部も志保の口から《女心》という単語がでてきたことに驚いた。

「じゃぁ、服部くんに聞くわ。あなた、和葉さんのことどう思ってるの？

まずはそこからよ。

そして正直に思ったことを本人に言えばいいの。」

探偵2人はまだ驚いている。

「どういうことやねん・・・工藤はわかるか？」

「・・・いや・・・ぜんぜん。」

新一と服部はしばらく志保の言ったことについて考えていた。
すると新一の肩が突然重たくなった。
その原因は志保だ。
志保の頭が新一の肩に乗っている。
「おい！志保！」
志保は眠っていた。
「たく・・・しょーがねーな。」
そう言って、新一は志保をソファに寝かせ、毛布を体にかけてあげた。
「今日は学校で質問攻めにされてたからな。疲れたんだろな。」
「そらそーや。にしても、幸せそーな顔してねむっっとる。」
「あぁ、組織がつぶれてから安心して眠れるようになったんだろな。
前はよくやな夢ばっかり見てたらしいけど。」
「そうか。あの組織はこんなとこでもねーちゃんを苦しめとったんやな。」
「でもまぁ、やつらのおかげでっていうのもおかしいけど

組織のことがなかったら俺と志保は出会えてなかったかもしれないから少しは感謝してるよ。」

「せやな・・・それより、工藤。和葉のことはどうしたらエエんやろ？」

「なぁ、服部。

お前、和葉ちゃんが男に告白したって聞いたときどういう気持ちだった？」

「俺か？俺は、ただなんで？て思った。」

「そのなんで？って思ったのはなぜだ？」

「それは・・・いつも横に俺という男がいながら

和葉の目には俺やない別の男が映ってると思うとな・・・なんでやって思うやろ。」

「服部、そういうのをなんていうか知ってるか？

・・・嫉妬ていうんだよ。お前は、和葉ちゃんが好きになった男に嫉妬してんだよ。」

服部の決意

『お前は、和葉ちゃんが好きになった男に嫉妬してんだよ』

（工藤。悔しいけど、今回の推理お前の勝ちみたいやな。

俺、ほんまにその男に嫉妬してたんや。自分が気づかん間に。

工藤には嫉妬は醜いとかなんとか言うといて・・・アホやな。

俺。

いい加減なさけなくなってくるわ。）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

朝、和葉たちが服部たちを迎えにきた。

「平次、用意できたん？はよ行くでーー。」

和葉はとても楽しそうだ。

「和葉ちゃん、昨日の夜から楽しみにしてたの。」

「あいつはいくつやねん。和葉は工藤らとちごて精神年齢が子供になってしもたんやないか？」

「失礼やな！！私はちゃんと大人です。」

「どこがやねん。まぁええわ。行くで。」

（よかった。和葉も少しは元気になってくれたみたいやな。）

☆☆☆

けど、あいつがその男と幸せになるんなら俺は身を引くって決めた。」

その言葉に納得のいかなかった志保は服部に言った。

「服部くん、あなた言ってくれたわよね。

幸せになるのに権利はない。あるのは義務だって。

あの言葉、今の服部くんにもいえるんじゃないかしら。

あなたが幸せになるのはあなたの義務よ。

でも、幸せっていうのはときには何かを犠牲にしなければいけないこともある。

それを私はあなたたちから学んだわ。」

「せやな。・・・よく考えてみるわ。」

「何かを犠牲にしてまで自分の思いと向き合う人は素敵よ。」

「それは工藤のことか？まぁええわ。とにかくねーちゃんありがとな。」

「お礼を言うのは私のほうよ。あなたの言葉で今私はこうして幸せになってるの。

灰原哀としてすごしてきた、あの時よりも。

あなたと工藤くんのおかげなのよ。」

「志保・・・」「ねーちゃん・・・」

「「ありがとう!!」」

「あ・・・服部、どんな答えを出したとしても志保だけはゆずらねーからな。」

「それはわからへんな。もうすでにねーちゃんのこと好きかも。」

「あら、ありがとう。でも、ここに独占欲の強い狼さんがいるから

これ以上私ひとりでは無理ね。ほかをあたってくれる?」

「はは、冗談やって。ほんなら俺ももっと幸せになれる道探すわ。」

そんなとき女子3人がやってきた。

「何はなしてんのー?平次?」

「大事な話や。じゃぁ、俺らも行くか!あれ乗ろうや。」

服部が指差したのはジェットコースターだった。

「私、パス」

「えーなんで?みんなで乗ろうや。」

「ん?志保どうした?」

「なんでもないわよ。並ぶのが面倒なだけ。」
この言葉が志保の強がりだと言うのが新一にはわかった。
「オメェ、怖いんだろ？大丈夫だって。別に落ちたりしねーから。ほら行くぞ。」
新一は志保の手を力強く引っ張っていった。
その光景を服部はうらやましそうに見ていた。
「ほら、平次も！！何ボーってしてんの。行くで？」
和葉も服部の手を引いて歩いていく。
（工藤、ねーちゃん。また一つわかってしもた。
俺は、このうるさいのが横におったら幸せなんや。
ほんで、好きや。どうしようもないくらい、和葉のことが。このうれしそうな顔が。）
服部たちの前では新一と志保が手をつないでいる。
「怖いなら、俺の手ずっとにぎっとけよ。」
「だから、別に怖くないって言ってるでしょ。」
「なめんなよ。俺は探偵だぜ。」

（なんや、工藤。かっこつけよって。

まぁ、でも次おうたときには俺も2人に負けんくらい幸せな顔見せたんで。）

そして、服部平次は新たな決意を胸に大阪行きの飛行機に乗った。

NEWカップル

今、服部と和葉は空の上。

2人はトロピカルランドで遊んだ後、新一たちと別れ、大阪行きの飛行機に乗った。

「・・・なぁ・・・平次。東京また一緒に行こな。」

そう言った和葉の顔は少し不安そうだ。

まただ。また和葉はこの顔をしている。

服部は、自分が和葉のことを好きだとわかった今、この顔を見るのがとても辛い。

どこの誰かはわからないが和葉の好きな男が、和葉にこの顔をさせている。

「和葉・・・」

「ん？なに？」

服部は言葉につまってしまう。でも、今言わなければ。

たとえ、これからは今までみたいに話すことがなくなってしまうとしても・・・

（俺は自分の幸せのために、少ない可能性にかけて言わなアカン。）

「平次？どうしたん？」

「和葉、俺はお前が好きなやつおるって知ってる。

けどな、お前が誰を好きでも、俺は・・・俺は和葉が好きや。」

服部は怖くて、和葉の顔を見れないでいる。

（情けないな・・・ほんまに。）

「・・・それ、この間の私の告白の答え？」

「え？」

服部はやっと和葉に目を向ける。

「え？って・・・やっぱ、平次聞いてなかってんな。

前に平次と一緒にお好み焼き食べに行ったとき、あたしゆーたやん。

『好きや』って。そしたら平次、『そうか』ってだけゆうてお好み焼き

必死になって食べてたやん。」

服部の頭にそのときの出来事が思い出される。

☆☆☆

「あぁ・・・思い出した。あんときのあれ、告白やったんか。」

（じゃぁ、今まで和葉を悩ましとった男って、俺っちゅうことか？）

「俺がお好み焼きもらうってゆーて、好きやからやらんって言いよるんか思ったで。

なんやぁ、すまんかったな。」

「そんなん、もう、どーでもエエよ。けど、さっき平次がうちにゆーてくれたことほんま？」

「ほんまや。ほんまはもっと早くからこの気持ちやったんやろーけど

いつもお前が当たり前のように傍におって気づかへんかったんや。

昨日と今日な、工藤とねーちゃんと話しとってやっと気ぃついた。」

「ほんなら、うち、平次の彼女になってエエの？」

「じゃぁ、逆に聞くけど俺がお前の彼氏でもエエか？」

「うん！！うち、彼氏は平次がいい／／／／！！平次は？」

「俺も、横にいつもおんのは和葉やないと、なんや、しっくりこんからなぁ。」

「しっくり・・・ってあんた・・・」

「それと、俺は工藤と一緒で独占欲が強い男って工藤たちと話とってわかったんや。

せやから・・・」

チュッ。

和葉の頬に何かが触れた。それはまぎれもなく服部の唇だった。

「え／／／／平次？」

「ゆーたやろ。俺は独占欲の強い男やって・・・」

「だからって今、こんなとこでせんでも／／／／」

「だれも見てへんっちゅうねん。さぁて、俺は疲れたから寝るわ。

うるさい女3人とずっとおったからなぁ。少しは工藤のねーちゃん見習えっちゅーねん。」

「うるさい女で悪かったなぁ。これからはそのうるさい女とずーと一緒やで。」

「まぁ、そんなの今更やし。気にすることもないけど。俺が寝るときくらいは静かにしとってくれや。」

「分かってるわ！！私だって昨日遅くまで起きてて眠いねん。ほなおやすみ。」

そう言って、和葉は自分の頭を平次の肩に乗せ、眠った。

（工藤、ほんまに俺ら似たもの同士やな。

工藤、ねーちゃん。俺も2人に負けんくらい幸せになったんで。）

服部も和葉の頭に自分の頭を乗せ、眠りについた。

NEWカップル（後書き）

服部くんと和葉ちゃんが珍しく素直！！

書いてて楽しかったです。

ベルモットとの再会

RRRRRR・・・・RRRRRRR・・・・

「お！工藤。俺や。」

「あー服部か。もう大阪着いたのか？」

「あぁ。今は家におる。で、工藤に報告や。」

「報告って、お前ら上手くいったのか？」

「まぁ、一応な。工藤とねーちゃんには感謝してんで。」

「お前から感謝されるって、なんか気持ちわりぃ。」

「なんや！俺が素直に感謝してんねん。何がきしょく悪いっつーんや。

まぁ、エエわ。とりあえずねーちゃんに変わってくれ。そこにおんのやろ？」

「あ？志保か・・・今、自分の部屋にいるけど、オメェよけいなこと言うんじゃねーのか？」

「なにがやねん。俺はねーちゃんにもお礼言いたいだけや。はよ、代われ！！」

新一は自分の携帯を持って志保の部屋に行く。

トントン！

「入るぞ。」「どうぞ。」

キィっと音を立てながら扉がひらく。

「志保、服部から電話だ。」

「服部くん？」

新一から携帯を受け取る。

「もしもし・・・。」

「おー。ねーちゃんか。」

「おめでとう。」

「え？なんや、さすがねーちゃんやなぁ。分かってんのかい。」

「で？どうしたの？私に電話代わったのだってこれを言うためじゃないでしょ？」

新一が志保と服部が携帯で話している光景をジーと見ている。

「ねーちゃんにはなんでもお見通しやな。」

「それで？なんなの？」

「まぁ、とりあえずはお礼ゆーわ。ありがと！
ほんで、本題にはいるけど、ねーちゃんはまだ工藤に遠慮してるやろ？
今まで見とってよーわかったわ。」
「遠慮なんてしてないわよ。」
「確かに、付き合いだしてから素直になったと思うけど
もっとねーちゃんの弱いとこ工藤に見せてエエんやで。
俺からはそんだけや。工藤と仲良くやりぃ。それと、工藤にゆーとってくれや。」
「何を？」
「俺も、工藤に負けんくらい幸せになったる、ってな。頼んだで。」
言い終わると服部が勢いよく電話を切った。
「服部なんて？」
「工藤くんに『俺も工藤より幸せになるって伝えて』って・・・」
「それなら、俺に直接言えばいいのに。あいつ。」
ＲＲＲＲＲＲ・・・ＲＲＲＲＲＲ・・・

再び新一の携帯が震える。画面にはジョディの名前が記されている。

「もしもし。」

「ハーイ。私です。」

「ジョディ先生。どうしたんですか？」

新一はジョディと話終えた後、志保の方を向いた。

「志保、明日学校から帰ってきて時間あるか？」

「えぇ。大丈夫よ。けど、なにかあったの？」

「ベルモットの処分が決まった。終身刑・・・だそうだ。」

「そう・・・」

志保は俯く。

「最後に志保に会いたいらしい。俺達が学校から帰ってきたら博士んちにジョディ先生たちと来るって・・・」

ベルモットは新一たちの命を助けた、元組織のメンバー。

新一も志保もベルモットがいなければ2人はこの世にいないかもしれない。

一時はベルモットの存在に怯えたこともあった。

「そう・・・」

「それと、明日は母さんも帰ってくるってよ。」

「え？有希子さんが？」

「志保が元に戻った姿を見たいらしい。

じゃぁ、明日は学校だし俺は帰るから。志保もちゃんと寝ろよ。おやすみ。」

「おやすみなさい。」

志保は新一が帰ったあと、新一の言った通り布団に入り、体を休めた。

（今日はちょっと疲れたわね・・・）

布団に入った志保はすぐに眠りについた。

☆☆☆

奥から有希子が玄関に向かって走ってくる。

「え・・・志保ちゃん？」

「はい。」

「わー！！やっぱ、美人ねー。哀ちゃんのときより更に綺麗になってるわ。

あ、新ちゃんも元に戻ってる。

それにしても新ちゃんいいわねー。こんな美人の彼女。」

「息子に久々に会ったっていうのに、俺にはそんだけかよ！！」

ピーンポーン♪

「新一、志保君おかえり。さっそくじゃがお客さんじゃよ。」

「お客さん？」

「ベル・・・シャロンだよ。母さんも知ってるだろ？一緒に来るか？」

「そうね。シャロンは私の友人だし。私も行くわ。」

☆☆☆

「ジョディ先生、お久しぶりです。」
「工藤くんと、志保ちゃんね。その姿では初めまして、よね。」
「えぇ。」
「よかったわ。アメリカに帰る前に2人の元の姿が見れて。」
そう話していると、車の中から女性が出てきた。
「久しぶりね。クールガイ、シェリー。」
「「ベルモット！」」
「それじゃぁ、私は車に乗ってるから。」
ジョディを一瞥して、再びベルモットを見る。
ベルモットの両手には手錠もなにもかけられていない。
ベルモットのことをジョディは信用しているのだろう。
「シェリー、いや、今は志保だったかしら。」
「えぇ、宮野志保よ。」
「シャロン！！」
有希子がベルモットに駆け寄ってくる。

「有希子？そう、あなたもいたのね。」

「シャロン・・・あなたに言いたいことが一つあるのよ。」

「そうね。なんであの組織に入ったかってことでしょ？」

「違うわよ。あなたはあんな犯罪組織に自分から入る人じゃない。殺人をしたのもそれなりの理由があったからだって私は信じてるわ。

私が言いたいのは、あなたを責めることじゃない。

お礼を言いたいのよ。

新一と志保ちゃんと、あと新一のお友達の服部くん。

3人を助けてくれてありがとう。

それと、私が女優だったころからもいろいろと助けてもらってたわ。」

「ふふっ。あなたはほんとにお人よしね。

大好きよ、あなたのそういうところ。そのお人よしなところは息子に受け継がれたのね。」

「お人よしって、褒められてるようには聞こえないけど？」

ベルモットはふっ、と笑うと志保の方へ顔を向きなおした。

「志保・・・これ、あなたにあげるわ。明美が死んだとき明美の家で見つけたのよ。」

「え？これ・・・」

志保に渡されたのはアルバムだった。

中には１０枚くらいの写真がはいっている。

「これ・・・私？」

志保が見ているのは志保が産まれたばかりのときの写真。

「そうよ。これはあなた。あなたのお母さんが撮ったものよ。」

「なんで、お母さんが・・・」

「あなたのお母さんと私は昔から親友だったのよ。

志保が産まれたとき、私もいたわ。病院に。ほら、これ・・・」

ベルモットが指差した写真を見るとそこには日本人の男性と外国人の女性２人、

産まれたばかりの志保、そしてその横には志保の姉、明美が写っていた。

外国人の女性の一人、子供を抱いているのは志保の母親、もう一人

は・・・

「この2人があなたの両親よ。そして、これは私。」

ベルモットが『私』と言った写真の女性は眼鏡をかけた金髪の４０歳代と思われる女性。

新一はこの女性に見覚えがあった。

前に有希子と蘭と海外に行ったときに会った人だ。

「組織には整形したって言ったけど、本当は私もあなたの薬を飲んだのよ。

アポトキシンを・・・。

組織のボスが私を信用してくれてたみたいだったから疑われなかったわ。

有希子とクールガイは分かってたんでしょ？　私がその薬を飲んだって・・・」

「あぁ、確信とまではいかなかったけどな。」

「あら、私は分かってたわよ。あなたのお葬式の時からあなたは死んでない。

姿を変えてどこかにいる、って。

実際、新ちゃんと志保ちゃんのこともあったしね。」

やっぱりあなたたちには勝てないわね、と言ってベルモットは優しく笑った。

「志保・・・あなたの両親は凄くいい人だったのよ。

志保が産まれたときも2人とも凄く喜んでたわ。もちろん明美も。

これは最初で最後のあなた達の家族写真よ。大事にしなさい。」

「ありがとう。」

志保は泣いている。

「私も一緒に写ってるのは私がもらっていくわ。

家族のいない私にとってはあなたの家族が私の家族みたいなものだったから。

それじゃぁ、私は行くわね。ちゃんと罪を償ってくるわ。

それと、クールガイ。志保を幸せにしてあげて。」

「わーってるよ。」

「有希子も、旦那と仲良くしなさいよ。」

「分かってるわよ！・・・元気でね、シャロン。」

「あなた達も。」

ベルモットは、車に乗り、３人の前から去っていった。

新一の横で志保は泣いている。ベルモットにもらったアルバムをしっかりと抱えながら。

新一は志保を力いっぱい抱きしめた。志保が泣き止むまでずっと・・・

ベルモットとの再会（後書き）

なんか・・・原作と離れすぎてしまったような・・・

すいません。

納得のいかない人も多いだろうと思います・・・

本当にすいません。

写真の中の思い出

「志保、落ち着いたか？」

「えぇ。ごめんなさい。もう大丈夫よ。ありがとう。」

「新ちゃん、志保ちゃん、とりあえず入ったら？」

有希子は珍しく抱き合っている2人を冷やかさず、博士の家に入っていった。

有希子も友人との別れは辛かったのだ。

彼女の部屋からはすすり泣く声が聞こえる。

志保も自分の部屋に入り、椅子にすわる。

そして、さっきもらったアルバムを最初のページから見ていく。

1ページ目に唯一の家族写真がある。

（この人たちが私のお父さんとお母さん・・・）

志保は幼いときに両親をなくしたため、両親の顔を覚えていなかった。

（おねーちゃんはお父さん似で、私はお母さん似だったのね。

髪の色と顔で私がお母さん似っていうのは確かだったけど・・・

２人とも優しそうな目・・・）

次のページには志保が産まれたばかりの時に母親が撮ったという写真。

その次には無邪気に笑う志保と明美。

その後のページにも志保と明美が映った写真が挟まれていた。

「志保ってこんな風にも笑えるんだな。」

いつの間にか新一は志保の後ろにいた。

「あなた、なんで勝手に・・・」

「ノックしたけど、返事がなかったから入ったんだよ。なにかあったかと思って。」

「それで？どうしたの？」

「いや・・・別に用はねぇけど。」

「そう。」

いつもの志保なら追い返すところだが、今は、今だけはどうしても新一にいてほしかった。

「工藤くん、気晴らしに買い物行かない？今日の夕食の材料まだ買ってなかったの。」

「そうだな。じゃぁ、行くか。待ってろ。着替えてくるから。」
新一は自分の家に着替えに戻り、１０分くらいで博士の家に来た。
「よし。志保行くか。」

☆☆☆

新一にはなにかひっかかるものがあった。

（あの人、確か帝丹の・・・）

「どうしたの、工藤くん？行くわよ。」

「え、あ、あぁ。」

2人は夕食の材料を買い終え、帰っていった。

帰ると博士と有希子がリビングで談笑していた。

さっきまで部屋で泣いていた彼女はどこへ行ったのだろう・・・

「「ただいま。」」

「あ！！新ちゃん、志保ちゃんおかえり。」

「2人ともおかえり。」

「私、今から夕食作るので、有希子さんはゆっくりしていてください。」

「いいの？それじゃぁお言葉に甘えてゆっくりしてるわね。」

（母さん、絶対最初から手伝う気なかっただろ。）

「志保、俺なんか手伝おうか？」

「遠慮しとくわ。あなたに包丁をもたせるのは殺人現場だけで十分よ。」

その言葉にどういう意味だよ、とか言いつつ確かにそうだよな・・・とか思っている新一。

３０分後夕食が出来上がり、みんなで集まって食べた。

「志保ちゃん、料理上手いのね。」

「ありがとうございます。」

「志保ちゃんはいいお嫁さんになるわね。ほんと新ちゃんが羨ましいわ。」

新一と志保の顔が赤くなる。

「ふふっ。２人とも照れちゃってかわいいわね。」

「そんなんじゃねーよ。」

「志保ちゃんがうちにくるのはいつかなぁっと。」

「新一、志保くんはやらんぞ。」

有希子も博士も言いたいことを次々に言う。

そんな２人を無視して新一と志保は食べる箸を進めた。

写真の中の思い出（後書き）

進展がなくてすいません。

昼休み（前書き）

5月

昼休み

新一と志保が元の姿に戻って一ヶ月が過ぎていた。

毎日、穏やかな暮らしが続いている、と思った矢先・・・

学校が終わった後、志保が呼び出された。

それは先生からではなく、隣のクラスの男子からであった。

（やっぱりな・・・そろそろ来るとは思ってたけど。）

新一は志保が気になりながらも、教室に残って志保を待つことにした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

キィー。

扉の開く音が響く。

志保は屋上に呼び出されていた。

「宮野さん・・・来てくれたんだ。よかった・・・。」

「あなたが呼び出したんでしょ？来ないわけにはいかないじゃない。」

屋上に男と2人きり。

いくら志保でもこの状況は男が何を言いたいのかはわかる。

（はぁ。面倒ね。）

男がなかなか話しださないので少し苛々した志保は自分から口を開く。

「どうしたの？私、急ぎの用事があるから早く帰りたいんだけど。」

「宮野さん・・・」

志保の言葉で男もやっと話し始める。

「宮野さん。俺、宮野さんが好きです。宮野さんに一目ぼれしました。」

（やっぱり・・・）

「気持ちはうれしいけど、私好きな人いるから。

それに、私はあなたを知らないし、あなたも私のこと何も知らないでしょ？」

「好きな人って工藤くんだよね？付き合ってるって噂も聞いてた。」

「そう。それなら・・・」

「それでも、俺は宮野さんが好きです。宮野さんが俺のことを知らないなら
これから知ってください。俺も宮野さんのこともっと知るから。」
「ごめんなさい。私はあなたとは付き合えないわ。
どんなにあなたが私を想ってくれても私の目はあなたには向かない。」
「そう、か・・・それなら俺は潔くあきらめるよ。
時間とらせてゴメン。それじゃぁ。」
男は帰って行った。その姿を確認して志保は大きくため息をついた。
（ハァ・・・疲れるわね。）
しばらくして志保は新一が待っている教室に戻った。
「ごめんなさい。遅くなって。」
「あぁ、別に。」
「何があったか聞かないの？」
「俺は志保を信じてるからな。でも、まぁ少しは気になったけど。」
「そう。ちゃんと断ったから大丈夫よ。じゃぁ、帰りましょう」

２人は手を繋いで博士の家に帰って行った。

☆☆☆

ガラッ。

志保が帰ってきた。

「お帰り。じゃぁ、帰るか。」

４人は教室をでた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

この日、志保は新一の家にいた。

学校に行こうとしたとき、博士の家に有希子から電話で、新一は熱があるから学校は休む、と聞き

心配になった志保は急いで、新一の家に来たのだ。

「あぁ、志保か。わりぃな。俺、今日は学校休むよ。」

「そうね、そうした方がいいわ。私も今日は休むから。」

「いや、俺は大丈夫だから志保は学校行ってこい。家には母さんもいるし。」

「そうよ。新ちゃんのことは私に任せて。志保ちゃんは行ってらっしゃい。」

志保は新一が心配だったが、有希子がいるなら大丈夫だろうと思い

後から志保を迎えにきた蘭たちと一緒に学校に行った。
その日の昼休み、志保はまた呼び出された。
「宮野さん。」
「あ・・・あなた、確か、この間スーパーで・・・」
志保を呼び出した男は前に新一と行ったスーパーで志保にぶつかってきた人だった。
「覚えててくれたんだ。
俺、宮野さんが好き。あの時から宮野さんのこと忘れられなっかたんだ。」
もちろん、志保はこの告白を断る。
「ごめんなさい。私はあなたとは付き合えないわ。」
「工藤新一。今の宮野さんの彼氏。頭がよくてスポーツ抜群、おまけに顔もよく有名人。
俺にはとうてい敵わない。」
「あら、あなた彼のことよくわかってるのね。」
「当たり前だろ?俺が宮野さんに告白する前にいろいろと調べておいたんだから。

だけど俺も一つだけ工藤新一に勝るものがあった。」

「なにかしら。」

「それは、俺の方が宮野さんのことを好きってことだよ。」

そう言った男の目は不気味だった。

ニヤニヤしながら男の顔が志保の顔に近づいてくる。

志保が突き放そうとしたとき、

パシッ！！

男の両手が志保の両腕をつかむ。

そして、男の唇が志保の唇に重なる。

「！！」

志保は抵抗しようとしても男の力が強くて抵抗できない。

「ん・・・んん・・・」

男の舌が志保の口の中に入ってくる。

そんな時チャイムがなった。

男の唇が離れる。

「あぁぁ、チャイムなっちゃったね。どうする？このまま2人で授業さぼる？」

「ふざけないで！！」

志保は緩んだ男の腕を勢いよく振り払い教室に帰っていった。

怒り

志保が教室に戻ってきたとき呼吸が乱れて、顔色も悪かった。

蘭が心配して志保に声をかける。

「志保、どうしたの？顔色悪いよ？」

だが、志保は大丈夫よ、と言うだけだった。

二度目のチャイムがなり、午後の授業が始まる。

志保は顔を机に伏せて、授業も聞いていない。

授業がおわったあと、やはり様子のおかしい志保に蘭と園子がどうしたのか聞いた。

それでも、志保は大丈夫だから・・・と言う。

☆☆☆

あえて、何も聞かなかった。

（どうしたんじゃろうか・・・志保くん・・・

新一は熱があるからこっちに来てほしい、なんて言えんし・・・）

どうしたらよいか迷っているとき、志保の部屋からドンッ、と大きな音が聞こえた。

博士は急いで志保の部屋の様子を見に行った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「シェリー、こっちに来い。」

志保は言われたとおりに男の傍に行く。

そして、その男に唇を塞がれ、無理やりベッドに体を押し付けられる。

こんなことをするのは誰か、暗くて顔は見えないが志保にはすぐにわかった。

金色の長髪・・・シェリーと言って自分を呼ぶあの声・・・ジンだ。

志保はもう抵抗しない。いや、できない。

怖い・・・怖い・・・

自然と涙が溢れてくる。

工藤くん、助けて・・・

☆☆☆

「どんな夢だよ。」

「別にたいした夢じゃないから、もう大丈夫よ。」

「でも、泣いてたぞ。それに、俺に助けて、って・・・」

「え？」

「たく・・・なんにも頼ってくんねーんだな。」

「そういうわけじゃないのよ。でも、本当に大丈夫だから、心配しないで。

それより、工藤くんこそ熱は？大丈夫なの？」

オメェは大丈夫じゃねーだろ、と思いつつ志保に返事をする。

「あぁ、一晩寝たらすっかりよくなった。それで？何があった？」

新一の一晩という言葉を聞き、窓の外を見ると空は明るくなっていた。

志保はあれから今までずっと寝ていたのだとやっと理解した。

「博士に聞いた。帰ってくるなり部屋に閉じこもって、大きな音がなったと思ったら

志保が倒れてたって。

お前が倒れるほどのことがあったんだろ？

さっきも蘭に学校に行くの遅れるって言ったら、志保のこと心配しててよ、

昨日の昼休みから志保の様子がおかしかったって教えてくれた。

それに熱でもなく風邪をひいてるわけでもない。だとしたら志保が倒れる理由は・・・」

「なんでもないわよ。ただ疲れてただけよ。」

志保は新一には言いたくなかった。新一を傷つけたくなかった。

だから嘘をついた。だが・・・

「嘘だな。志保がなんでもないって言うときは何かあんだよ。

ったく、一人で抱えこむな。たまには俺を頼ってくれよ。」

新一の腕が志保の背中に回る。

「・・・」

「俺に言えねぇことか？」

ーーー『遠慮してるやろ？』『もっとねーちゃんの弱いとこ工藤に見せてエエんやで。』ーーー

志保の頭の中に服部が言っていた言葉が浮かぶ。

（工藤くんに遠慮してる？もっと私の弱いところ見せていいの？
　だけど、今工藤くんに甘えてしまったら、私はきっと、もっと弱くなる。）

志保の目からはとめどなく涙が溢れてくる。志保は耐えていたつもりだが体は嘘をつかない。

いつの間に自分はこんなに泣き虫になったのだろう、と考える。

「ほらな。辛いんだろ？言ってみろ。」

決心した。

「工藤くん・・・昨日ね・・・」

志保は話した。昨日の出来事を。全て。

志保から話を聞き終わった新一は怒っていた。その男に対して、いや志保を守れなかった自分に対して。

志保を抱きしめながらもその腕には怒りがこもっていた。

「志保。学校行くぞ。」

「でも・・・」

「俺、志保の前でそいつと決着をつける。」

「決着って、喧嘩？」

「いや、ちゃんと言うんだよ。志保は俺のだ！って・・・
俺が悪かったんだよ。今まではっきりと言わなかったから。とにかく行くぞ。」
有希子と博士はそんな2人を黙って見送った。
新一と志保が教室についた頃、もう授業は始まっていた。
午前中の授業が終わると、新一は志保の手を引いて《昨日の男》のクラスへ向かう。
そして、勝手にそのクラスへ入り、男を探して男の前に立つ。
「え・・・工藤と・・・宮野さん・・・」
3人の周りの人たちは騒いでいる。
「わー工藤くんだ！！」「宮野さんもいる！！」
だが、しばらくして新一たちの雰囲気を感じ取ったのか、騒いでいた人たちも静かになった。
「なんだ？お前らの教室はここじゃねーだろ？」
「なんだ？じゃねーよ！！お前、昨日志保に何した？」
「何したって・・・あぁ、あれ？キスしたんだよ。なにか問題あったか？」

この言葉に新一の怒りは爆発した。

「ふざけんな！！志保は俺のだ！人の女に手ーだしてんじゃねーよ！！

次こんなことやったやつは俺が絶対ゆるさねー。」

周りは唖然としている。こんなにキレている工藤新一を今まで見たことがなかったのだ。

新一の前にいる男も、新一がここまでキレるとは思っていなかったらしく驚いている。

「こいつに手ぇ出したやつは絶対許さねー。」

新一は言いたいことを言い終わると志保の手を強く握ってその教室を出て行った。

教室の前には多くの人が見に来ていたが気にしなかった。

（工藤くん・・・あなた一人でかっこつけすぎよ。でも、かっこよかったわよ。）

ふふっ、と志保が笑う。

それに気づいた新一は足を止め、志保の顔を見た。

「何笑ってんだよ。」

そう言った新一の顔はほんのりと赤かった。

「ありがとね、探偵さん。まぁ、あの台詞はかなりベタだとは思ったけどうれしかったわ。」

「そうか。それはまぁ、よかった・・・」

チュッ。

志保は両手で新一の顔を自分の顔に近づけ、軽くキスをした。

志保からの初めてのキスに照れる新一。

「これは今日のお礼よ。」

その後、新一と志保は教室に戻り、2人のことを一部始終見ていたクラスメートに冷やかされたのであった。

怒り（後書き）

蘭の幸せ

学校が終わり、新一と志保は阿笠邸に着いた。

「博士、ただいま。」

「邪魔するぜー。」

2人がリビングに入ろうとすると博士ともう1人、女性の声が聞こえた。

「しーんちゃん、しーほちゃんおかえり。」

「なんで母さんがここにいんだよ。」

「だって、家にいても1人で暇で暇で・・・」

「だったら、父さんのところへ帰ったらいいじゃねーか。だいたいいつまでいんだよ。」

新一は呆れ顔で有希子に言う。

「優作のところにいてもあの人は私なんかより仕事なのよ。

それなら、ここで博士や志保ちゃんと話してるほうが楽しいわ。

それとも何？私がここにいちゃダメな理由があるの？」

「別にねーけど。」

（早く帰ってくれねーかな。このままじゃ志保と何もできねーじゃねーか。）

新一は本音は言えなかった。こんなことを言ったら余計に冷やかされるのを知っているからだ。

「それより、新ちゃん。ちゃんと言ったの？志保ちゃんは自分の彼女だってこと・・・」

「あぁ。言ったよ。怒鳴っちまったけどな。はっきりさせておいたぜ。」

「もう。志保ちゃんかわいいんだからすぐに男が寄ってくるの分かってたでしょう。

いくら自分が志保ちゃんの彼氏だからって油断してたらほかの男の子にとられちゃうわよ。」

「う・・・」

その2人のやり取りわ横で見ていた志保はクスっと笑っている。

「そうそう、そういえば蘭ちゃん。さっき新ちゃんたちが帰ってくる前に

買い物に行ってたんだけど、帰ってくるときに見かけたわよ。男の人が横にいたみたいだったけど

蘭ちゃんもついに彼氏ができたのね。」

「「え！？」」

「ほー蘭くんもか。志保くんも新一くんも蘭くんもそういう年頃なんじゃのー。

若いっていうのはうらやましいのー。」

新一と志保は顔を見合わせた。そんなこと、蘭から一言も聞いてなかったのだ。

「明日、蘭に聞かなきゃ。」「そだな。」

☆☆☆

「・・・うん。昨日からだけど。今日、学校で言おうと思ってたのに。

でも、なんで知ってるの？」

「昨日、母さんが蘭が男と歩いてるのを見たって言ってたから・・・

なぁ、それより蘭。その彼氏ってどんなやつだ？高校の奴か？」

「え・・・と、新出先生だよ。新一も知ってるでしょ。」

「え？えぇぇぇぇ！？新出先生ってあの？」

「そうだよ。そんなに驚かなくても・・・」

新一が驚いている横で志保も驚いている。

（新出先生ってたしか・・・前にベルモットが変装してた人よね？）

「前からたまに会ってたんだけどね、昨日偶然お店で会って告白されたの。」

蘭は顔を赤く染めながら言う。

「じゃぁ、蘭も幸せなのね。」

「うん！！幸せだよ。これからは志保たちに負けないくらいもっと幸せになるんだから！」

「そう。よかった。」「よかったな、蘭。」

「うん！ありがとう。あっ！！園子だ。園子にも報告してくるから。」

そういうと足早に蘭は2人のもとから去っていった。

数メートル先で蘭と園子が騒いでいるのが見える。

学校についたあとも4人の話の内容は新出先生と蘭のことでもちきりだった。

そこでふと園子が言葉を漏らした。

「私たちって、なんだかんだで青春エンジョイしてるわよね。

私は真さんと、蘭は新出先生と、志保は新一くんと・・・

ついこの間までは考えられなかったわ。」

「そういえば和葉ちゃんも服部くんと恋人になったらしいよ。」

「なんだか、うまくいきすぎてて怖いわね。」

「そうだな・・・」

ははは、と4人は苦笑する。だが、その顔にはどこか幸せな表情があった。

この幸せが続きますように・・・

蘭の幸せ（後書き）

今回は短めです。

蘭ちゃんやっと幸せになりました。よかったよかった。

でも、最後の終わり方、どうしようか迷った結果

ああなりました。ちょっとおかしいような・・・

謎の男（前書き）

8月

謎の男

「ねぇ、新ちゃんと志保ちゃん。ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

新一は嫌な感じがした。

「今日さー・・・」

「今日は俺と志保は出かけるから無理だ。」

有希子の言葉を予想したかのように新一が話を遮る。

「何よ。いつもデートしてるじゃない。たまにはいいでしょ？

それに、志保ちゃんも一緒に行けばあの子たちも喜ぶわよ。」

「「あの子たち？」」

「そう！この間ね、小さな探偵くんたちと約束しちゃったの。

今度、海に連れて行ってあげるって。

で、約束した日が今日なんだけど

昨日、優作から電話があって今日、日本に帰ってくるって言うのよ。

だから空港まで向かえに行かなくちゃいけなくて。」

「え？父さんも帰ってくんの？」

「そうなのよ。ほんと勝手よね。帰ってくるならもっと早く言ってくれないと。

ね？だから、お願い！！送り迎えは私がするから。」

勝手なのは母さんだろ・・・と、心の中で新一は突っ込む。

「まぁ、いいんじゃない？私も歩美ちゃんたちに会いたいし。」

「そうだな。じゃぁ行くか。」

「ありがとう。２人とも。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

そして、２人は少年探偵団の３人と一緒に海に行った。

蘭と園子も誘ってみたが蘭は新出先生と付き合って３ヶ月の記念ということでデートらしく、

園子はおねーさんと買い物に行く予定がある、ということで断られた。

「志保おねーさん、ちょっとここにいてもいい？」

ビーチパラソルの下にいる志保に歩美が話しかけてきた。

「いいけど、どうしたの？歩美ちゃん。」

「久しぶりに2人で話したくて・・・会うのも久しぶりだし。」

「そうね。私も歩美ちゃんたちに会いたかったわ。」

志保の言葉を聞いて満足そうな歩美。

「志保おねーさん、新一おにーさんに好きって言ったことある？」

「え？そういえばないわね・・・でも、どうして？」

「だって、志保おねーさん、哀ちゃんのときから全然素直じゃなかたから。

それに周りからみたら哀ちゃんがコナンくんのこと好きなんだってすぐ分かるのに

コナンくんだけは哀ちゃんのキモチ知らなかったんだよ？

それくらい鈍感なんだから、志保おねーさんもちゃんと好きって言わないと

新一おにーさん不安になっちゃうよ？」

志保は１０歳も年下の親友の言葉に驚いた。なんでこんなに自分達のことをわかってるのだろう。

歩美と志保は海の中で光彦と元太と遊んでいる新一を見ている。
「志保おねーさん。歩美、わかるんだよ。2人とも大切な友達だから。
ほら、今言ってきたら？」
「今？言えないわよ。そんなこと・・・」
「それなら歩美が代わりに言ってあげようか？」
「え？それは・・・」
「嫌でしょ？ほら！」
「わっ！！」
歩美が志保の背中を勢いよく押したせいで志保の体が自然と前に進む。
足が絡まり志保は転びそうになる。
「おっと・・・、大丈夫ですか？」
転びそうになった志保をギリギリで支えたのは新一・・・ではなく、新一とそっくりの顔をした男だった。
志保はその顔を見て一瞬驚いたが、すぐに小さな笑みをこぼした。

「あ・・・ありがとう。それにしても久しぶりね。怪盗さん？」

『怪盗』と呼ばれたこの男は全く驚いた様子もなく、落ち着いて返事をする。

「久しぶりだね。志保ちゃん。よかった。ちゃんと戻れたんだ。」

「えぇ。あなたのおかげでね。もう一人、元の姿に戻った人があそこにいるわよ。顔でも見てきたら？」

「やめとくよ。あまりあの名探偵に深く関わるとこっちの身も危ないしね。

おっ！やばい。こっちに気づいた。それじゃぁ、またね。志保ちゃん。」

「えぇ。助かったわ。ありがとう。」

そこへ新一が志保のもとへとやってきた。少し威嚇するような表情で。

「あの男知り合いか？」

「少し会ったことがあるだけよ。」

「そうか。」

新一は心配そうな顔をしている。

「大丈夫よ。前にも言ったようにあなただけで精一杯だから、
みんなが言う『浮気』なんてことしないわよ。」
「わーってるよ。」
「そう。それじゃぁ、そろそろ帰る準備しましょう。有希子さんが迎えにくるわよ。」
「そうだな。オメェら、片付けるぞ。」
そんな中、志保と歩美はみんなと少し離れたところで話していた。
「どうして言わなかったの？」
「あんなこと恥ずかしくて言えるわけないじゃない。」
「だけど、志保おねーさんが言ったら新一おにーさんも凄く喜ぶと思うのに・・・」
「いつか言うわよ。」
「ほんとに？」
「えぇ。じゃぁ、有希子さんも来たみたいだし帰るわよ。」
「はーい。」
それから新一と志保と少年探偵団　の３人は有希子の車で帰っていった。

謎の男（後書き）

この話のタイトルが謎の男ってなってますけど・・・
全然謎じゃないですよね。
ははは・・・

疑い（前書き）

9月

疑い

みんなで海に遊びに行った日から二週間がたったこの日。

志保は朝から少し体がダルくて自分のベッドの上でゴロゴロしていた。

今日は博士は学会、新一は目暮警部からの呼び出しで、有希子は夫の優作と出かけている。

もう、外を見てみると空が暗くなってきている。

「そろそろ、博士も帰ってくる頃ね。夕食の買い物しなきゃいけないわね・・・

工藤くんも有希子さんたちも夕食はどうするのかしら。」

一人、今日の夕食のメニューを考えつつ、出て行った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

買い物を済ませ、阿笠邸に向かって歩き出す。

そのとき、誰かに名前を呼ばれた気がしてその方向へと目を向けると

笑顔で志保の方へと近づいてくる人を見つけた。

「しーほちゃん。お買い物？」

「えぇ。あなたは愛しの彼女とお出かけかしら？」

「違うよ。俺は一人でブラブラと歩いてただけ。家にいても暇だったから。」

それに彼女なんていないしね、と言いながら志保の横を歩く。

「いいわね。暇があるなんて。それにしても、次の獲物は決まったの？」

すると、男は真面目な顔つきになった。

「俺、もう怪盗キッドは辞めたよ。父さんの仇の組織は志保ちゃんたちがつぶしてくれたし。

いくら理由があったとしても人のものを盗むのは立派な犯罪だからね。」

「そうよね。どんな理由があっても犯罪は犯罪。それは私もちゃんと分かってるわ。」

志保は悲しそうに言う。

「だけど、あなたがそんなこと言ったら探偵や警察にとっては少し寂しいかもしれないわよ？」

「探偵って・・・あの名探偵のこと？」

「そうね。少なくともあの探偵さんはあなたとの勝負が楽しかったみたいだから。」

「はは・・・俺もあいつがいるとやる気が出てきて楽しかったぜ。」

「あなた達ってほんと悪趣味よね。

それじゃぁ、そろそろ探偵さんも帰ってくるころだと思うから私は帰るわ。」

「うん！今度また会おうね。」

志保は男に背を向けて歩き出した。それを男は黙って見送っていた。

しかし・・・

ガシャ！！

男も志保に背を向けて歩きだそうとしたとき後ろで何かが落ちるような音がした。

振り向いてみてみると、そこには倒れている志保がいた。

「志保ちゃん！！」

走って志保に近づく。志保の息は荒い。

額を触ってみるとかなり熱かった。

「志保ちゃん・・・凄い熱・・・」

男は志保を抱きかかえ、阿笠邸に向かって行った。

☆☆☆

「俺？俺は志保ちゃんの知り合い・・・みたいなものだよ。
志保ちゃん、さっき道で倒れて。凄い熱だったから家まで送ったんだよ。」
「熱？そうか、サンキューな。もう多分大丈夫だから、後は俺に任せろ。」
「あ、あぁ。それじゃぁ、志保ちゃんお大事に。」
「ありがとう。」
その男は静かに帰っていった。
（工藤がまさか来るとはな・・・焦ったぜ。にしても、あの名探偵と志保ちゃんってもしかして・・・
もしそうだったらやばくねーか？志保ちゃん、大丈夫かなー）
その頃新一と志保は・・・
「志保、大丈夫か？こんな熱があんのに、外にでるなよ。」
「夕食を買いに行くだけだから大丈夫だと思ったのよ。」
「そうか。それなら、ゆっくり休め。俺はオメェに聞きたい事があ

るからな。

志保が起きた後話を聞かせてもらうぞ。」

「そうね。」

志保は心配だった。さっきの出来事を新一が誤解してたら・・・

それからしばらく眠れなかったが新一が傍にいてくれてようやく眠ることが出来た。

喧嘩

「で？あの男は誰なんだ？」

1時間後、志保が眠りから覚め、体調も少しよくなったところで新一は先ほどの男の話を聞く。

「彼はただの知り合いよ。あの人も言ってたでしょ。

私が道で倒れてるのを見て、ここまで運んでくれたのよ。」

「あいつ、高校のやつか？」

「違うわ。でも、昔からの知り合いよ。」

「昔から？それって、灰原になる前からか？」

志保はこの言葉でしまった、と思った。

新一は志保が幼いころから組織に入ったのを知っている。

組織以外に知り合いなどほとんどいなかったのだ。

「とにかく、彼とは何もないから。この間海に行ったときにも言ったじゃない。

そんな関係じゃないって。」

「あいつ、あのときのやつか！？」

「えぇ。・・・話は終わり？私もう少し眠ってもいいかしら？」

「え？あぁ、悪かったな。じゃぁ、俺も帰るよ。またな。」

志保は新一が去ったあとの扉を見つめる。

（はぁ・・・工藤くん、いつも私のこと信じてるって言ってくれるけど

やっぱり不安なのかしら。

歩美ちゃんの言うとおり、言葉にしないとダメね。）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新一は阿笠邸を出たあと、志保の部屋にいた男のことが気になっていた。

（あの顔・・・知らないはずなのに知ってる気がするんだよな。

志保が灰原になる前から知ってるってことは・・・

組織にかかわりのあるやつか？

志保は子供のときから組織以外の人間と関わることはなかったらしいし。

それに、あの男、みょーに志保に慣れなれしかったし。

まぁ、志保が浮気なんかするわけねーし。あんまり気にすることでもねーか。

けど・・・やっぱ不安なんだよな。志保が俺に好き、なんて言ってくれたことないし。

あぁーーークソッ！！俺があいつを信じねーでどーすんだよ！！！！そういえば、俺あいつにプレゼントとかあげたことねーな。

明日にでも探してみるか。）

新一は志保の喜ぶ顔を想像しながら自宅へと帰っていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

次の日、新一はクラスの女子たちと話していた。

「なぁ、もしプレゼントもらうとしたらどんなのがうれしい？」

新一は志保や志保の親友の蘭・園子に見つからないように何人かの女子に同じ質問をしていた。

しかし、志保は気づいていた。

その日新一は先に一人で帰ってしまった。

「どうしたのかな、新一。志保にも何も言わないで先に帰るなんて。」

「もしかして、新一くん浮気？」

園子が笑顔で冗談を言うのを蘭がフォローした。

「それはないよ。新一、志保にぞっこんだもん。もう！園子もそんなこと言わないの。」

「冗談よ。志保もそんなことないって新一くんを信じてるんだから。私はただ、ちょっとアツアツな2人をからかっただけよ。」

蘭と園子はそう言うが、志保は少し寂しそうな顔をした。

周りの人はその志保の表情の変化に気づかなかった。

☆☆☆

振り向くと昨日の男がいた。

「志ー保ちゃん。お帰り。もう風邪はよくなったの？」

「えぇ。昨日はありがとう。ゆっくり寝たら一日で治ったわ。それで？今日はどうしたの？」

「ん？今日はね、昨日のこと言い訳しにきたんだけど。」

「言い訳？」

「うん！あの名探偵・・・工藤って、志保ちゃんの彼氏でしょ？

昨日、あのタイミングでアイツ帰ってきたから変な誤解して喧嘩になってたらどうしよう

って思って・・・」

「じゃぁ、またこんなところで話てるのが彼に見られて誤解されないように

あなたは帰ったほうがいいんじゃない？それと・・・

☆☆☆

買い物している客は女性ばかりだった。恥ずかしいというキモチを抑え、目当ての商品を探す。

その店で、なんとか気に入った商品を見つけプレゼント用にラッピングしてもらい店をでた。

店を出た頃空はもう暗くなっていた。

（志保、家にいるかな？）

新一は先ほど買ったプレゼントを大事にカバンのなかにしまい阿笠邸へと足を進める。

あと、この角を曲がれば阿笠の家だというところで話声が聞こえた。

声の主はすぐにわかった。

間違えるはずもない。あれは志保だ。そしてもう一人は昨日のあの男だ。

こっそり見てみると、男は学ランを着ている。

「・・・は帰ったほうがいいんじゃない？それとバレないようにね。あなたはもう顔を見られてるんだから。バレるのも時間の問題よ。」

「大丈夫だよ。そんな簡単につかまらないよ。だって俺はあの組織にも見つからなかったんだよ？

志保ちゃんには見つかったけど。」

新一は隠れて2人の会話を聞いていた。

（バレる？あの組織？志保に見つかったって事はアイツの言っているのはやつらのことか！！

なんでアイツがやつらのこと知ってんだ！？やっぱり関わりあるのか？）

「それより、早く帰ったほうがいいわよ。

もうすぐあなたの天敵の名探偵さんも帰ってくると思うから。」

（天敵？俺が？）

「そうだね。それじゃー志保ちゃん、またね。」

「えぇ。もう会わないと思うけど。」

「まだそんなこと言ってんの？変わらないね。志保ちゃんは。

哀ちゃんのときもずっとそんな感じだったよねー。」

「ごめんなさいね。可愛げのない女で。」

「そんなこと言ってないじゃん。ただ、素直になったらもっと可愛いのにって思っただけ。」

「はいはい。じゃぁね。」

志保は冷たい一言を残して家に入っていった。

男は志保が家の中に入ったのを確認してから去っていった。

（クソ！！どういうことなんだよ！）

新一は頭を抱え込む。

（とりあえず、志保に聞くしかないか・・・

何も話さないだろうけど、聞かねーと。

もしあの男が組織の残党とかだったら志保の命があぶねーし。）

新一は阿笠邸の玄関の扉を開けた。

（げ・・・工藤？もしかして話聞いてたか？やべー・・・）

男は自分が志保と別れた後、新一が阿笠邸に入っていくのを見ていた。

（昨日に引き続きなんなんだよ、あの探偵は・・・）

☆☆☆

「志保」

志保が夕食の準備をしているとき新一が帰ってきた。

とは言っても、自分の家ではないのだが・・・

「お帰り。遅かったのね。どこ行ってたの？」

「んなことよりお前に話がある。そこに座れ。」

新一は自分が座っているソファの向かいにあるソファを指さした。

志保は言われたとおり座る。

「さっき、お前と昨日の男が話してるのを聞いた。」

「！！」

「あれはどういうことだ？あいつは何で組織のことを知ってる？あいつは何者なんだ？」

「・・・・」

「あの話の内容からして組織に関わりのあるやつだということは分かった。

それで志保の前からの知り合いというのも納得がいく。」

「盗み聞き？悪趣味ね。」

「俺の質問に答えろ。ちゃんと話せ。」

新一が急に声を荒げたので、志保はビクッとなったが、冷静に口を開く。

「・・・あなたは、彼が誰なのか知ってどうするの？」

「俺は、お前が危なくないようにあいつからお前を守る。」

「工藤くん、あなた何か勘違いしてるみたいだけど彼は危険な人物じゃないわ。

・・・これ以上、私の口から彼のことについては何も言えない。」

「なんでだよ！！」

「人の秘密を私が勝手に話しちゃいけないじゃない。

それに、あなたにだって秘密の一つや二つあるでしょう？」

「ねーよ！！」

「そう。それじゃぁ今日の昼休みのあの行動はどう説明できるの？

それと、今日私達に何も言わずに帰って

今までなにをしてたのか、言える？」

「クッ・・・」

その新一の反応に志保はまた少し寂しそうな顔をした。

「私が何をしようが、誰と話そうがあなたに関係ないじゃない。」

「関係ないだと？」

「えぇ。それに、あなただって・・・

もういいかしら？夕食を作ってる途中なの。工藤くんも食べていく？」

「いや、今日は帰る。」

「そう。」

新一は黙って阿笠邸を後にした。

志保は新一が帰ったあと、博士の分の夕食だけを準備し、自室に戻った。

（私・・・最低ね。なんであんなこと・・・

悪いのは工藤くんを不安にさせてる私じゃない。私が悪いのに。）

男と男の話

次の日、志保は新一とは別々に学校に行った。

待ち合わせの時間に新一が来なかったのでまた朝から目暮警部にでも呼び出されたのだろうと思い

後から来た蘭と園子と一緒に登校したのだ。

しかし、新一は事件があって遅れるときや休むときは必ず志保に連絡をする。

なのに、その連絡は学校の授業が3時間目の授業になってもこなかった。

志保は新一が風邪でも引いたんじゃないかと心配になり携帯に電話をしたが

携帯からはずっと同じ女の声が聞こえるだけだった。

『ただいま電話に出ることができません。ピーとなり・・・』

次に工藤邸にもかけてみたが有希子が電話にでて

さっき出て行ったわよ、と言われた。

志保の頭の中は嫌な事ばかりが思い浮かぶ。

そんなとき授業中で静まり返った教室に音が響いた。

ガラっ！！

志保の目に入ったのは疲れた顔をした新一だった。

「先生、すいません。ちょっと、呼び出されて・・・」

「そう。お疲れ様。」

志保は自分の隣に座ろうとする彼にいつものように挨拶をしようと思ったが

昨日、気まずくなったのを思い出し、俯いた。

そんな志保を新一も一目見て黙って自分の席に座った。

新一が席に座ったあとも2人は一言もしゃべらなかった。

目線を合わせることも全然なかった。

（あの2人どうしたんだろうね・・・）

（なんか、やな雰囲気な気がするけど。もしかして喧嘩？）

蘭と園子は2人の様子を見て心配している。

窓際の席の新一はボー、と窓の外を見ているようだ。

（！！！）

いきなり新一の顔が変わった。

そして、先生に、また呼び出された、と一言言って教室を出て行った。

☆☆☆

「いらっしゃいませー」
定員の声が店全体に響く。
新一と男は店の一番奥のに席に座る。
「それで？わざわざ俺の学校に来てまでどうしたんだ？」
新一が話し始める。
「んーまぁ、あの学校まで行ったのは志保ちゃんの様子を見るためでもあったんだけど・・・
志保ちゃんどう？」
「なんで、お前にそんなこと言われねーといけねーんだ？
それに、んなことよりお前のこと教えてほしいんだけど。」
「あぁ、そうだね。俺の名前は黒羽快斗。高三だから一緒だね。」
「黒羽か。俺は工藤新一。」
「知ってるよ。志保ちゃんからいろいろ聞いてるから。志保ちゃんの彼氏なんだよね。」
新一は黒羽の口から『志保ちゃん』と言われるたびに眉がピク、っとあがる。

「そうだけど。黒羽、志保とどういう関係だ？」

「ただの知り合いだよ。」

「知り合いならどうしてあの組織とかいう言葉が出てくるんだ？それにバレないようにって、

なにか隠してるだろ。」

「え・・・やっぱり昨日の話聞いてた？」

「あぁ。」

「そっかぁ。それで聞いても何も言わない志保ちゃんと喧嘩になって志保ちゃんがあの常態か・・・」

新一はじっと黒羽を見る。

「志保ちゃんは優しいね。そんなことなら言っちゃってもよかったのに。」

「はぁ？なにを・・・」

「俺の正体。」

「お前の正体？」

「あなたも知っているはずですよ。白い服を着た・・・」

新一は首をかしげ、少し考えこむ。

「名探偵。少しは分かりましたか？私の正体。」

この声、この口調、すぐに新一はピン！ときた。

「お前・・・もしかして・・・

怪盗キッドと志保の秘密

「お前・・・もしかして・・・キッドか？」

しばらくの沈黙。そして黒羽が口を開いた。

「ご名答。さすがですね、名探偵。」

「その声とその嫌なしゃべり方は忘れたくても忘れられねーぜ。」

「ははは、そうだよね。それは俺も一緒。工藤の俺を追い詰めるときの顔と声だけは

ものすごく恐ろしかったから忘れられないよ。子供のくせに迫力あんだよな。」

黒羽は口調を元に戻し、苦笑する。

「それで、俺の正体を知った君はどうする？俺を警察に突き出す？」

「それはオメェの話を聞いたあとで考えるよ。」

「そうか。それじゃぁ、全て話すしかないみたいだね。」

新一と黒羽は注文した飲み物を何口か口に入れたあとお互いの目を見た。

「じゃぁ、まずは俺がキッドになったわけから話す。」

新一は黙ってうなずく。

「俺がキッドになったわけは親父の死が関係している。

俺の親父は有名なマジシャンだった。だが、あるとき殺されたんだよ。

警察の発表では事故死ってことになったが、後で俺が一人で調べてみると

親父は何者かに殺されたことがわかった。

それからも調査を続けていくうちに親父を殺したのはある組織だということもわかった。」

新一は黒羽の言う『ある組織』にすばやく反応した。

その新一の表情を見ながら黒羽はまた話続ける。

「調べていくうちにその組織はかなりの強敵だと知った。

それでも俺は黙って見ているわけにいかなくて組織のアジトへ乗り込んだ。

とりあえずは探りのつもりで。

だが、アジトへ潜り込んだとき黒い服を着た男たちを見かけたんだ。

その男たちは全員手に拳銃を持っていた。見つかったら俺を待

っているのは《死》。

いそいで隠れようとしたときに俺の腕は引っ張られた。そして、部屋の中に無理やり入れられた。

俺はそこで本当に死を覚悟したよ。

だけど、俺の腕を引っ張ったやつは俺の顔を見て静かに言った。

『早く逃げなさい。ここは戦場よ。あなたが誰か私には分からないけど

少なくともあなたが来るべき場所じゃない。』

って・・・」

「・・・それが志保・・・か？」

「あぁ。でも、俺は諦められなかった。それに志保ちゃんは気づいたんだ。

『そんなこと言っても無駄よね。あなたは死ぬのも覚悟でここに来たんでしょうから。

でも、今日は帰りなさい。

そんな白い体では目立ちすぎるわ。ここの人間は見た目も中身も真っ黒なの。

また来るなら次はなるべく地味な色の服を着てくることね。

』

そして、俺は気づいた。この女性は組織の一員じゃない。

一員なのは形だけで、心は違うんだと。

瞳を見ると、どこか悲しそうで、怯えているようだった。

俺はそんな彼女を守ってやりたくて、自分の命よりも・・・

それから何度か会いに行った。

けど、最後に俺が会った志保ちゃんは今まで見たことないような表情をしていた。

何があったのか聞くと、お姉さんが組織に殺された・・・って。

涙も流さず、じっと床を見つめて・・・

俺は志保ちゃんにかける言葉もなくて、俺はただただ見守るしかできなかった。

そんなとき、扉の向こうから足音が聞こえ、志保ちゃんの部屋の前でとまった。

俺はとっさに隠れた。

そしたら、黒い服を着た男2人が志保ちゃんをどこかへ連れて行ってしまった。

拳銃を志保ちゃんの頭に突きつけたまま・・・

俺は助けたかったけど、今行ったら志保ちゃんは拳銃で殺されるかもしれない。

だけど、そのときに気づくべきだったんだ。

志保ちゃんが男に連れて行かれる直前に机の上にあった薬をポケットに入れたことに・・・」

「それって、もしかして・・・」

「・・・そう。工藤も飲まされた薬。アポトキシン。」

「!!」

「志保ちゃんが連れて行かれたあと、俺も気づかれないように男達の後を追った。

志保ちゃんは別の部屋に入れられた。2人の男のうち1人の長い髪の男の方が

志保ちゃんに話してた・・・

『お前はまだ殺すわけにはいかない。薬の研究を進めてもらわねーといけねーからな。

だが、自分の子供と姉が死んだ今、お前にはできないだろう。

しばらくはここで体を休めておけ。』って・・・」

話を聞いていた新一も話をしていた黒羽も唇をかみ締めている。

「それから何日か後にまた行ってみると、組織の人間がよく《シェリー》の話をしていた。

シェリーが逃亡した、と。

俺は志保ちゃんにコードネームのことも聞いていたから

そのシェリーというのが志保ちゃんだってことがすぐにわかった。

そして、俺は必死で志保ちゃんを探した。どれだけ探してもいなかった。

俺は諦めた。でも、何日か後にまた会えたんだ。もうそのときは《志保ちゃん》から

《哀ちゃん》に変わってたけど。

再開してから哀ちゃんに聞いた。薬を飲んで工藤も志保ちゃんも幼児化したって。」

「なるほどな。キッドがコナンの正体を知ってる訳がやっと分かったぜ。

それと、志保がお前のことを全然話さないわけも。

『俺はキッドを捕まえる』ってずっと言ってたからな。
俺が黒羽の正体を知ったら、お前を捕まえるって思ったんだろうな。」
「で？どうする？俺を警察に連れて行く？」
「いや、そんなことしねーよ。志保も嫌だろうし。」
「ほんと、志保ちゃんは優しい人だよね。
だから俺は志保ちゃんを好きになっちゃったんだよ。」
「はぁ？」
新一は思いっきり機嫌悪そうな顔で黒羽を睨みつけた。
黒羽はそんなこと気にすることもなくヘラヘラしている。
「志保だけはお前に盗ませねーぞ。」
「もう怪盗キッドはやめたよ。組織もつぶれたわけだし。
だから、今度は黒羽快斗として盗みに行こうかな。」
「オメェにはやらねーよ。志保だけは俺が命に代えても守るからな。」
「分かってるよ。わざわざ志保ちゃんのやっと手に入れた幸せを奪うわけないじゃん。

でも、告白くらいはさせてもらうよ。

それより、喧嘩したまんまなんだろ？

早く帰って仲直りしたほうがいいんじゃない？」

2人は窓の外を見る。もう日が沈みかけている。

「そうだな。早く帰って志保に会いたいし。」

「そうしてあげて。じゃぁね。」

「あぁ。ありがとな。また今度会おうぜ。」

「じゃぁ、志保ちゃんも連れてきてね。」

「わーってるよ。それと、ありがとな。認めたくはねーけど

アイツが組織にいるころアイツの心を少しでも救ってたのはお前だ。感謝してる。」

「そうだったらいいけど・・・って、そんなこといいから早く帰れって！」

黒羽に礼を言い、新一は自分が注文した分の料金を払って急いで帰って行った。

☆☆☆

志保は新一に向かって走り出す。

ぎゅっ！！

「おわっ！」

志保は新一に後ろから抱きついた。

「志保？」

仲直り

一瞬、何が起こったのかわからなかった新一だが

ゆっくりと後ろを振り向くと特徴的な赤みがかった髪が見えた。

「志保？」

新一が声をかけても返事はない。

しかし、顔は見えないが肩が揺れているのを見て泣いているのだとわかった。

「志保、どうした？」

「・・・ないで。」

「え？」

「行かないで。お願いだから・・・傍にいて・・・お願い。」

志保は弱弱しく言った。

それから、少しの間2人とも声を出さなかった。

しばらくして志保が新一を抱きしめていた手を離す。

「ごめんなさい、わがまま言って。」

そう言って新一に背を向け、帰ろうとしたとき

パシ！！

新一が志保の手を掴み、自宅へと引っ張っていった。

バタン、と音を立てて玄関の扉が閉まる。

それと同時に新一は志保の体を抱きしめる。

「工藤くん・・・」

「志保、ゴメン。信じてあげられなくて。勝手に嫉妬して。」

「くど・・くん？」

「今日、黒羽に全部聞いた。志保たちがいつ知り合ったのか、どういう関係なのか、

それと黒羽がキッドだったって事も。

志保が俺に黒羽のことを何も話さなかったのも

何も知らない俺が黒羽の正体を知って、警察に連れて行くって思ったからだろ？」

「・・・」

「ゴメンな。」

2人は黙り込む。志保は新一の顔を見たいが、抱きしめられてて見ることができない。

「黒羽くんも重要なことあなたに言ってないようね・・・。

あの薬・・・アポトキシンの資料を研究所から持ってきてくれたのも彼なのよ。

危険を冒してまで。ベルモットと一緒に探してくれたそうよ。

だから、彼がいなかったら今も私達は小学生だったかもしれない。」

「そうか・・・アイツに感謝しねーとな。」

「私は黒羽くんにも工藤くんにも助けられっぱなしね。」

「志保?俺はどこにもいかねーぜ。ずっとお前の傍にいて守るんだからよ。」

「私も・・・ごめんなさい。あなたを不安にさせてしまって。

でも、工藤くんは何も心配しなくていいの。

私には・・・私の目にはあなたしか映ってないのよ。ずっと前から。」

「それは俺も一緒。」

新一はやっと志保の体を離し、自分のカバンに手をやった。

「はい、これ。プレゼント。開けてみ。」

目の前に出された綺麗にラッピングされた小さな長方形の箱。

志保は新一から受け取り、ゆっくりと丁寧に包んであった紙をはがす。

「え・・・これ・・・」

開けてみると、そこに入っていたのはリングがついたネックレスだった。

「どうだ?」

「・・・」

「気に入らなかったか?」

志保がなにも反応を見せないので気に入らなかったのか、と新一は考えたが

すぐに左右に首を振ったので安心した。

「ほんとは指輪にするつもりだったけど、サイズが分からなくてよー。

びっくりさせたかったから志保に聞くわけにもいかねーし。

でも、これなら指輪もついてるしいいかなって・・・」

そこでいきなり志保が顔をあげた。
「ありがとう。大切にするわ。」
綺麗な笑みを新一に向ける。
「おう！なくすなよ。アクセサリーショップに男一人で入っていくの恥ずかしかったんだぜ。」
その様子を想像してクスッ、と笑う志保。
「見てみたかったわね、あなたが恥ずかしそうに店に入るところ。
でも、どうしてネックレスにしたの？」
「え？あー、クラスの女子に聞いたんだよ。
プレゼントでもらってうれしいのは何かって。俺、女子の好みとかわからねーし。
それで、指輪とかネックレスとかとにかく身につけれるものがうれしいって言うから。」
「なるほどね。あのときあなたがコソコソしてたのはそれを聞くためね。」
「あぁ。蘭たちに言ったら、口がすべって志保にバレるかもしれねーから

あんまり志保と関わりのなさそうなやつに聞いたんだよ。」
「そういうことだったの。納得。」
新一は志保が何に納得したのかは分からなかったが、
うれしそうにネックレスを眺める志保を見て自分もうれしくなった。
「志保、つけてやるよ。」
「これくらい自分でできるわよ。」
「いいから、貸せって。」
志保から無理やりネックレスを取り上げ、志保の背後に回った。
そして、志保の体を自分に向かせる。
「うん！似合ってる♪」
「ありがとう。・・・じゃぁ、私はそろそろ帰るわ。」
「今日はうちに泊まっていけよ。俺、朝から志保が話してくんねーし
目も合わせてくれなくて結構傷ついてたんだぜ。
だから、その分・・・」
「襲わないでしょうね。」

志保は新一をジト目でみる。
「お前が黒羽に告白されても俺を選んでくれるって約束してくれたらな。」
「なにそれ。意味が分からないわ。」
「どうする？」
「さっきも言ったはずよ。私はあなたしか見えてないって。
それに黒羽くんには大切な幼馴染がいるのよ。そんなことするわけないじゃない。」
そっか、と新一は少し安心したようだ。
「それじゃぁ、博士に電話したあと夕食つくるから手伝ってくれる？
有希子さんたちは夕食どうするのかしら。」
「母さんたちは外で食べてくるらしいよ。遅くまでかえらねーって。」
「そうなの？それなら私、やっぱり帰るわ。狼さんと2人なんて恐ろしいもの。」
「なんだよ、それ。なんもしねーって。オメェ信じてねーな。」
「そのことに関しては信じられないわ。」

「おい・・・」

「冗談よ。」

結局、志保は一日工藤邸に泊まることになり、

2人は安心したようにぐっすりと眠りについた。

寝る間際、新一は聞き逃さなかった。

「工藤くん、私あなたのこと誰よりも好きだから。」

と、志保が言ったのを。

仲直り（後書き）

志保ちゃん、素直！！

招待状

チュンチュン、という鳥の鳴き声がして新一は目が覚めた。

久しぶりにすっきりした朝だ。

横では志保が気持ちよさそうに眠っている。

新一は志保を起こさないように静かにベッドから出てリビングへと向かった。

リビングには誰もいなかった。

テレビをつけても朝から流れているのはニュースばかり。

せっかく気持ちよく目が覚めた朝に事件の話など聞きたくなかった。

テレビを消し、家の外に出ようとしたとき

玄関には男ものの靴と女ものの靴が二足ずつあった。

（父さんと母さん、帰ったのか。）

玄関の扉を開ける。

そこには青い空が広がっていた。

すると、赤いバイクに乗った人がポストに何か入れていくのが見えた。

ポストの中には新聞と封筒が入っていて、それを持って自宅に入っていった。

リビングに戻り、先ほどの封筒を丁寧に開ける。

封筒の中身は招待状だった。

招待状に書かれてある名前を見たとき新一はフッ、と微笑んだ。

（やっとか。）

「おはよう、工藤君。」

志保が階段から下りてきた。

「おはよう。」

「どうしたの？朝からニヤニヤして。」

「ニヤニヤなんかしてねーよ。これ。」

そう言って新一は志保に招待状を見せる。

「あら、やっとね。」

「志保も行くだろ？」

「えぇ。あの2人にはいろいろとお世話になったし。」

「3月10日・・・俺達が卒業する5日前か・・・」

「見てみたいわ。あの人が女らしいことするところ。

・・・それじゃぁ、私朝食作ってくるわ。キッチン借りるわね。」

志保は勝手に人の家のキッチンを使うのは悪いと思い、一言言ってから去っていく。

そこに、おはよー新ちゃん、と目をこすりながら下りてくる有希子。

キッチンにいる志保にも挨拶をしてソファに座る。

「昨日いつ帰ったんだ?」

「昨日はねーえっと・・・覚えてないわ。家にいるって気づいたのはさっき・・・」

(昨日はだいぶ飲んだんだな。)

「新ちゃーん、だるいんだけどぉ。頭も痛いのよ。」

「ただの2日酔いだろ?水持ってきてやるよ。」

(はぁ・・・世話の妬ける母親だ・・・)

有希子が起きてきたせいで重くなった足をキッチンへと運ぶ。

キッチンには味噌汁を作っている志保がいた。

「どうしたの？」

「んー母さんが二日酔いだって言うから水取りに来た。」

「大丈夫かしら。有希子さん。」

「大丈夫だろ。いつものことだし。」

水をコップに注ぎ、キッチンを出ようとしたが新一は持っていたコップを置き、

志保を抱きしめた。

「工藤くん、私、今包丁持ってて危ないから離してくれない？料理が出来ないわ。」

「いや」

（結婚したら毎日こんなことできるんだよな。）

はぁ、とわざとらしくため息をつく志保に新一は志保を抱きしめる腕の力を強める。

「新一、朝からそんなにくっついてたら志保くんが迷惑だよ。」

2人が声のしたほうに振り向くとそこには優作が立っていた。

「父さんも起きたのか。」

新一は優作にこの場を見られて頬を染め、ゆっくりと志保の体を離した。

「おはようございます。」

「おはよう。志保くん、すまないな。手伝いもせず。」

優作が有希子の代わりに謝る。

「いえ。」

「で？父さんはどうしたんだ？」

「いや、ちょっと頭痛がしてな。水と薬を取りにきたんだが・・・。」

（たく・・・父さんまで二日酔いかよ。昨日はどうやって帰ってきたんだ？）

「あーそれなら、はい。母さんにも渡しといてくれ。俺は志保の手伝いすっから。」

「そうしてやってくれ。」

優作がリビングへと戻った後、志保は新一に冷ややかな言葉を放った。

「あなたが手伝えるようなことないわ。余計に出来上がりが遅くなるから何もしなくていいわよ。」

結局、朝食は新一の手が加わることなく完成した。

☆☆☆

「ちかぢか見れるかもしれないぞ。」

話に入ってこない新一と志保をよそにこの夫婦は2人してからかいモードに入る。

新一と志保は2人の話を聞いてはいるが聞いていないふりを続ける。

「私達が次来るときまでにはプロポーズくらいしといてほしいわね。」

「え？次来るときって・・・」

今まで聞いていないふりをしていた新一が口を開いた。

横ではテレビを見ていた志保も顔を有希子と優作にむける。

「私達、明日帰るのよ。優作は仕事もあるし。

これ以上、優作をほったらかしにしてたら好き勝手するでしょ？

だから私も一緒に帰ることにしたのよ。」

「そうですか。」

有希子の話を聞いて志保は少し寂しそうだった。

「それじゃぁ、今夜は出かけましょうか。博士も連れて。」

「出かけるって・・・明日帰るんだろ？

それならゆっくりしたほうがいいんじゃないのか？」

「いいじゃない。最後くらい日本で楽しんだって。」

「いつも楽しんでただろ？」

「もー新ちゃんは厳しいんだから。志保ちゃんもいるんだからいいじゃない。」

そして、その日の夜は博士も含めた5人で出かけ、

次の日優作と有希子は無事に飛行機に乗り、帰っていった。

招待状（後書き）

久しぶり？いや・・・初めてですか？

優作が登場したのは。

あの刑事さんたち、ってわかりますよね？

ちなみに3月１０日っていうのはその新婦さんのゴロあわせです（笑

かなりはやくに招待状だしたんですね・・・

一応今回の話は９月ごろのつもりだったんですが・・・

Wデートｉｎ大阪（前書き）

１２月

Wデートｉｎ大阪

「志保ー、冬休み大阪行かねーか？」

「大阪？」

「あぁ。服部と和葉ちゃんが久しぶりに会おう、って・・・」

「そう。私は特に予定はないから大丈夫だけど。」

「じゃぁ、久しぶりにあのうるさいやつに会いに行くか。」

「そうね。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「よぉー、工藤。久しぶりやなぁ。」

「久しぶり。」

「志保ちゃんやー。元気しとった？」

「えぇ。和葉ちゃんも相変わらずね。」

新幹線を降りると、新一と志保は大阪の元気な友人から歓迎を受けた。

「和葉ちゃん、久しぶりに会えたのはうれしいけど、受験は大丈夫なの？」

「大丈夫やって。これでも今までちゃんとやってきてんから。

心配なのは平次や！！平次、全然、受験勉強せーへんねん！」

「工藤くんもしてないわよ。」

「2人ともちょっと人より頭エエからって、受験をナメすぎや。」

志保と和葉の後ろで話を聞いている男2人は苦笑している。

「志保ちゃんはちゃんと勉強してんの？」

「私は大学に行くつもりはないから。」

「そーなんや。エエなぁ。勉強せんでエエやん。」

「おーーーい、和葉ぁ、ねーちゃーん。行くでーー。」

数メートル離れたところで服部が手を振っている。

「ほな、行こか。」

4人は大阪を観光した。

服部が、『大阪は食い倒れの町や』と言うので、日が沈むまで食べ歩いた。

「ふー、よぉ食ったなぁ。」
「平次は食べすぎや！それより、はよ行かんとゆっくり見れへんで。」
「せやな。そろそろ行こか。」
「行くってどこに？」
「内緒や。」
新一と志保は自分達がどこに連れて行かれるのか少し不安だったが黙ってついていくことにした。
電車に乗り、駅から歩くこと２０分。目的の場所に着いた。
「着いたで。海遊館や。」
「海遊館？」
「せや。世界最大級の有名な水族館やで。夜の魚も見れんねん。
今日のメインはココやで。」
カラフルな建物で、壁には魚の絵が書かれている。
確かに水族館のようだ。
「工藤君にな、志保ちゃんは動物が好きやって聞いてたから

動物園にしよか、思たんやけど、もう真冬やし寒いやん。
だから中で楽しめる水族館にしてんけど・・・」
「ありがとう。私ココでよかったわ。夜景も綺麗だし。」
見渡してみると、いろいろなところでイルミネーションが光っている。
「せやろー。ココは最高のデートスポットやで。」
「服部くんと何回か来たのね。」
「へ？う・・・うん・・・」
暗いので表情はよく見えないが、きっと照れているのだろう。
「和葉ー寒いからはよ入んでー。」
和葉は平次に呼ばれ、平次のもとへ走っていく。
そして、2人は自然に手を繋いだ。
「あの2人、ちゃんと恋人同士ね。」
「そうだな。」
新一と志保もお互いの手を温めるように優しく指を絡めた。

☆☆☆

てみぃよ。」

新一と志保の横でいつもの言い合いが始まった。

恋人という関係になってもこれだけは変わらないようだ。

志保がそんな2人を気にせず水槽を眺める。

「サメ・・・サメでも愛されることってあるのね。」

新一は志保のこの言葉で、志保が灰原哀だった時に言っていたあの言葉を思い出した。

『相手はイルカ・・・そう・・・海の人気者・・・

暗く、冷たい海の底から逃げて来た意地の悪いサメなんかじゃとても歯が立たない。』

志保の顔をのぞいてみると、切なそうな、でもどこかうれしそうな顔をしていた。

「志保はただのサメじゃねーぞ。

オメェはイルカと同じくらい人気のある甚平ザメだ。」

「覚えてたの？私が言ったこと・・・」

「あぁ、今思い出した。しばらくはその言葉の意味がわからなくて考えてたからな。

結局、今まで分からなかったけど。」
「あなた鈍感だから。」
「うるせー。」
クスっと声を出して笑う志保。
この笑顔は本当に何度見ても可愛いと思う。
「蘭がイルカで志保が甚平ザメなら、俺はあの魚か？」
新一が指差したのはさっきからずっと甚平ザメの横を泳いでいる魚だ。
「それで、あの小さい魚達が元太たちかな。」
小さい魚たちは甚平ザメの回りを自由に動きまわっている。
「そうね。でも、工藤くんは魚っていうより飼育員じゃない？
甚平ザメ（わたし）の命を守ってくれる飼育員。」
「はは、そうかもな。」
2人は長い間、この水槽を見ていたのか
気がつくと横に服部も和葉もいなかった。
少し離れたところで新一と志保を呼ぶ声がする。

ゆっくりとその声の主のところまで歩いていく。
「志保ちゃん、さっき工藤くんと何話してたん？
エエ雰囲気やったから話かけへんかったけど。」
「何もないわよ。ただの昔話。」
「えー、聞きたい！」
「あなたはアシカね。」
和葉の頭に？が浮かんだ。
そんな和葉を置いて志保は次の水槽を見る。
（ハハ・・・アシカが手を叩くところが漫才してるように見えるってか？）
和葉には志保の言った言葉の意味が分からなかったが、
新一には分かったようで苦笑している。
「せや！志保ちゃん。お土産買お！
平次、あたしら、あそこのお土産屋さん行ってくるわ。」
「おー走ってこけんなや。」

「アホ。こけるわけないやん。バカにせんといて。行こ、志保ちゃん。」

和葉は志保の手を掴んで走っていく。

その様子を新一と服部は見ていた。

「工藤。」

ふと、新一の名前が呼ばれた。

そう新一を呼んだ服部の表情は和葉たちと別れる時とは違い、

かなり真剣になっていた。

「なんだ？」

新一も服部の表情を見て、真剣な顔つきになる。

「悪いけど、明日のねーちゃんとのデートはキャンセルしてもらうで。」

「何でだ？」

「依頼や。明日行かんとアカンねん。

ほんまはこれが目的で工藤を呼んだんや。」

「俺もか？」

「いや、依頼されたんは俺一人や。でも、俺のただの勘かもしれへんけど

なんや、嫌な感じがするんや。」

「探偵の勘ってわけだな。」

「そうや。すまんけど手貸してくれへんか？」

「わかった。志保たちはどうすんだ？」

「ねーちゃんのことは和葉に任せたらエエ。大阪やから和葉でも案内くらい出来るやろ。」

そこに、買い物を終えた志保と和葉がやってきた。

「平次ー買い物終わったでー。はい、これあんたの分。あたしとおそろいやで。」

平次に渡されたのはアシカのキーホルダー。

「志保ちゃんがあたしらはアシカに似てるってゆーたからアシカにしてん。」

「なんでアシカ？」

平次も先ほどの和葉同様、頭に？を浮かべた。

「志保は何買ったんだ？」

「甚平ザメのキーホルダー。これ、工藤くんの。」

「おそろいか？」

「えぇ。嫌だったらお店に返してくるけど。」

「嫌じゃねーよ。」

「そう。」

志保は迷いもなくそう言ってくれたことがうれしかったが

照れてるのがバレないよう、いつものようにそっけない返事をした。

そして、その後、４人は服部の家へと帰っていった。

Wデートｉｎ大阪（後書き）

大阪と言ったらなんだろうと考えて

出てきたのが海遊館でした。

平次が魚が寝てるって書いてますが、本当に寝るのでしょうか・・・

依頼

翌日、服部と新一は依頼主のもとへ行った。

「ほんなら、俺ら行ってくるわ。何かあったら電話してくれ。」

「わかった。行ってらっしゃい。」

和葉は今日も服部たちと一緒に遊びに行ける、と楽しみにしていたので

昨夜の夕食時に「明日は依頼されたところに工藤と行ってくる。」

と聞いたときはかなり怒っていた。

今は、仕方ない、とは言っているが少し落ち込んでいる。

「和葉ちゃん、ごめん。志保をよろしく。」

「しゃーないな。

あんたの大事な彼女はあたしがちゃんと見ときます。せやからご安心を。」

「ハハ、任せた。じゃぁ、行ってきます。」

「「行ってらっしゃい。」」

☆☆☆

「おかんの友達や。」

（あんのババァ、このおばちゃんの依頼ってたいていあれしかないやんけ。

どうせ今回の依頼も探し物やろ・・・）

服部は子供の頃から何度かこの女性の探しものを探すのを手伝っていた。

はっきり言って、服部にとって面倒な仕事だった。

「それで、今回の依頼は？」

新一が尋ねる。

「最近な、ものがよくなくなるんよ。」

ほら来た、と服部の顔は引きつっていく。

「例えば？」

新一は真剣に女性の話を聞く。

服部は話をききながらも別の場所を見回している。

「えっとなー、イヤリングとかネックレスとか・・・

あと、靴下とハンカチも。

ほんで、泥棒とかやたら怖いから静華さんに相談したんよ。
そしたら、平次くんに言ってみるってゆーてな、ほんまに心強いわ。
女性は依頼の内容を服部と新一に話しながら2人を家に入れる。
すると、リビングから一匹の猫が3人のもとに歩いてきた。
「伊藤さんって猫飼っとった？」
「最近飼い始めたんよ。散歩してる途中で見つけてね。
ほんでかわいそうで、思わず連れて帰ってしもた。
でもなー、えらいんやでこの子。ちゃんと自分が出したものおもちゃかごになおすんよ。」
女性は猫を抱き上げ、優しい目をして頭をなでる。
「もしかして、ものがなくなり始めたんはその猫が来てからとちゃうか？」
「うーん、そういえばせやねー。」
服部と新一は心の中でやっぱり、とつぶやく。
そして女性にことわってから、ある所を探し始めた。

依頼（後書き）

変なところで切ってすいません。

というか、あまりオリキャラは使いたくなかったんですけど・・・

自分で書いておきながら・・・

ショッピング

和葉と志保は用意を済ませ、服部邸を出た。

「もう、2人ともこんな日くらい仕事断ったらエエやんか。」

和葉は自分の手をこすりながら愚痴を零す。

「あら、いつも自分の手を温めてくれる誰かさんがいなくて寂しいのかしら？」

「ちゃ・・・ちゃうよ！いい加減あの自分勝手なとこやめてほしいなって思うただけや。」

そんなことを言っているが、これは照れ隠しだと志保には分かっている。

口にも顔にも出さないが、実は自分も新一が横にいなくて寂しいと感じているからだ。

2人は今、ショッピングモールに向かっている。

目的は洋服だ。

昨日は、食い倒れツアーだったので、

今日は女の子らしくショッピングを楽しむことにした。

目的地に着くと早速自分達の洋服を選び始めた。

「なぁなぁ、志保ちゃん。これかわいいと思わへん？」
「そうね。あなたにはとても似合うと思うわよ。」
志保にそう言われて和葉はうれしそうだ。
この服を買う、と決めたようでしっかりと抱えている。
（いいわね。あんなかわいい服が似合うなんて。）
志保が選ぶ服はどれも黒やグレーのものばかり。
ピンクやオレンジなど、明るい色の服を選ぶ和葉とは正反対だ。
すると、突然横から声が掛かる。
「ええな、志保ちゃんは。こんな大人っぽい服似おうて。」
「え？」
「だって、あたし子供っぽいやん？
だから志保ちゃんみたいな大人っぽい服着られへんねん。」
「そんなことないわよ。私はあなたみたいな可愛い服着てみたいわ。
でも、私には可愛いのは似合わないから。
和葉ちゃんはせっかく似合うんだから、着ないと損するわよ。」

和葉は笑顔になり、うん、と頷いた。
そして、2人はそれぞれ三着ほど買って店を出て行った。

☆☆☆

だ。

園内はとても静かで人も2・3人見かける程度。

午前中に行ったショッピングモールは人が多かったので人の少ないところへ来て

志保は少し落ち着いた。

「しーほーちゃーん。買うてきたで。食べよ。」

ありがとう、と言って志保は和葉の手からハンバーガーを受け取る。

そのとき、事件はおきた。

嫌な予感

「しーほーちゃーん。買うてきたで。食べよ。」

ありがとう、と言って志保は和葉の手からハンバーガーを受け取る。

そのとき・・・

ドサッ。

何かが崩れるような、鈍い音がした。

志保がその音がしたほうへ目を向けると、

その目に映ったのはベンチに倒れこんでいる和葉だった。

「和葉ちゃん!?」

急いで、和葉の体を起き上がらせるため手を伸ばすと黒いものが志保の頭に向けられた。

それは拳銃だった。もう一方の手にはスタンガン。

和葉が気を失ったのはこれのせいだろう。

拳銃を志保に向けているのは２０代半ばと思われる男。

その男が口を開いた。

「おい、この女を殺されたくなかったら黙って俺について来い。」

そう言われ、志保は仕方なく男についていく。

公園内の誰かがこの状況に気づいて警察を呼んでくれればよいのだが

誰一人志保たちの方へ目を向けず、気づく者はいない。

男は志保が自分の言うとおりにすることが分かると

眠っている和葉を抱きかかえすぐ傍にとまっている車へと

無理やり押し込めた。

そして、車は志保と和葉を乗せて走っていった。

☆☆☆

最近、飼い始めたという猫だった。
妃英里が飼っている猫と同様、
この猫もなんでもかんでも片付けてしまう癖があるらしく、
依頼主が探していたものも全て自分のおもちゃ箱に片付けていた。
結局、なんの事件性もなくこの日の依頼された仕事は終わりを告げた。
「お前の嫌な予感はかなり外れてたな。」
「すまんな。けど、ある意味嫌な予感当たっとったんとちゃうか？」
「ハハ、そうかもしれねーな。」
2人は寒い中、住宅街を歩く。
そのとき、新一の脳裏に志保の顔がよぎった。
助けを求めているようなそんな顔が・・・。
（志保・・・）
何か嫌な予感がして、服部を見ると服部も新一と同じ顔をしていた。
「工藤、今回の依頼の犯人はあの猫でエエよな？」
「あぁ。それはあってると思うぜ。たいして事件が絡んでそうなこ

とでもない。」

「せやけど、なんかまだ嫌な予感がすんねん。」

「やっぱりお前もか。俺もそんな気がしてた。」

「なんか、和葉らが危ないんやないかって・・・

俺が心配しすぎなんかもしれへんけど。とりあえず、連絡してみよか。」

そういって、ポケットから携帯を取り出す。

ＲＲＲＲＲＲ・・・ＲＲＲＲＲ・・・・・

なかなか繋がらない。服部が切ろうとしたとき声が聞こえてきた。

「服部平次だな？」

服部は和葉の声じゃなく男の声が聞こえたため

掛け間違えたか、と思い携帯を耳から離して画面を確認するが

表示された番号は間違いなく和葉のものだった。

そして、再び携帯を耳に当てる。

「あんた、誰や。」

「・・・」

相手からの返事はない。そこで服部が再び同じ質問をする。
「誰やっちゅーてんねん！これ、和葉の携帯やろ？」
するとやっと男が口を開いた。
「そこに工藤新一はいるか？」
男は服部の質問を無視して、服部に問う。
「なんやねん！俺が質問しとんじゃ！俺の質問に答えんかい！」
「俺のことはお前が知る必要はない。
それより、工藤新一はそこにいるんだろ？」
「おったらなんやねん。」
「それなら、やつに言ってやれ。お前の女の死に様を見たければ
俺達を探し出して見にこいってな。
幸い、もう一人の女には顔は見られてないから目的の女を殺した後で逃がしてやるよ。
まぁ、それもこの宮野志保が俺の質問にどう答えるかによって決まるがな。」
「おい！なに言うとんねん！！」

「ヒントは廃工場。タイムリミットは今から一時間後の2時だ。
警察は呼ぶなよ。
警察の存在が確認された時点で2人の命はないものと思え。」
それだけ言うと、男は一方的に携帯を切った。
「どうした？」
新一が心配そうな顔で服部の顔を覗き込む。
「工藤、俺らの嫌な予感当たってもーたわ。
和葉とねーちゃんが・・・つかまった。」
「なっ！？」
「目的はねーちゃんを殺すことらしいわ。
和葉は人質や。
ヒントは廃工場、タイムリミットは一時間後。」
「なに！？」
「はよ、探さんと・・・
でも、ヒントは《廃工場》だけや。手がかりが少なすぎる。」

「・・・いや、それは大丈夫かもしれねー。」

新一はジャケットの内ポケットからあるものを取り出した。

それは黒いふちのめがね、新一が江戸川コナンだったときにつけていたものだ。

「多分志保は探偵団バッジを持ってる。

あれに発信機がついてるからここから半径２０メートル以内にいれば

このめがねに反応がある・・・あった！

ここから南西に１５キロ・・・」

「ほんなら、はよ行くで。」

２人はタクシーを呼び、志保と和葉のもとに向かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

志保と和葉は無理やり男にある所に連れてこられた。

それは廃工場だった。

和葉は目隠しをされ、口にはガムテープ。そして両手両足をロープで締められている。

志保は片手を手錠で手すりにかけられている。

この状況、嫌でも思い出してしまう。

そう、あの組織にいたころ・・・

ガス室に閉じ込められたあの日のことを。

「それで？私たちを無理やり連れてきてどうするの？」

すると、男はニッと不敵な笑みを浮かべて志保に拳銃を向ける。

「そうだな。最終的には死んでもらうよ。親父の仇だ。」

「仇？」

「俺の親父はお前のいた組織に殺された。

だからお前から組織の居場所を聞きだし、やつらを潰してくる。

この女が生きるか死ぬかはお前の答え次第だ。」

「そう、組織が・・・

でもどうして私が組織の人間で

あなたのお父さんを殺したのがあの組織って分かるの？」

「お前はもう死ぬんだ。知る必要はない。」
「もうすぐ死ぬからこそ知らないといけないわ。
なぜ自分は殺される対象なのか。」
男はそれもそうだ、と言って志保に近づいてくる。
「俺は聞いたんだよ。
親父が殺される直前に親父と組織のやつが話しているのを。
親父は警察で、一つの殺人事件を担当していた。
だが、証拠も何もなくて捜査は打ち切り。
それでも親父は諦めきれずに一人で調べたんだ。
その結果、たどり着いたのがあの組織。
俺はその殺人事件が組織に関係がある、とだけ親父に聞いた。
そして親父が組織のことについて調べているのを
やつらが知って、家までのりこんできやがった。
俺は自分の部屋で隣の親父の部屋から聞こえてくる話を聞いていた。

組織の男は『データをよこせ』と言ったが当然親父は拒否する。

その後、聞こえてきたのは親父のうめき声。

やつが俺の部屋の前を走っていく足音。

やつが家を出て行ったのを確認して親父の部屋に行こうと

自分の部屋の扉を開けたとき、一枚の紙が落ちているのをみつけた。

そこに書かれていたのは《宮野志保》、お前のデータと写真だった。

俺はそれを持って親父の部屋に行った。

そこで見たのは心臓を押さえて倒れている親父の姿。

俺が見たときには死んでいた。

そのときだよ。お前を見つけて親父を殺した何かの組織を全員殺して

親父の仇を討つ、と決めたのは。

でもお前がどこにいるのかなんて情報は全くなかった。

探しようもなく、諦めようとしたときにＴＶでお前の姿が映ったんだ。

工藤新一の横で高校の制服を着たお前がな。

それで、やっとお前の居場所が分かって東京へ行くため新幹線に乗ろうとしたとき

お前と工藤新一が東京からの新幹線から降りてきたのが見えた。

まさかそんな偶然があるとは思わなかったぜ。

こんなに上手くいくなんてな。

昨日は一日お前たちを張っていたんだよ。

そして、工藤新一と服部平次とかいう探偵がお前らから目を離した隙に

今まで考えてきた作戦を実行しようとしているわけだ。」

志保は男の話に口を挟まず、黙って聞いていた。

話終えた男の目にはものすごい殺気が感じられた。

志保は思わず男から目をそらしてしまう。

そして、弱弱しく言った。

「・・・そう。ごめんなさい。いくら謝ったって許されることではないけど。」

「今更謝ったってもう遅い！お前が謝ったからって親父が帰ってく

るわけじゃねぇんだ。

早く、組織がどこにいるのか教えろ。そのあとお前を殺して・・・」

RRRR・・・・RRRRRRR・・・・

男の言葉を遮って、誰かの携帯がなった。

それは和葉のカバンの中から聞こえてくる。

志保も和葉もとることはできない。

代わりに男が和葉の携帯を手に取り、何かを思いついたように笑みをみせる。

そして、携帯を耳に当てた。

「服部平次だな？」

そう言うと、しばらく男は黙り込んで再び口を開いた。

「そこに工藤新一はいるか？」

「俺のことはお前が知る必要はない。

それより、工藤新一はそこにいるんだろ？」

「それなら、やつに言ってやれ。お前の女の死に様を見たければ

俺達を探し出して見にこいってな。

幸い、もう一人の女には顔は見られてないから目的の女を殺した後で逃がしてやるよ。

まぁ、それもこの宮野志保が俺の質問にどう答えるかによって決まるがな。」

「ヒントは廃工場。タイムリミットは今から一時間後の2時だ。

警察は呼ぶなよ。

警察の存在が確認された時点で2人の命はないものと思え。」

男は自ら携帯を切った。

「いいの？私達の居場所彼らに教えて。あの2人は探偵よ。」

「分かっている。だがいくらあいつらが世間では有名な名探偵と言われていても

あれだけのヒントじゃ分かるわけねーだろ。」

「そうね。けど、あれは本当なの？

私がちゃんとあなたの質問に答えて、私が死んだらこの人は助けてくれるって言うこと。」

「あぁ。目的は親父を殺した組織の居場所を知って、お前を殺すこと。それだけだ。

だから、早く俺の質問に答えろ。

そうでないとお友達が死ぬことになるぜ？」

男がそう言うと志保はゆっくりと話し始めた。

「・・・残念だけど、あなたのお父さんを殺した組織は今はもうないわ。」

「どういうことだ？」

「潰れたのよ。組織の大半は死に、他のメンバーは全員牢屋に入ってるわ。」

バンッ！！

志保がそう言うと、男は銃を発砲した。

その玉は志保の肩に当たり、志保は小さな声で呻きながら撃たれた部分を手で押さえる。

「ふざけるな！！組織を庇ってんだろ？

大体、そんなことがあったらニュースで大きく取り上げられるはずだ。」

「・・・本当のことよ・・・。今年の春、組織は潰れたわ。

ＦＢＩにも協力してもらって・・・

ＴＶでその話が出されないのはＦＢＩが全国に組織のことが広まるのを

阻止しているから・・・」

バンッ！！

また、男が志保に向かって発砲した。

今度は足に当たった。

「う・・・」

「本当のことを言わねーと約束の時間より前にお前を殺してしまうことになるぜ？

俺はできれば約束は破りたくねーんだよ。

早く本当のことを言え。」

「あなたが私を殺せば、あなたの目的は終わるわ。

組織の中で生き残っているのは私だけ。早く私を殺しなさい。」

「死んでも口はわらねーってか。それなら、言われなくてもそうさせてもらうよ。

組織のことはお前が死んだ後、じっくり調べる。

じゃぁな。死んで、罪を償え。」

バンッ！！

音が部屋に響き渡った。

嫌な予感（後書き）

前の２話が短かった分、今回はかなり長くなってしまいました・・・

救出

音が部屋に響き渡った。

それは、志保の前の拳銃ではなく分厚い鉄の扉が勢いよく開く音だった。

「工藤・・・新一？」

「え？」

自分に拳銃を向けられ、死を覚悟した志保はぎゅっ、と目をつぶっていたが

男から発せられた名前を聞いてゆっくりと目を開ける。

「ずいぶん早かったな。姫を助けにきた勇敢な騎士ってとこか？

笑っちゃうね。

だが、お前たちを呼んだのはこいつの死を見届けさせるため。

お前らちょうどいいときに来たな。

じゃぁ、見物客もそろったようだし遠慮せずに目的を晴らさしてもらうよ。」

男は再び志保の方へと体を向ける。それと同時に銃口も志保に向けられる。

「んなことさせっかよ。」

バン！！

ドサッ。

大きな銃声がなった。

男が倒れこんだ。

新一が時計型麻酔銃で男を眠らせたのだ。

志保に向けられていた拳銃は男がふらついたせいで玉がはずれ、

志保の体の横を通りぬけていった。

「ふぅ、なんとか間に合うたな。さすが工藤や。」

服部は急いで和葉のもとに駆けつけ手や足を縛り付けていたロープを取り、

そのロープで次は男の手と足を縛り付ける。

新一も志保のもとに駆け寄る。

「大丈夫か？怪我してんじゃねーか。」

「大丈夫よ。このくらい。かすり傷程度だから。」

「そうか。もう少しで警察がくるから待ってろ。その手錠外してもらおう。」

「えぇ。それより服部くん、和葉ちゃんは大丈夫？」

すると、和葉の口を塞いでいたガムテープと目隠しをとっていた服部が志保を見た。

「和葉は大丈夫や。今はまだ気ィ失って寝てるけど。どこも怪我してへんし。」

「そう、よかった・・・

ごめんなさい。またあなた達を巻き込んでしまって。」

「謝るな。オメェが悪いわけじゃねーんだろ？

でも、志保が探偵団バッチを持っててよかったよ。

あんな《廃工場》ってだけのヒントじゃいくら俺や服部でも短時間じゃ探しきれなかっただろうから。」

「あなたが前にこのバッチを常に持っておけって言うからじゃない。」

「でも、そのおかげで助かったわけだ。

それより志保、この男は誰なんだ？何で志保が狙われた？」

新一の質問に、さっき男が言っていたことを話す。

「この人は組織に、お父さんを組織に殺されたらしいの。
それで、お父さんの仇を討つために・・・。」
志保は新一と服部に男が言ったことを全て話した。
和葉も服部に起こされて話を聞いていた。
そのとき、ハハ、と感情のない笑い声が聞こえた。
「なんや、もう起きたんか。」
「なんで、こうなんだろうな。犯罪者が幸せになって、遺族が苦しむ。
ほんと、不公平な世の中だよな。」
男は志保を見てそう言った。
「東の名探偵もそんな犯罪者が女なんてな。笑えるぜ。地位も名誉もあったもんじゃねぇ。」
志保はハッ、として俯く。
新一は男が言った言葉に怒りをおぼえた。
沸々と湧き上がってくる怒りを口に出した。
「っざけんな!!志保は犯罪者なんかじゃねぇ。

オメェは何も知らねぇくせに、んなこと言うんじゃねぇよ！！
志保が今までどんな気持ちで過ごしてきたかわかるか！？
組織を抜け出してから組織の存在に怯えて、
組織を潰したあとも自分が生きることに罪悪感を持って・・・。
志保に謝れ！！」
「だれが謝るかよ！そんなやつに。たとえ組織から抜け出そうが
人を殺したことにはかわりねぇんだろ？
そのくせ、自分だけ幸せになりやがって・・・
唯一の家族だった親父を殺された俺の気持ちが分かるか！？」
「そんなこと、志保が一番分かってんだよ。
幼いときに両親が死んで、組織に姉を殺されて・・・
志保はやっと幸せだと思える生活を過ごせるようになったんだ。
罪を償うために一生懸命生きてんだよ！
それに、人殺しなんて志保はしてない。
人殺しをしようとしたやつにそんなこと言われたくねーよ。

新一は今にも男に殴りかかりそうだ。
そんな新一を服部がおさえる。
「工藤くん、もういいわ。」
怒りがおさまらず、男に怒鳴り続ける新一を志保が止めた。
「よくねぇ。俺は、オメェがそういうふうに思われるのが嫌なんだよ。」
「ありがとう。でも、もういいの。
家族を殺されたときの気持ちはよく知ってるから。」
新一は志保にそう言われ、黙り込んだ。
それから5分ほどで警察が到着した。
志保は警察に手錠をはずしてもらい、４人は廃工場を出て服部の家へ帰った。

☆☆☆

帰るならまた明日でもエエんとちゃうか？」

服部の家に着き、帰る準備をしている新一に服部が声をかけてきた。

「いや、帰るよ。

これ以上、服部の家に世話になるわけにいかねぇし、

新幹線のチケットも明日取れるかわかんねーし。」

「そうか。俺んちはエエんやけど、帰りのこともあるしな。

でも、無理すんなや？

きつかったらまだ泊まってエエんやで？」

「心配すんなって。俺は大丈夫だよ。心配なのはアイツだ。」

「せやなぁ。怪我はあんまり心配ないけど心の問題やな。

和葉と話してる今も無理してるのが分かるわ。

あんだけ、言われたらなぁ。やっぱ考えるで。

とくにねーちゃんは自分のせいでお前とか周りの人が傷つくのが耐えられへんからな。

けど、工藤、何言われても絶対ねーちゃんの手ぇ離すなや？」

「あぁ。わーってるよ。それより服部、今から時間あるか？」

「え？あ、あぁ・・・どうしたんや？」

そこで、新一は服部にしか聞こえないように話す。

服部は時計を見る。

「けど、あと三時間しかないで。」

「大丈夫だって。それに、あんなとこに俺が一人で入っていくのはキツイからよ。」

「そんなとこに俺ら二人で入っていくほうがキツイわ。

まぁ、今日ぐらいお前のゆーこと聞いたるわ。

訳の分からん依頼にも付き合わせてしもたし。

ほな、行くならはよ行くで。」

志保と和葉は出掛けようとする2人にどこに行くのかたずねたが新一と服部は質問に答えず、すぐ帰ってくる、と言って家を飛び出していった。

それから二時間後、2人は帰ってきた。

そして、全ての荷物を持ち、服部の両親に挨拶をして新大阪に向かった。

「じゃぁな、志保ちゃん。今度はあたしらが東京行くわ。」
「楽しみに待ってるわ。今日はごめんなさい。私のせいで。」
「もう、そんなことエエねん！！って何回言わせんの！
志保ちゃんのせいやないんやから。次会ったときはめっちゃ楽しむで。」
和葉は笑顔を向ける。
それに志保も笑顔を見せる。
「そうね。ありがとう。受験もがんばって。」
「あたしは余裕やって。」
2人はくすくすと笑う。
「ほんなら、またな。」
「えぇ。服部くんとも仲良くね。」
志保は赤くなった和葉の顔を一瞥し、新幹線に乗った。
それから、新一と志保が乗った新幹線は東京へ走っていった。

救出（後書き）

訳わかんない話ですいません。

とにかく新一が志保を助けるところを書きたかったんです。

愛の日

新幹線に乗った新一と志保は無言で自分達の席に座っていた。
2人の間では今のような無言の時間はよくあること。
それは嫌なものではなく、むしろ落ち着くものなのだ。
しかし、今のこの時間は新一にとっては居心地が悪い。
志保もそう思っているのか、志保が新一に話かける。
「ねぇ、どうして私たちのいる場所がわかったの？」
「愛の力だな。」
新一はこの嫌な空気をかえようとこのような言葉を口にしたが
志保はただ、そう、と言って窓の外をみつめる。
照れているようでもなく、怒っているようでもなく、ただ寂しそうに。
再び無言の時間。
そして、志保が新一に顔を向ける。
「ねぇ、明日どこか出掛けない？」

志保は笑顔で言ったつもりだったが、新一には無理して笑っているのが分かった。

だがそのことには触れず、じゃぁトロピカルランドにでも行くか、と言った。

その後2人は目的地に着くまで眠った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

翌日、志保は朝早く目を覚まし、準備に取り掛かった。

いつもより明るめの服に軽くメイクをして

新一との待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所とは言っても、阿笠邸の前だが・・・。

待ち合わせ場所に行くと、もうすでに新一はいた。

「おはよう。」

「おはよう、工藤くん。」

志保は笑顔であいさつを返す。

「じゃ、行くか。」

そう言って、新一は志保の手を取り2人は歩いていく。

今日の2人は昨日のように暗い雰囲気ではなく、とても明るかった。

トロピカルランドに着くと、新一と志保は早速ジェットコースターに乗った。

何度かこのジェットコースターに乗ったが、乗る前の緊張感は何度乗っても変わらない。

ジェットコースターが頂上に到達し、一気に下る。

志保は思わず目をギュっとつぶってしまう。

それを新一に見られてジェットコースターから降りた後、軽くバカにされる。

ジェットコースターの後はお化け屋敷に入った。

新一は志保がこんなところで怖がる女じゃない、と分かっていながら以外な一面が見れるかもしれない、とかすかな希望をだいて無理やり連れて行った。

「俺が守ってやるから、心配すんなよ。」

と、いつか聞いたお決まりの台詞を言う。

それに対して志保は

「何から守ってくれるのかしら？
いくら名探偵さんでもお化けには手も足もでないでしょう？」
と、クールに返す。
結局２人は何事もなかったかのように出て行った。
その後も、昼食を食べたり、ほかのアトラクションを楽しんだりした。
最後はカップルならば当然、と言われるであろう観覧車に乗った。
新一たちが乗った時間は丁度、夕日が沈む頃でとても綺麗だった。
志保はじっとその夕日を見る。
それを見ている目は潤んでいて、今にも涙が溢れそうで。
新一はそんな志保の様子に気づいていたが気づかないふりをした。
１５分ほどの２人きりの密室空間を出て、自宅に帰る。
しっかりと手を繋いで。
もう空は日が沈み、街灯もついている。
阿笠邸の近くに来たとき、志保の足が止まる。

それにあわせて新一の足も止まる。

「工藤くん・・・話があるの。」

「・・・じゃぁ、うちの中でいいか？」

志保は黙って頷き、新一の家に足を進める。

ギィ、と重そうな音を立てて工藤邸の門が開けられ中に入っていく。

新一が家の鍵を開け、志保に入るよう促した。

家の中に入り、リビングにあるソファに向かい合わせに座る。

「工藤くん・・・あのね・・・」

ソファにつくと早速、志保が話し始める。

それを新一が自らの言葉で遮った。

「その前に、俺から話す。」

そして、机の上に小さな箱を置く。

中は見ていないが、志保はこれが何なのかわかったようで

いきなりのことに驚いている。

「ちょっと・・・これ・・・」

「開けてみろ。」

新一に言われ、中身を確かめる。

中身を確認した志保は自分の予想通りだったのか、やっぱりという顔で新一を見る。

新一は少しうれしそうだ。

だが、志保は今から自分が目の前の彼に言おうとしている言葉を考えると

その顔を見るのが辛かった。

「工藤くん・・・」

「これな、昨日服部と一緒に買ってきたんだぜ。」

新一は笑顔で言う。もう、これ以上、この顔を見たら気持ちが揺らぐ。

そう思って、志保は昨日から考えていたことを言うことに決めた。

「工藤くん！あのね・・・」

「別れ話は聞かねーから。」

「え？」

先ほどとは正反対の真剣な顔で、少し怒りを含んだような口調で言

う新一。

「話って、俺と別れるってことだろ？

昨日のあの男の言葉を聞いて決めたんだろ？」

「な・・んで」

「わかんだよ。オメェの考えてることは。

今日のデートだって、最後の思い出作りとかそういうやつだろ？」

「だったら、話さなくてもわかるわよね。

私と・・・私とわかれ・・・」

「嫌だ。」

新一は志保の言葉を遮る。

「だって、あなた、犯罪者の私といたら

あの人の言ったとおり地位も名誉もなくなるのよ？

せっかく今まで努力してきたのに。

私は私のせいでこれ以上工藤くんにツライ思いはさせたくないの！」

「そんなことで俺の地位も名誉もなくなるくらいならんなものいらねぇ。
俺は、志保が俺の横からいなくなるほうがよっぽどツレェよ。
それに、何回も言っただろ。
お前は犯罪者なんかじゃねぇ。
幸せにならねぇといけねぇ、って。」
「だけど、あの組織のせいで、私のせいで死んだ人がいるのに
自分だけ幸せになんてなれるわけないじゃない！
それに、また昨日みたいなことがあるかもしれない。
もう私のせいであんなことにはなりたくないの！」
志保は声を荒げる。
すると、新一が志保の前に来て
パチンッ！！
乾いた音がリビングに響いた。
志保は自分の頬を触る。
しばらくして志保は新一に頬を叩かれたのだと気づいた。

「いい加減にしろ！オメェはいつもいつも自分のせいでって！
幸せになったらいけないだと！？
ふざけるな！！
お前の幸せを心から願ってたやつのことも考えろよ。」
志保は必死で目から流れてくるものを止めようとするが、瞬きをするたびに大粒の涙が流れてくる。
「そんなことわかってるわよ。
でも、私は人を傷つけてまで幸せになんかなりたくないのよ。
唯一、私の幸せなことは私の大事な人が幸せになること。
工藤くんが幸せになること。
幸せになれって言うならその幸せくらい叶えてよ。」
志保は涙を流しながら新一にむかって怒鳴り返す。
そんな志保を新一はぎゅっと抱きしめる。
腕が折れるのではないかというくらい力強く。
「俺の幸せは志保が俺の横でいつも幸せそうにしてくれること。

ただそれだけだ。

地位や名誉なんか捨てたっていい。

俺に必要なのは志保だ。

ずっと、言ってきただろ？守ってやる、って。

もし、また昨日みたいなことがあってもオメェを守ってやるから。

俺が死ぬまでずっと守ってやるから。

俺に任せろよ。俺に頼れ。

それでも、俺と別れたいって言うならちゃんとした理由を言ってくれ。

俺のことが嫌いだとか、ほかに好きなやつがいるとか。

そういう理由じゃねーと俺は別れねぇから。」

「嫌い・・・なんて・・・・」

「言えねーか？」

「そんなこと嘘でも言えないわよ。」

「じゃぁ、ほかに好きなやつは？まぁ、いるって言ったらそいつ一発殴りに行くけどな。」

新一はそれはない、と信じているようで小さな笑みを浮かべている。

「残念だけど、いるわよ。ほかに好きな人。」

その言葉を聞いた瞬間新一の顔が青ざめる。そして、一気に怒りの表情へと変わる。

新一は志保を自分の体から離し、目線を志保に合わせる。

志保はさっきまで泣いていたが今は新一の反応を楽しんでいるようだ。

「誰だよ。」

「内緒。」

「おい！！まさか快斗とか言うんじゃねーだろーな？」

新一が志保の両肩を掴み、勢いよく揺さぶる。

「違うわよ。」

「じゃぁ、誰だ？クラスのやつか？」

「・・・博士よ。私の大事なお父さん。」

新一からのしつこい質問にふぅ、とため息をついて

仕方なく答える。

志保の答えを聞いて、新一はなんだ、と一言。安心したようだ。
「博士を殴りにいくのかしら？」
「んなことするかよ。オメェの大事な父親を。
それに、好きの意味が違うだろ？
俺の方は《愛してる》のほうだろ？」
「ずいぶん自信過剰じゃない。でも、そうね。
私の工藤くんへの想いはいつの間にかそんな言葉で表せるほどになったのね。」
志保は寂しそうに微笑む。
「それじゃぁ、俺ともう別れられねーな。理由がないわけだし。
俺のこと愛してくれてるし。
だから、俺と結婚してくれ！」
「は？」
「俺たちが高校卒業したら、結婚してくれ。」
とつぜんのプロポーズに戸惑う志保。

そして、さっき渡された小さな箱を見る。

（あれってもしかして婚約指輪だったの？）

「そうだよ。あれは婚約指輪だ。もらってくれるか？」

志保の思ったことを読み取るかのように新一は言った。

その新一はさっきの自信過剰な新一ではなく、不安な顔をした新一だった。

（この指輪をもらうって事は工藤くんと結婚するってことになるのよね。

それで本当に彼は幸せになるのかしら。）

「俺の幸せが志保の幸せだろ？叶えてほしいんだろ？

だったら俺を幸せにしてくれよ。これはお前しかできねーよ。」

「ほんとに私でいいの？後悔するわよ。絶対。」

「なんで言い切んだよ。俺は後悔なんてしねーよ。

今までだって志保と付き合って後悔したことねーし。

俺はお前じゃねーと嫌だよ。

だから、一緒に幸せになろうぜ。」

志保は新一の言葉に涙を流す。さっきとは違う嬉し涙を。

そして・・・

「これからも私を幸せにしてね。探偵さん。」

と言って、泣きながら微笑んだ。

プロポーズの返事を聞いた新一は指輪が入った箱を開け、

志保の薬指に指輪を通した。

その瞬間、2人の唇が合わさった。

長く、長く。愛を確かめるように。

愛の日（後書き）

サブタイトルを《プロポーズ》にしようと思ってたんですが

それじゃぁネタバレだろ・・・

ということで愛の日にしました。

そろそろこの話も終わりかな。

旅行？

ＲＲＲＲＲＲ・・・・ＲＲＲＲＲＲＲ・・・・

ＡＭ６：３５

新一の携帯の音が部屋に響きわたる。

「ん？誰だ・・・こんな朝早く。」

目をこすりながら携帯の通話ボタンを押し、耳に当てる。

「はい。」

すると、電話のむこうから賑やかな声が聞こえてきた。

「おおー、工藤。俺や俺。」

「ゲッ！服部！？」

「せや。久しぶりやのー。」

「久しぶり、って２日前に会ったばっかりじゃねーか！！

しかもなんなんだよ。こんな朝早く・・・」

服部のせいで貴重な睡眠時間を失って機嫌の悪い新一。

しかし、そんなことは気にせず服部は話続ける。

「機嫌悪いやっちゃなぁ。なんや、やっぱりねーちゃんとアカンかったんか？

ほんなら俺が話聞いて慰めてやるさかい。

ん？ゆーてみ、工藤。」

「俺が機嫌わりぃのはお前のこの電話のせいだ！

それに何で俺が志保と別れたことになってんだよ。

ちゃんと昨日話してこれからのことも・・・・」

「これからのこと？」

「結婚だよ。」

「は？け・・・けけけけけ結婚やと！？」

とてつもない大ききな声が新一の耳に入ってくる。

服部に言ったあと、こいつに言わなければよかった・・・と後悔した。

服部の声が携帯を通して部屋中に広がる。

「うるせーよ。

たく、お前もこの間指輪買いに行っただろ？

あの時ちゃんと婚約指輪買うって言ったじゃねーか。」

電話のむこうではあのときの指輪が・・・と、なにやらブツブツ言っているのが聞こえる。

そのとき新一の横で小さな声がした。

「工藤・・・くん？」

志保は布団の中で体を丸めて新一の様子を見ていた。

「え？あ、はよ。わりぃ。起こしちまったみてぇだな。」

志保に一言言って再び携帯を耳に当てる。

「オメェのせいで志保まで起きたじゃねーか。」

「起きた・・・って、お前ら一緒に寝とったんかい！

いやらしいことでもしとったんか？」

「してねーよ。」

「ほんまか・・・？

で、結婚ってなんやねん。なにがどうなってそんなとこまで話が進んでんねん。」

「別に何も問題ねーだろ。

俺らだってもう結婚できる歳だし、いつかは結婚するんだから
わざわざ遅くする必要ねーだろ。
あ、志保・・・」
志保は朝食を作ってくる、と言って部屋を出て行った。
「ん？ねーちゃん、どないした？」
「なんでもねーよ。で、もういいか？言うことは言ったから切るぞ。
」
「まっ、まま待てや。俺、まだなんも聞いてへんで。
式はいつや？結婚して大学はどうするんや？」
「まだ決めてねーよ。まだ父さんや博士にも言ってねーから。
決まったらまた知らせる。」
「そうか。まぁ、よかったやないか。おめでとう。」
「あぁ。ありがとな。問題は博士だけだよ。
志保のこと本当の娘のように思ってるからな。
反対されなきゃいいけど・・・。」

「せやなー。あのじいさん、ねーちゃんのことほんまに好きやからなぁ。

工藤も一発殴られるかもしれへんな。」

「おい・・・こえーこと言うなよ。」

「ハハ、ほながんばれやー。またな。」

そう言って、服部は電話を切った。

新一は携帯を閉じ、朝食を作っているであろう志保のもとへ向かった。

リビングに行くと、テーブルの上にはすでに朝食が並べられていて志保はいすに座りテレビを観ていた。

「あら、もう終わったの？」

「あぁ。アイツ、結婚のこと言ったら大騒ぎしやがってよ。

朝っぱらからうるせーんだよ。」

「ほんと朝から元気だったわね。服部くんのおかげで目が覚めたわ。」

新一も志保の向かいのいすに座る。

そして、いただきます、と言い味噌汁に箸をつける。

布団からでてすっかり体は冷えてしまったが、温かい味噌汁を飲んであったまる。

（うめーな。）

結婚したら毎日志保の手料理が食べられると思うと、思わず顔がにやける。

「何よ。ニヤニヤして。」

「いや、うめーなと思ってよ。

結婚したら、毎日食べられるんだよな。」

「今までだってほぼ毎日食べてたじゃない。」

「けどよ、やっぱ夫婦になるとちがうんじゃねーか？

俺が仕事から帰ってきたら夕飯が出来上がってて、志保の料理を食べて

一日の疲れをとる、みたいな。

早く結婚してーな。

そうだ。今日、博士んとこ行くか？俺、やっぱ殴られたりすんのかな？」

新一は一人で浮かれている。

いつも推理しているときの顔とは大違いだ。
そんな新一に対して志保はどこか暗い。
「どうした、志保？」
「ねぇ、工藤くん・・・」
「ちょちょ、ちょっと待てよ。」
志保は首をかしげる。
「なに？」
「ちょ・・・やめてくれよ。その『ねぇ、工藤くん・・・』ってゆーの。
志保がそうやって話し始めるときの話ってあんまりいいことねーんだよ。
もしかして、結婚はしない、とか言うんじゃねーだろうな。」
「そうよ。」
「あたりかよ。で？理由は？」
「イギリスに行きたいから。」
「え？イギリス？旅行か？」

そこで、志保は一つため息をつく。

「旅行くらいならこんなこと言わないわよ。」

「じゃぁ、旅行じゃねーってことはあっちに住むってことか？」

「えぇ。

この間、ジョディ先生から電話がかかってきたの。

私たちが昔住んでいた家が見つかった、って。

それで、最初は行くかどうか迷ったけど、シャロンにもらった写真を見て思ったの。

幼いころの私があんなに無邪気に笑えるくらい家族に愛してもらってたのに

私はそのことをほとんど覚えてない。

だけど、私たちが住んでいた家や街に行ったら何か思い出せるかもしれないって。

大切にされてたのに何も覚えてないなんて両親に悪いでしょ？

それに両親のお墓はあっちにあるらしいし。

だから、決めたの。私はイギリスに住むわ。」

新一は志保の話を黙って聞いていた。
志保の目はしっかりと一点を見つめている。
志保に、迷いはないようだ。
それを確認して新一は残った味噌汁を飲みきる。
「それはずっとか？」
「何年かしたら帰ってくるわ。博士もほっておけないし。
だけど、どれくらいいるかは決めてない。」
「それなら、結婚してからでもいいんじゃねーの？」
「だめよ。いつ帰ってくるか分からないのよ。結婚してあなたを縛りつけたくないわ。」
「俺に志保の帰りを何年も待たせる気かよ。」
「だから、結婚は出来ないって言ってるのよ。」
「そーじゃなくて！！俺もオメェと一緒に行くって言ってんだよ。」
「あなた、大学があるでしょ？それに一人前の探偵にもなるんでしょ？
私のせいで工藤くんが夢を諦めるなんて嫌よ。」

「だれが諦めるんだよ。
俺は大学はそれほど行きたいとは思ってなかったし
探偵なら海外でもできるだろ。
それに、日本だけでなく世界でも通用する探偵になりてーし。
あと、なんといってもオメェと離れたくないっていうのが一番の理由だな。」
新一はニッ、と歯を出して笑う。
「あなた卑怯ね・・・。」
「そうだよ。俺は卑怯な男だからどんな手を使っても志保と一緒に行くぜ。
というわけで結婚は卒業後でいいな。」
「ほんとにいいのね？それで。」
「あぁ。だから早く用意して博士のところ行こうぜ。」
話が一段落したところで新一は残りの朝食を勢いよく腹にいれ込んだ。
その様子を志保はうれしそうに眺めていた。

旅行？（後書き）

全然話が思いつかなくて、久しぶりに書きました。

私的にはこの話満足してません・・・

いつか大幅に編集するかもしれません。

報告（前書き）

12月～1月

報告

「「「・・・・・」」」

広いリビングに静かな空気が流れる。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。

ソファには白髪頭の老人とその向かいに黒いスーツを着た若い男性、

その横には綺麗な花柄のワンピースを着た女性がいる。

長い沈黙の後、白髪頭の老人、阿笠博士が口を開いた。

「今の話は、本当かね？」

その質問にスーツ姿の男性、工藤新一と

その横に座っている女性、宮野志保はゆっくりと頷いた。

「じゃが、その歳で結婚となると大変なことがたくさんあるんじゃないか？」

そう。今、新一と志保は志保の親と言っても過言ではない博士に

結婚の許しをもらおうと阿笠邸に訪れているのだ。

2人は慣れ親しんだこの家も、今日ばかりは中に入るのにかなり勇気がいった。

しかし、これはいつかは通らなければならない道である。
新一はこれからも志保と一緒に生きていくために勇気を振り絞って言った。
「確かに、まだ俺らは若いし大変なこともあると思う。
けど、そのときは2人で乗り越えるさ。
今までだってたくさんの試練を俺達は乗り越えてきたんだ。
だから大丈夫だよ。」
そうは言ったが博士の表情はまだ硬い。
「志保君はどうなのかね？新一君と結婚する、ということはなにかを犠牲にすることもあるじゃろう。その覚悟はあるのかね？」
「えぇ。」
「志保君が大丈夫と言うのなら大丈夫じゃろうが、
君達2人はおとなでもあり、子供でもある。
時には人を頼ることも大切じゃぞ。
特に志保君は何でも1人で抱え込む癖があるからのぉ。

新一君がちゃんと助けてやってくれ。」

「あぁ。約束する。」

「それじゃぁ、いいの？博士？」

「わしは構わんよ。２人が決めたことなら何も文句は言わん。

その代わり、新一君が嫌になったらすぐにこの家に帰ってきなさい。」

「ふふっ・・・そうさせてもらうわ。」

「おい。」

１人、焦った顔をした新一の横で博士と志保はその様子を楽しむかのように笑っている。

「あ、博士。あともう一つ言わないといけないことがあるんだ。」

「ん？なにかね。」

「実は、俺達結婚したらすぐイギリスに行こうと思う。」

「？？それは新婚旅行かね？いいのぉ、イギリスか。わしも一度は行ってみたいのぉ。」

羨ましいの、と言う博士を横目に新一は首を横に振る。

「まだどれくらいいるかはわかんねーけど、しばらくは向こうに住むつもりだ。」

「何！？イギリスに住むつもりなのか？

そうか・・・。寂しくなるがこれも2人で決めたことなら仕方なかろう。

わしは何も口出しはせんぞ。」

寂しそうな博士を見て志保が言った。

「博士、私達と一緒に暮らさない？

それなら私達も安心だし、

向こうにはお父さんが研究に使っていた部屋や器具も残ってるみたいだし・・・」

すると今度は博士が首を横に振った。

「志保君たちの気持ちはうれしいんじゃが、わしは長い間この町に住んでいたからのぉ。

この町から離れたところで暮らすというのは勇気がいるもんじゃ。

だからその話は気持ちだけもらっておくよ。」

「でも・・・」

「大丈夫じゃよ。わしはわしで楽しくやるつもりじゃ。
そんな心配してないで新一君の両親にもこのことを言わないといけないんじゃないかね？」
「博士、ありがとう。」
そう言った志保は綺麗に微笑んだ。
その後、新一は海外にいる両親に電話で話した。
新一の母親である有希子は「志保とけっこ・・・」
まで聞くと、新一の言葉を遮りおめでとう！！と祝福の言葉を贈った。
（ったく、最後まで言わせろよな・・・）
「やっぱり優作の言うとおりだったわね。
近々志保ちゃんのウェディングドレス姿が見れるっていうのは。
とうとう私にも娘ができるのねー♪
ふふふ。次は孫かしら？でも、まだこの歳で『おばぁちゃん』なんて呼ばれたくないわ。」
有希子は1人で勝手に盛り上がっている。

新一は電話に向かってはえーよ、と言いながら顔をほんのり赤く染めていた。

ようやく有希子が落ち着いてきたところで電話の相手は優作に代わった。

優作は「幸せにしてあげなさい。おめでとう。」

と一言言っただけだった。

（サンキュー、父さん。）

☆☆☆

「しんいちーー！！しほーーー！！」

名前を呼ばれた2人が後ろを振り向くと、息を切らした女子高生2人がいた。

「蘭、園子・・・おはよ。久しぶり、だな。2学期以来・・・」

「あーーーー！！！！ほんとだったんだ！和葉ちゃんの言ってたこと！！」

「はぁ？」

「ちょっと！なんで私達に言わなかったのよ！！新一君も志保も！！」

園子が新一と志保を交互に睨む。

「なんだよ。朝っぱらから・・・しかも新年そうそう。」

新一がそう言うと、園子の横にいた蘭も2人に詰め寄る。

「なんだよ、じゃないでしょ？

どうして、私達に2人が結婚するってこと言わなかったのよ。

昨日の夜に和葉ちゃんから電話で聞いたんだから！

その指輪だって婚約指輪でしょ？」

（服部・・・勝手に言いやがって。）

そして、その日一日は蘭と園子にプロポーズの言葉や
冬休みの出来事など質問尽くしの新一と志保だった。

報告（後書き）

久しぶりで、自分が今までなにを書いていたか忘れました。

この話も前回同様、あまり気に入ってないです。

復活！　探偵団

「あーいちゃん！明けましておめでとう。」

「あら、歩美ちゃん。」

「灰原さん、お久しぶりです。」

「よ！元気だったか？」

「円谷君も小嶋君も久しぶりね。」

志保が学校から帰っている途中、子供達3人に声をかけられた。

その3人は今でも、志保のことを『灰原哀』と呼んでいる。

周りに彼女の事情を知らない人がいるときは『志保おねーさん』と器用に使い分ける。

ちなみに新一のことも志保同様、『江戸川コナン』と呼ぶことがある。

歩美いわく、

哀、コナン、と呼ぶと少年探偵団が5人だったころに戻る様で

見た目が変わってもこの呼び方が自然なんだ、と言う。

志保も灰原哀から宮野志保に戻り、
小さな探偵たちから灰原哀の名前が呼ばれなくなることに少し寂しさを抱いていたため
今のようにたまにでも昔の名前で呼ばれるとうれしくなるのだ。
「今日はどうしたの？3人でどこかへお出かけ？」
志保がそう問うと、自称少年探偵団のリーダー、小嶋元太がニヤッと笑って
一枚の紙を志保に見せた。
そこには《僕の家で飼っている猫をさがしてください。》と書かれていた。
「少年探偵団の俺達に依頼がきてんだ！今は捜査中なんだぜ？」
「そうだ！！哀ちゃんも一緒に探して？
いつもこういう探し物の依頼は結構すぐに見つかるんだけど
今回の依頼のワンちゃんはなかなか見つからないの。」
お願い、と両手を合わせて志保に頼む歩美の姿はかわいらしい。
こんなことをされるとどうしてもいいわよ、と答えてしまう。
「よし！じゃぁ、少年探偵団復活！！」

「復活！って・・・今までも続いてたじゃないですか。」
「ちがうよ。哀ちゃんを含めた探偵団だよ！」
「なるほど。それならコナン君も必要ですね。」
「そうだな、灰原。今日コナンはいねーのか？」
「今日は学校が終わった後、いつもの探偵さんにお呼び出しもらってたわ。」
志保の言ういつもの探偵さん、とは一年ほど前に《眠りの小五郎》と世間を騒がせた？
あの探偵のことだ。
新一は度々目暮警部や毛利探偵に呼び出しを受ける。
今日も、授業終了のチャイムが鳴ったと同時に教室を出て行った。
「コナン君、姿は変わっても中身は全然変わりませんね。」
「ったくよー、事件ばっかだなあいつは。」
「でも、哀ちゃんはそんなコナン君を好きで結婚するんだよね？
この指輪は婚約指輪でしょ？」
「「結婚！？指輪！？」」

光彦と元太は驚いて自分達よりも背の高い志保の顔を見上げる。
「灰原さん、コナンくんと結婚するんですか？」
「そうだぜ！おめーらも見に来いよ。灰原のウェディングドレス姿。」
「あ！！」
彼らのもとへやってきた人物は志保の目を後ろから隠した。
「だーれだ！！」
その人物は子供達にシー、と人差し指を自らの唇にあてている。
志保はあきれつつ
「黒羽くん。」
と、冷めた口調で言った。
子供達3人はえ？と首をかしげる。
「おい。」
「冗談よ。こんなことするのはあなたしかいないでしょう。江戸川君？」
「正解。」

そう言って新一は志保の目を開放する。

「よ！！オメーら久しぶりだな。」

「コナン君！！」

「事件は解決したんですか？」

「あぁ。サクサクっとな。」

「それじゃぁ・・・」

「少年探偵団、完全復活ですね！」

「だな！」「だね！」

（俺らはもう少年じゃねーよ）

「それにしても結婚ですか。いいですね。」

「ほんとだよ。コナン君と結婚するのは歩美だと思ってたのに。」

「歩美ちゃんにはもっと素敵な人がいいわよ。ほら、円谷君とか小嶋君とか。」

（俺は光彦や元太以下かよ・・・）

赤くなる光彦と元太とは逆に何かを睨むような目をした新一。

「「「少年探偵団、出発！！」」」

復活！　探偵団（後書き）

意味分かりません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6636w/

探偵たちの幸せな人生

2011年11月8日03時03分発行